Paradise Books 2

うるていめいと

Ultimate

詰将棋5手詰作品集



山田 康平

Kohei YAMADA

1

△角金銀

3

△金

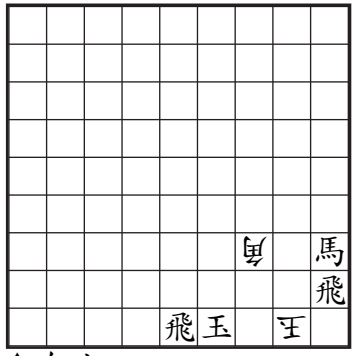
2

△角

4

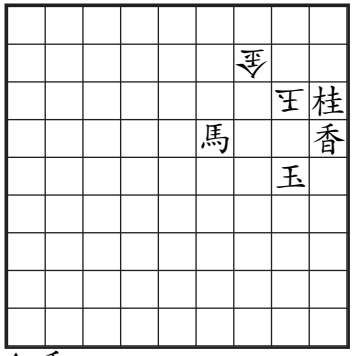
△金銀

5



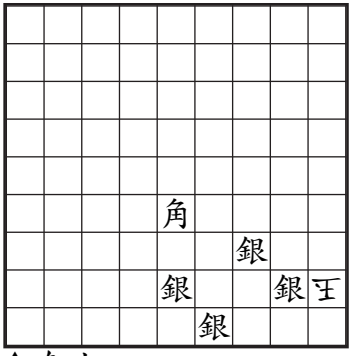
△なし

7



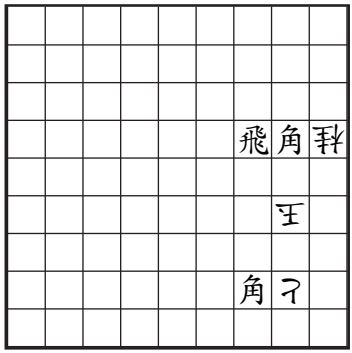
△香

6



△なし

8



△銀

9

△金

11

△桂

10

△金

12

△銀

13

△桂

15

△飛

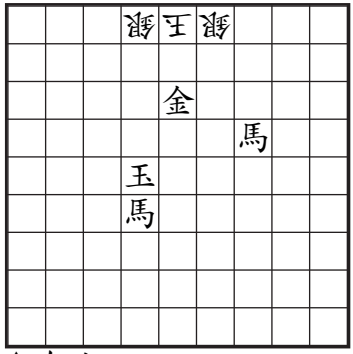
14

△銀

16

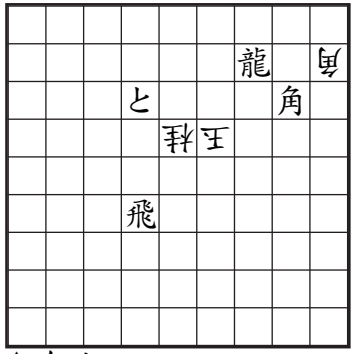
△角 金

17



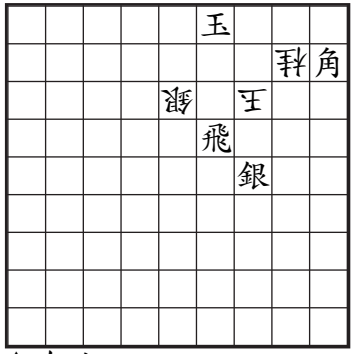
△なし

19



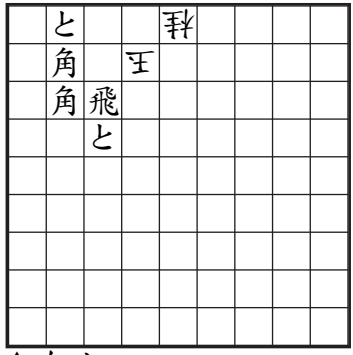
△なし

18



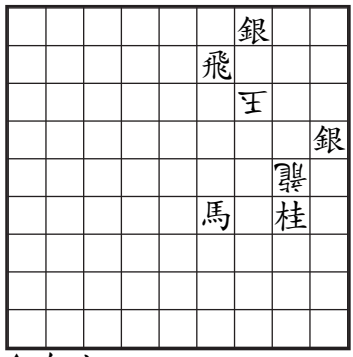
△なし

20



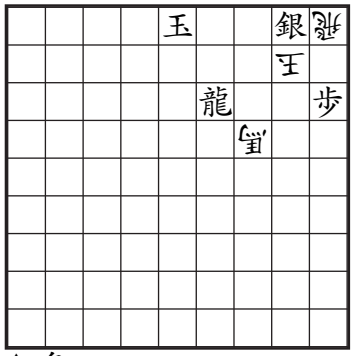
△なし

21



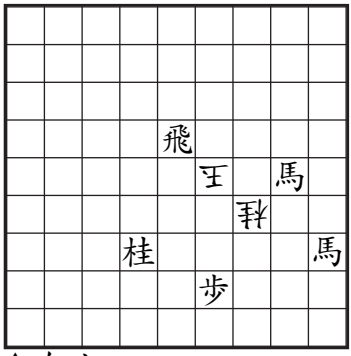
△なし

23



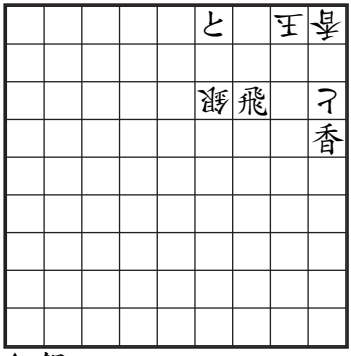
△角

22



△なし

24



△銀

25

△角

27

△金

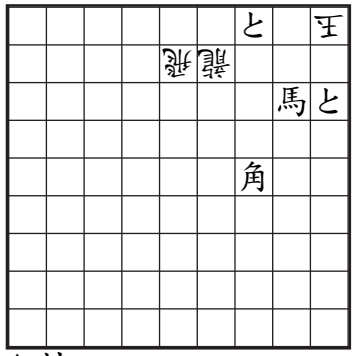
26

△香

28

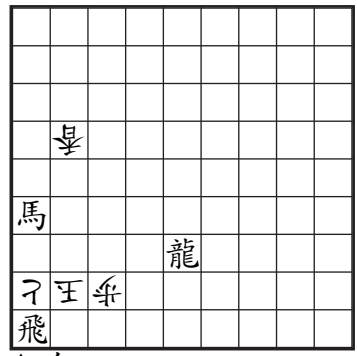
△飛

29



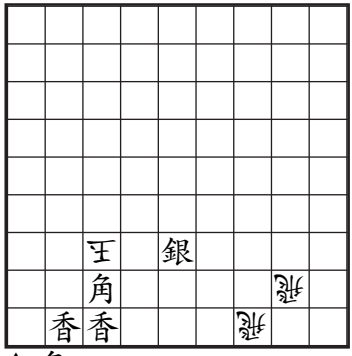
△桂

31



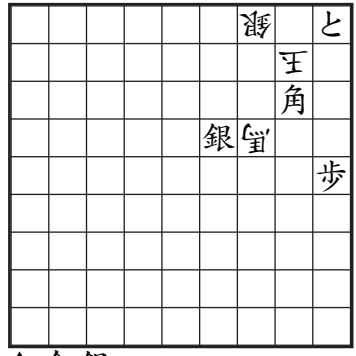
△金

30



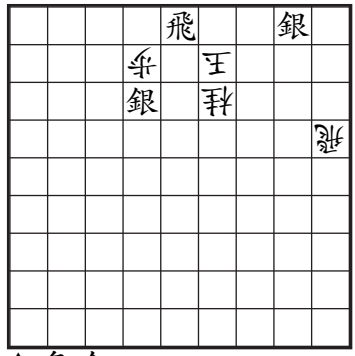
△角

32



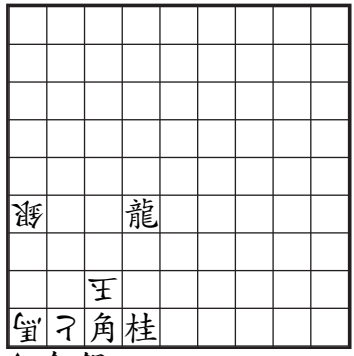
△金銀

33



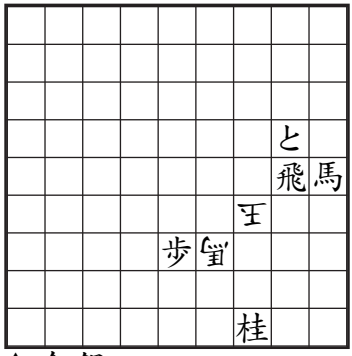
△角 金

35



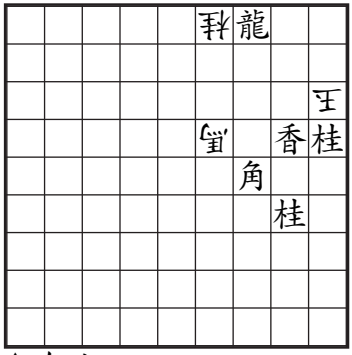
△金銀

34



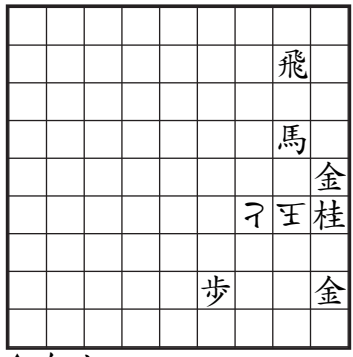
△金銀

36



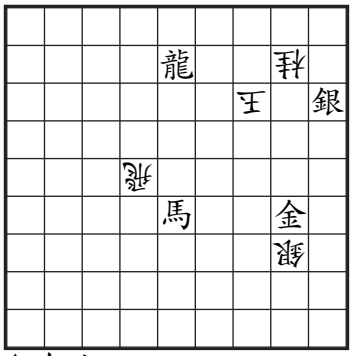
△なし

37



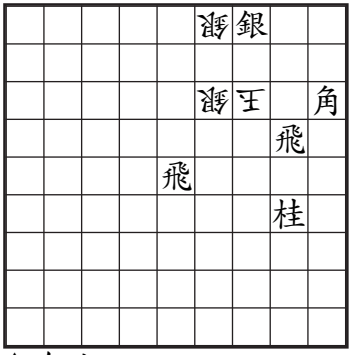
△なし

39



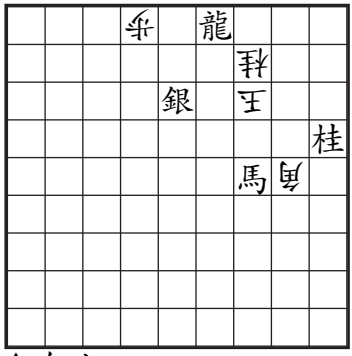
△なし

38



△なし

40



△なし

41

△なし

43

△なし

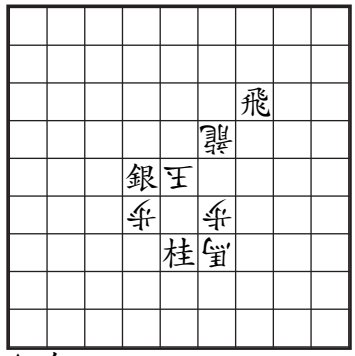
42

△なし

44

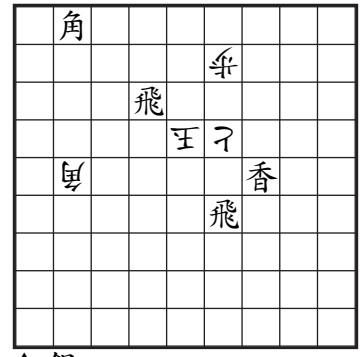
△銀

45



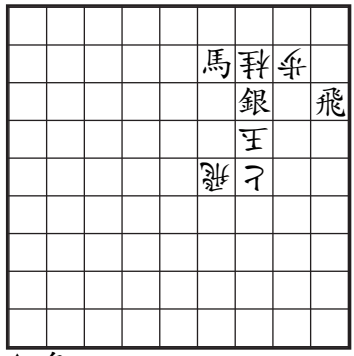
△金

47



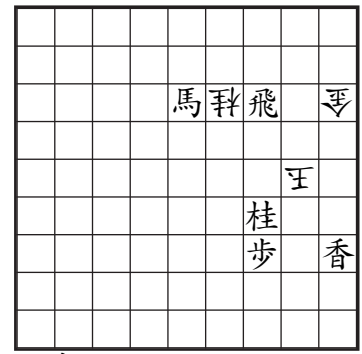
△銀

46



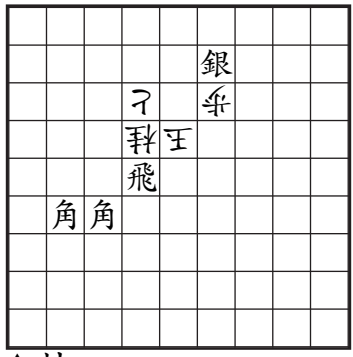
△角

48



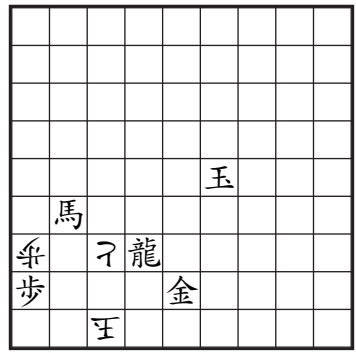
△歩

49



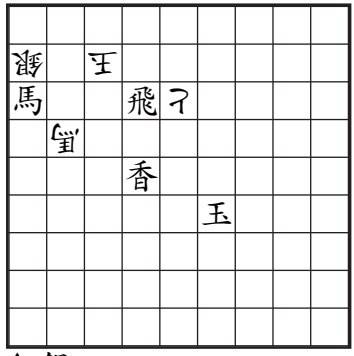
△桂

51



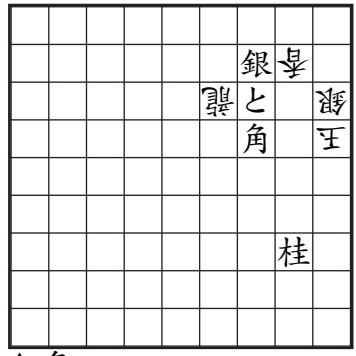
△銀

50



△銀

52



△角

53

△角 金

55

△飛 銀

54

△飛 金

56

△金 桂

57

△金桂

59

△なし

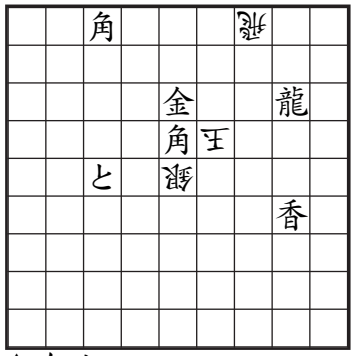
58

△角銀

60

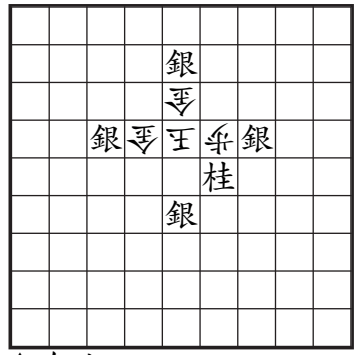
△なし

61



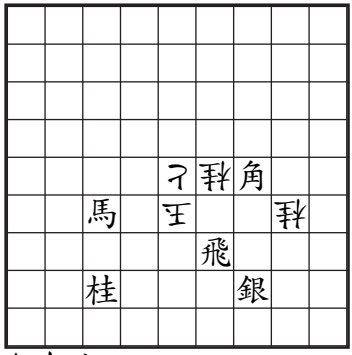
△なし

63



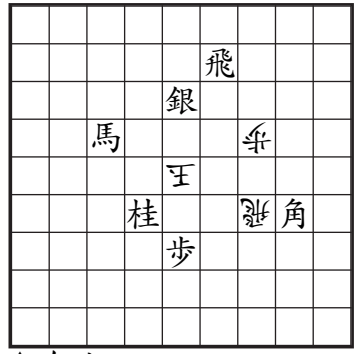
△なし

62



△なし

64



△なし

65

△なし

67

△なし

66

△なし

68

△桂

69

△金

71

△桂

70

△飛

72

△飛

73

△歩

75

△金金

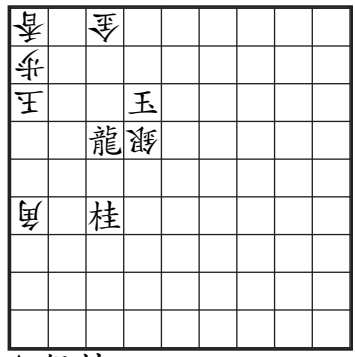
74

△香

76

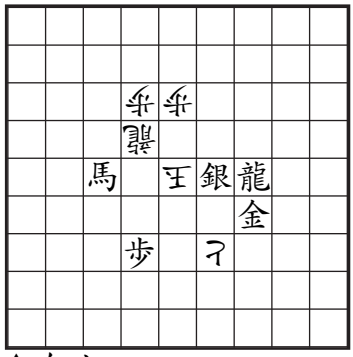
△金桂

77



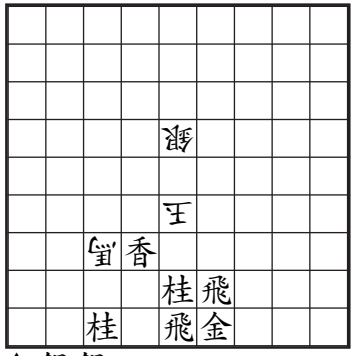
△銀桂

79



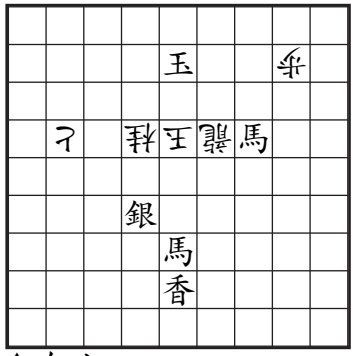
△なし

78



△銀銀

80



△なし

81

△なし

83

△なし

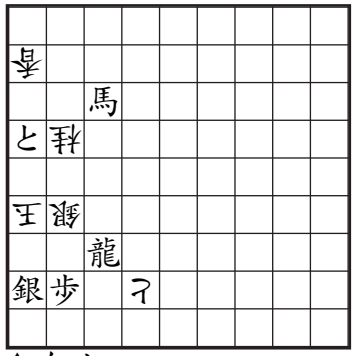
82

△なし

84

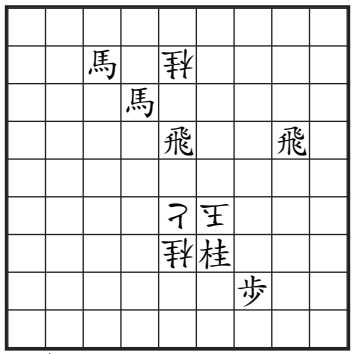
△なし

85



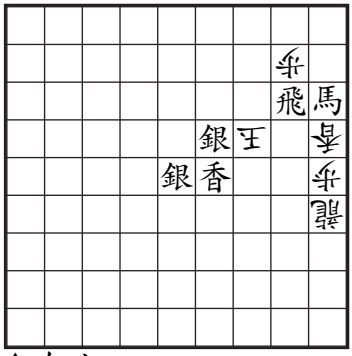
△なし

87



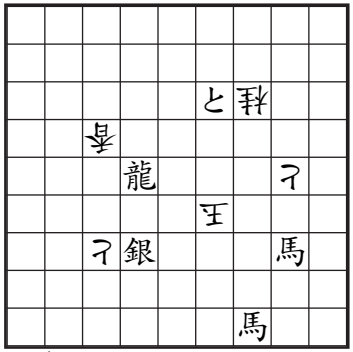
△なし

86



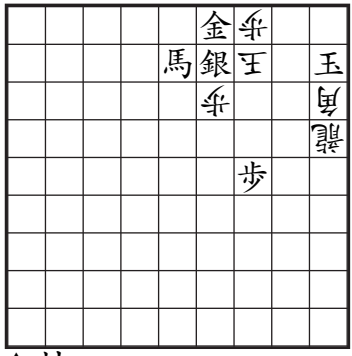
△なし

88



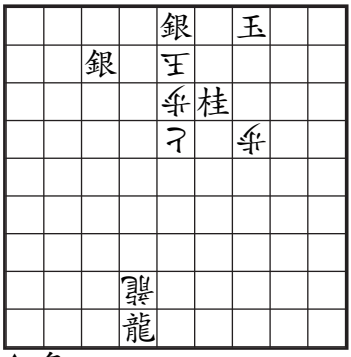
△なし

89



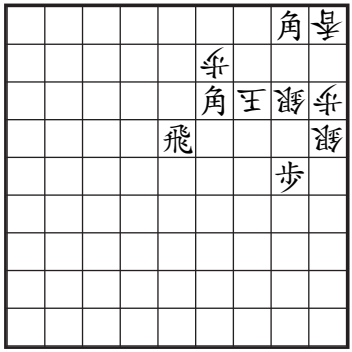
△桂

91



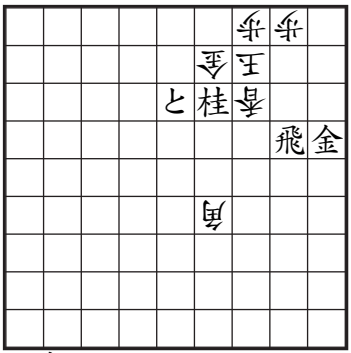
△角

90



△銀

92



△角

93

△金

95

△金

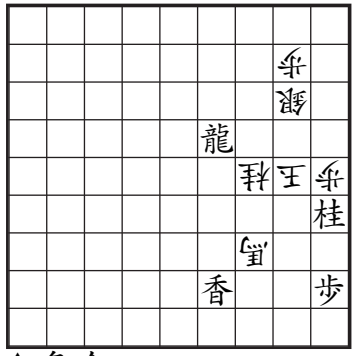
94

△角

96

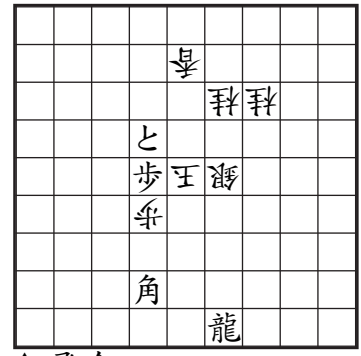
△銀

97



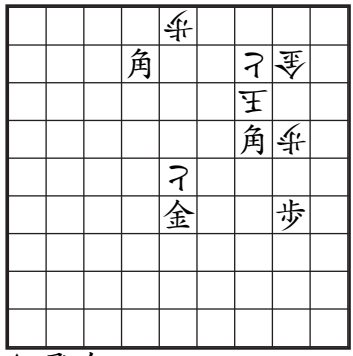
△角 金

99



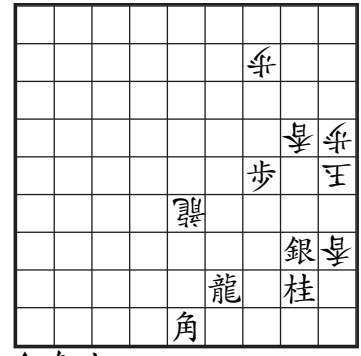
△飛 金

98



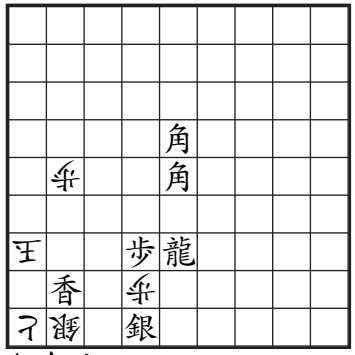
△飛 金

100



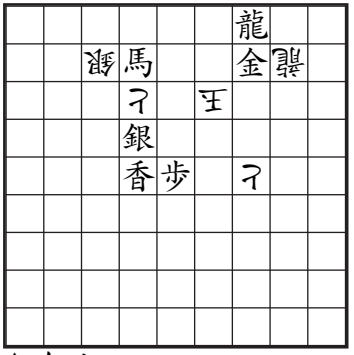
△な し

101



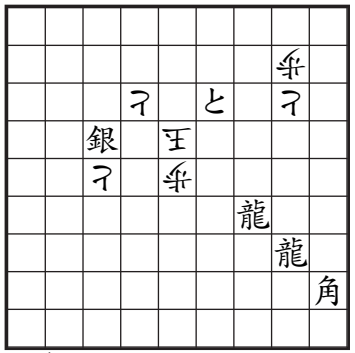
△なし

103



△なし

102



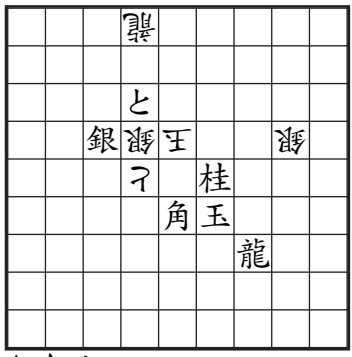
△なし

104



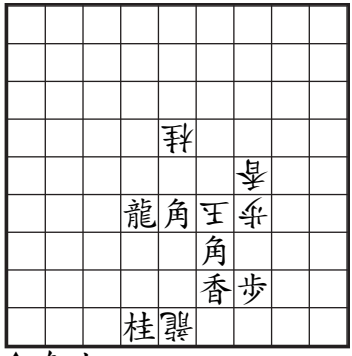
△なし

105



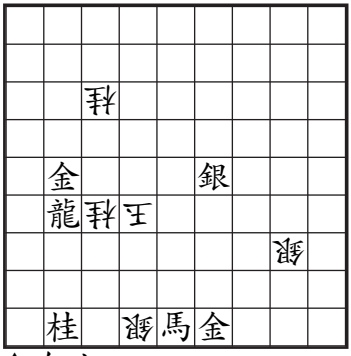
△なし

106



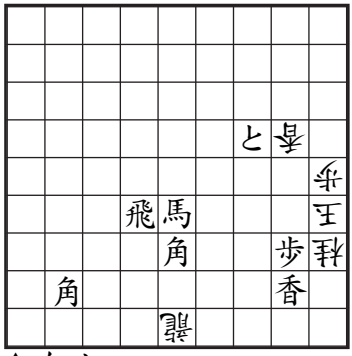
△なし

107



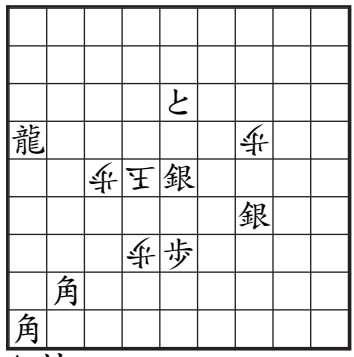
△なし

108



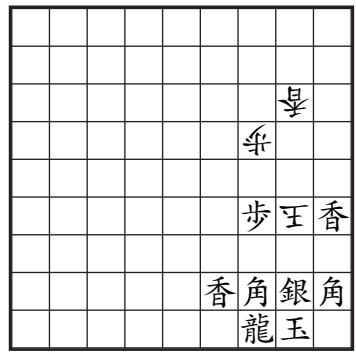
△なし

109



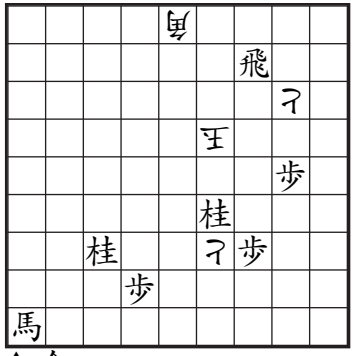
△桂

111



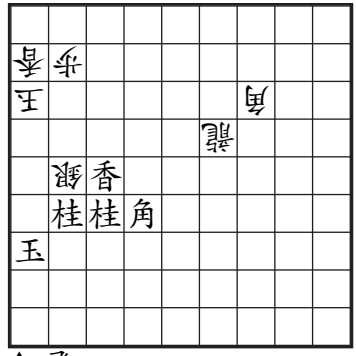
△銀

110



△金

112



△飛

113

△金

115

△金

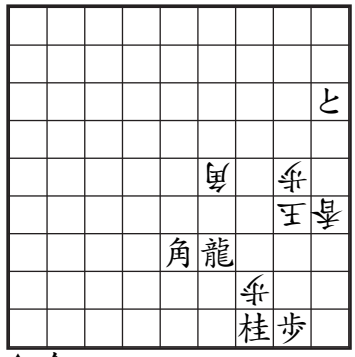
114

△飛

116

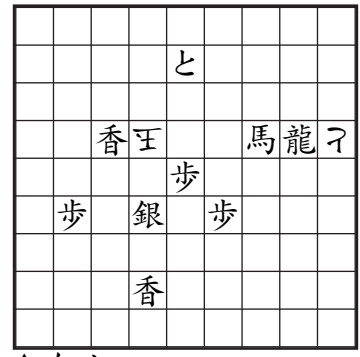
△角

117



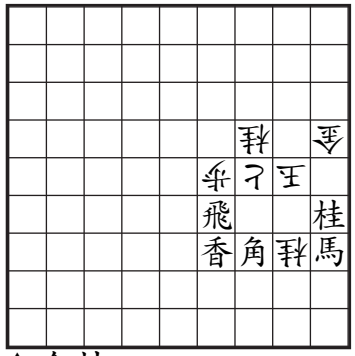
△金

119



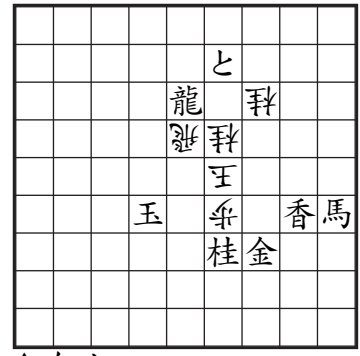
△なし

118



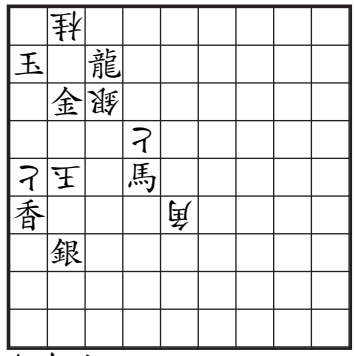
△金桂

120



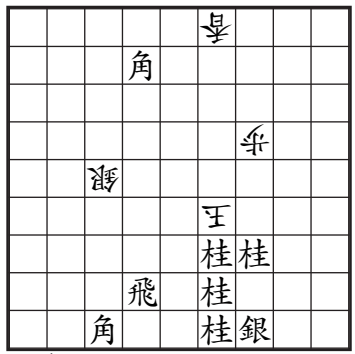
△なし

121



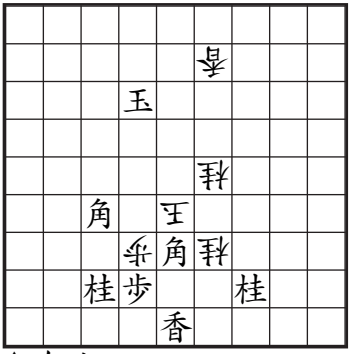
△なし

123



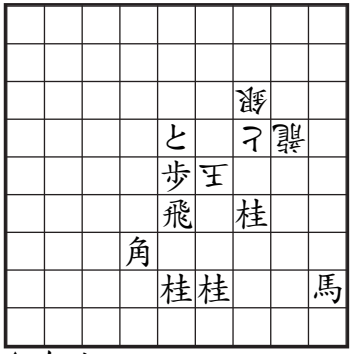
△なし

122



△なし

124



△なし

125

△なし

127

△金

126

△角

128

△角

129

△飛

131

△飛香

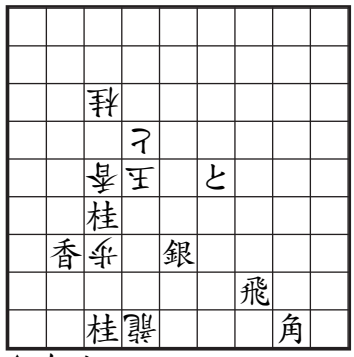
130

△桂

132

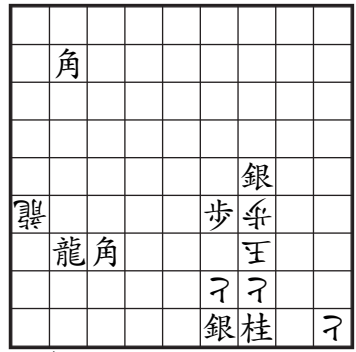
△香香

133



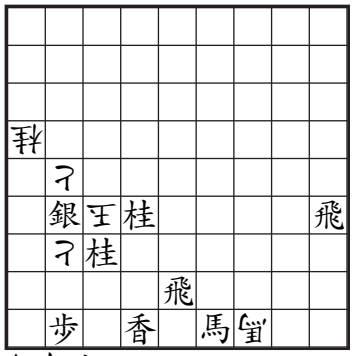
△なし

135



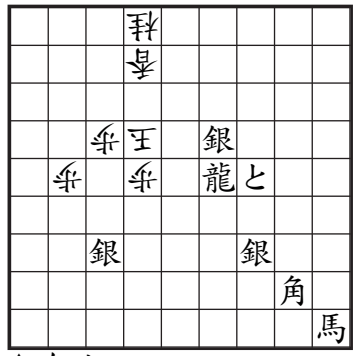
△なし

134



△なし

136



△なし

137

△銀

139

△飛

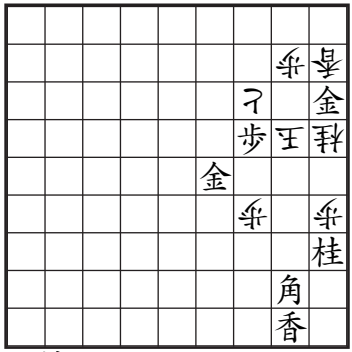
138

△金

140

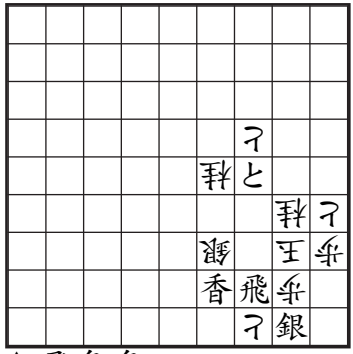
△飛

141



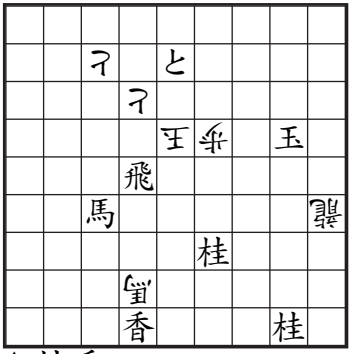
△桂

143



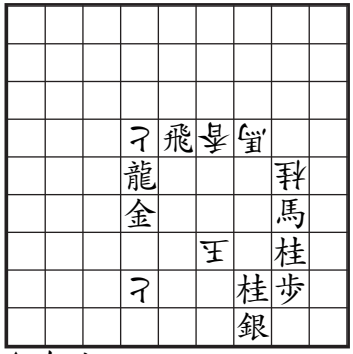
△飛角角

142



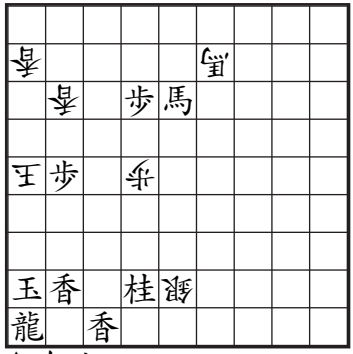
△桂香

144



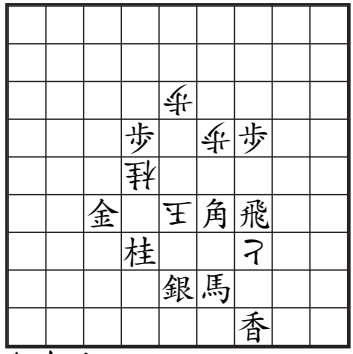
△なし

145



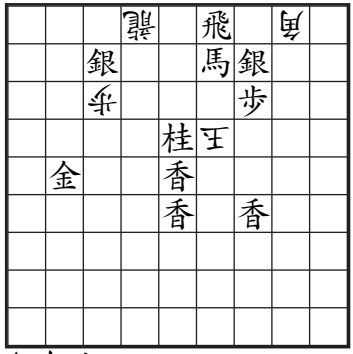
△なし

147



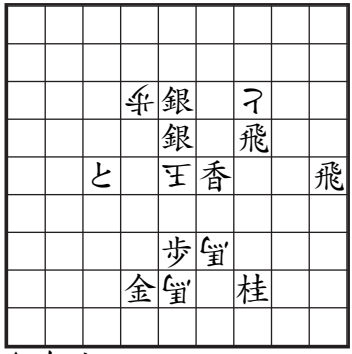
△なし

146



△なし

148



△なし

149

△なし

151

△なし

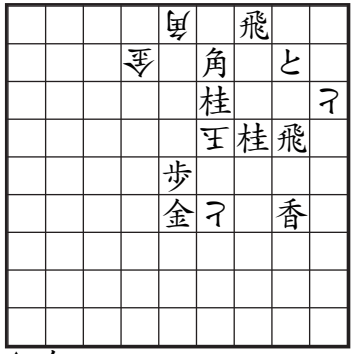
150

△なし

152

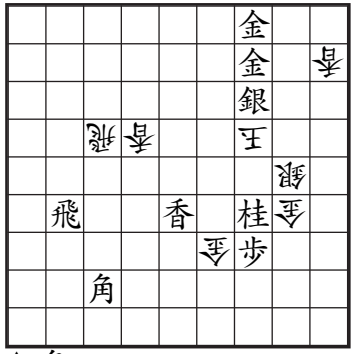
△金

153



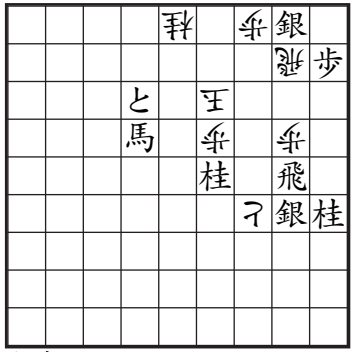
△金

155



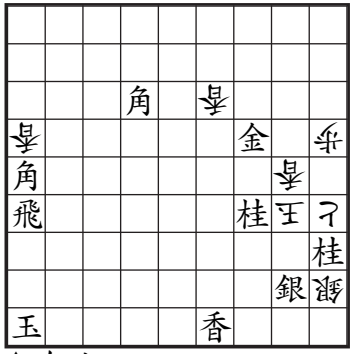
△角

154



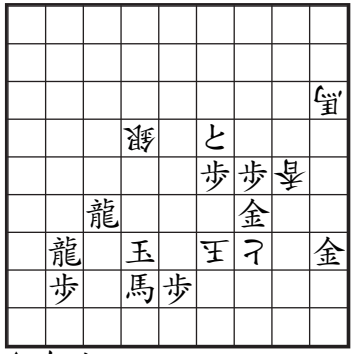
△銀

156



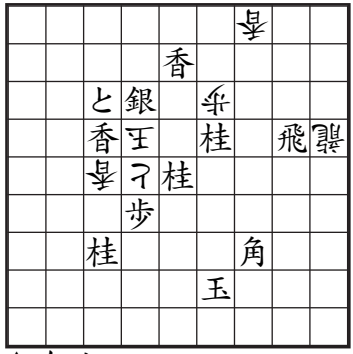
△なし

157



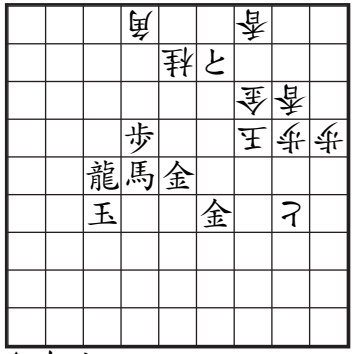
△なし

159



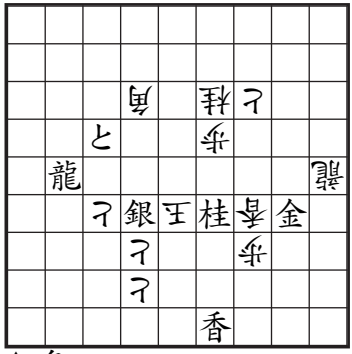
△なし

158



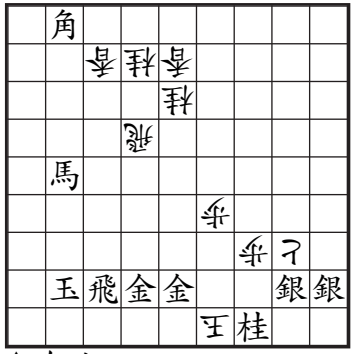
△なし

160



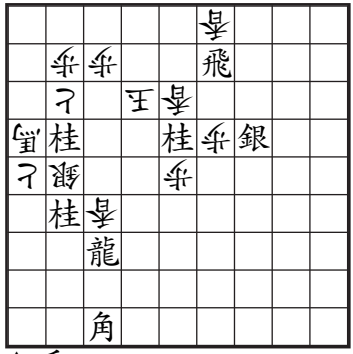
△角

161



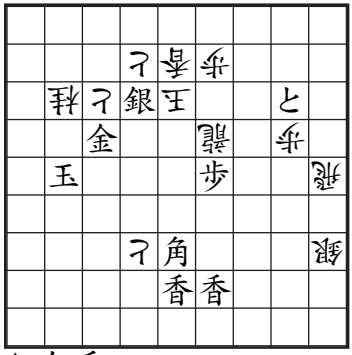
△なし

163



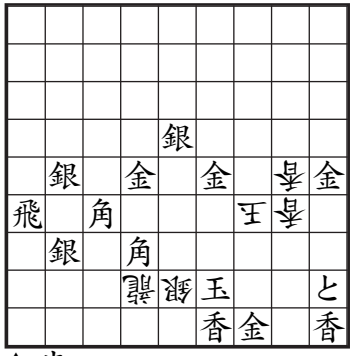
△香

162



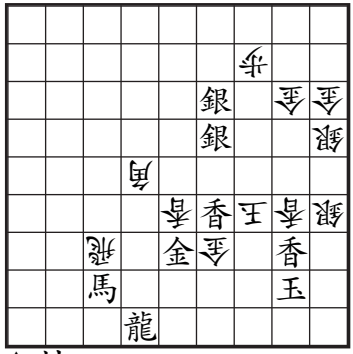
△金香

164



△歩

165



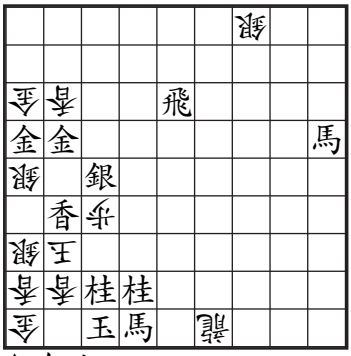
△桂

167



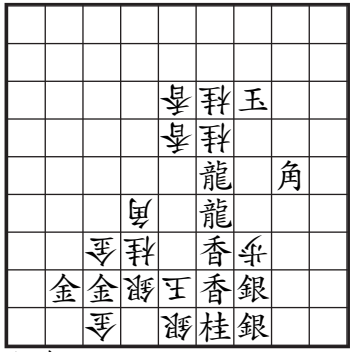
△角桂

166



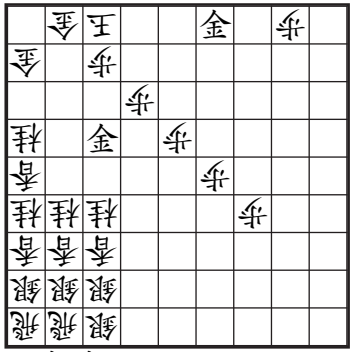
△なし

168



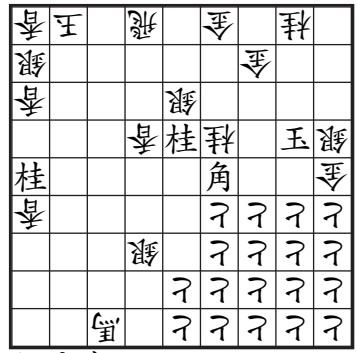
△なし

169



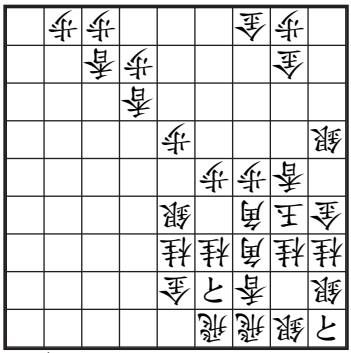
△角 角

171



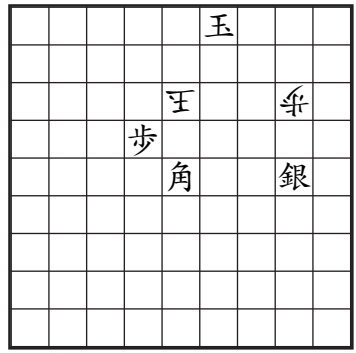
△飛 金

170



△なし

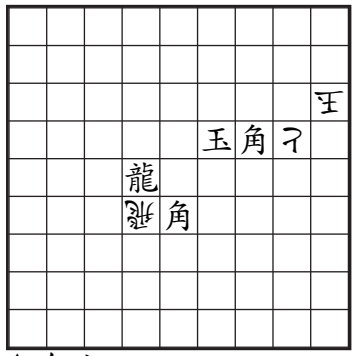
172



△飛

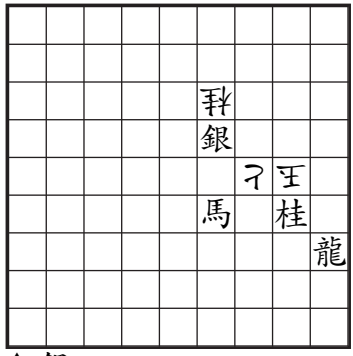
b) 23歩→74

173



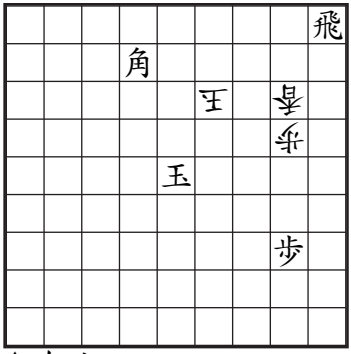
△なし
b) 44玉→16

175



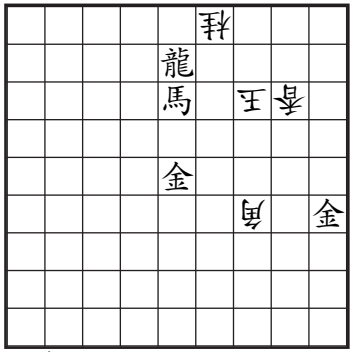
△銀
b) 26桂→36

174



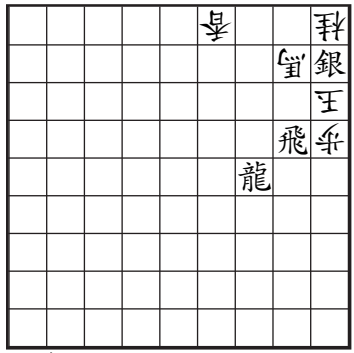
△なし
b) 43玉→34

176



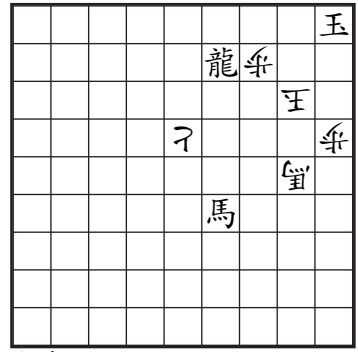
△なし
b) 55金→12

177



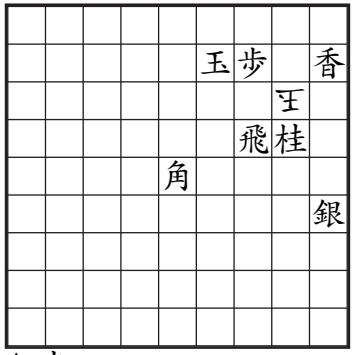
△なし
b) 22馬⇔14歩

179



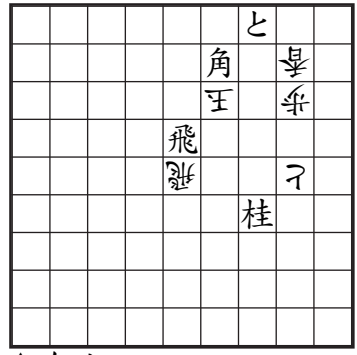
△銀
b) 32歩→桂

178



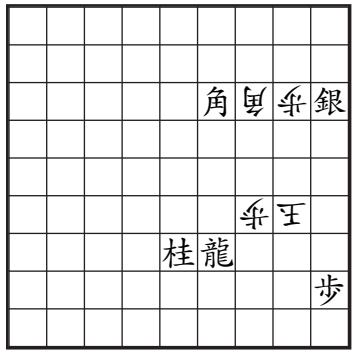
△歩
b) 23玉→13

180



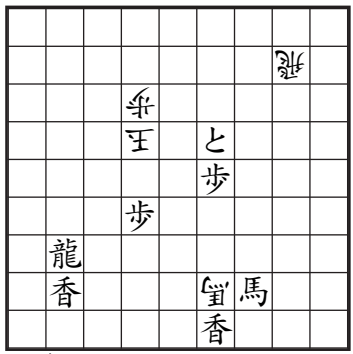
△なし
b) 31と→51

181



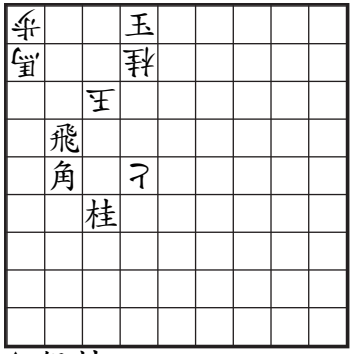
△銀
b) 57桂→39

183



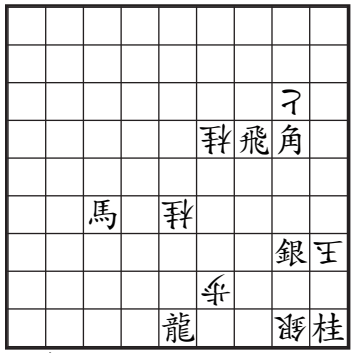
△なし
b) 88香→68

182



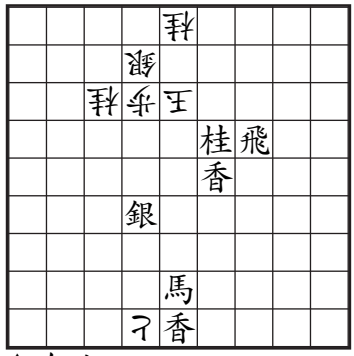
△銀桂
b) 91歩→42

184



△なし
b) 17玉→45

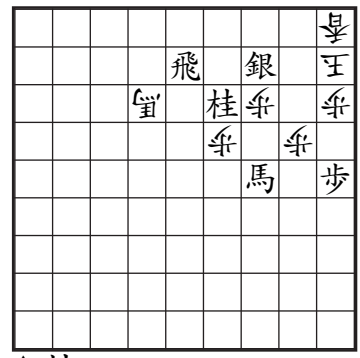
185



△なし

b) 45香→47

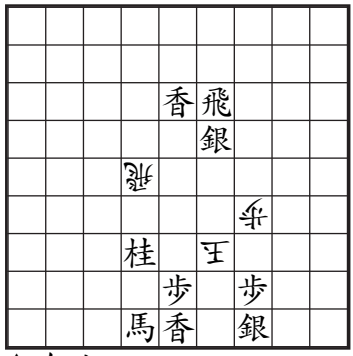
187



△桂

b) 43桂→46

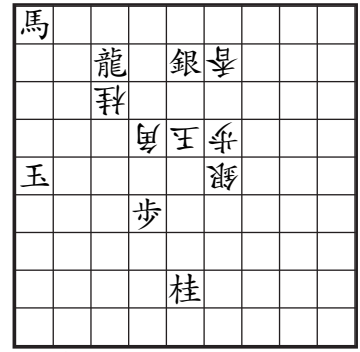
186



△なし

b) 67桂→66

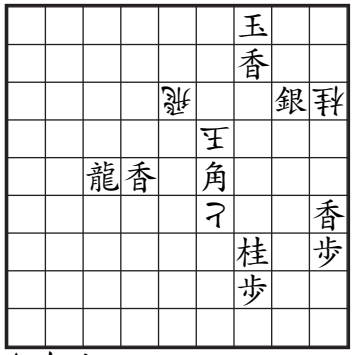
188



△飛

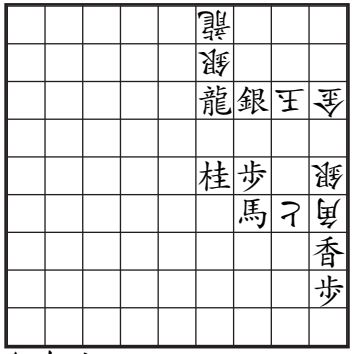
b) 54玉→75

189



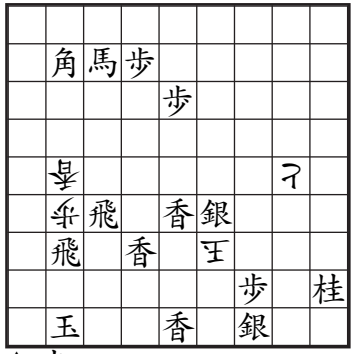
△なし
b) 75龍→馬

190



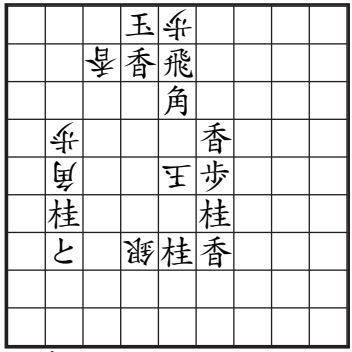
△なし
b) 13金→14

191



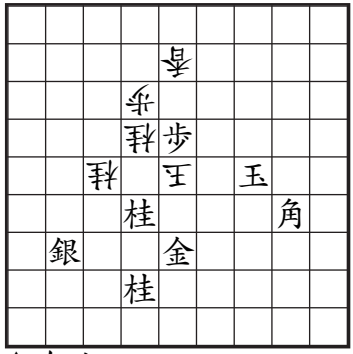
△歩
b) 18桂→27
c) 18桂→58

192



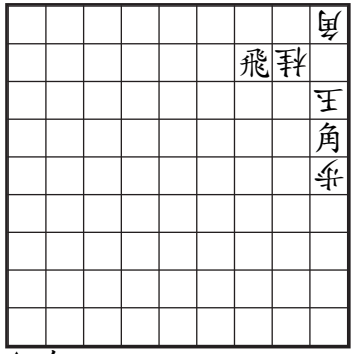
△金
b) 72香→43
c) 72香→63

193



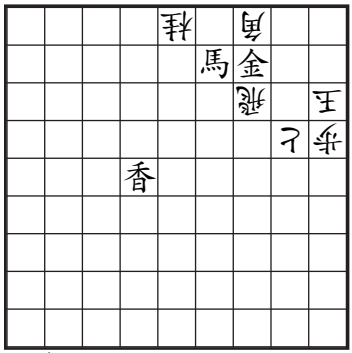
△なし
b) 54歩→67
c) 55玉→65

195



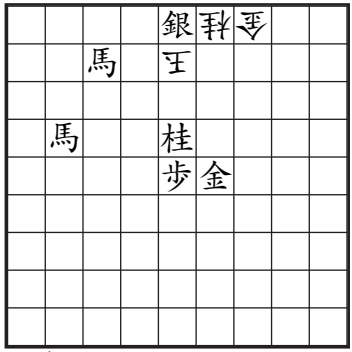
△金
上の図から
a) 13玉→12
b) 15歩→16
c) 14角→23

194



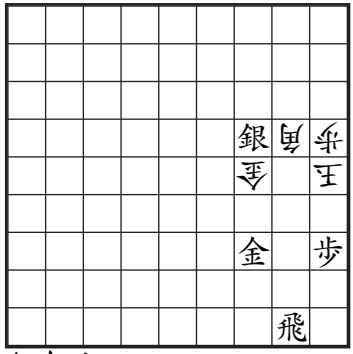
△なし
b) = a)の詰め上がり図から玉→43

196



△なし
２解

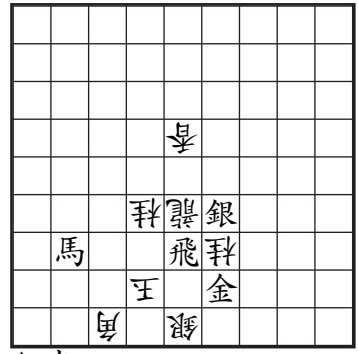
197



△なし

b) 協力詰　５手

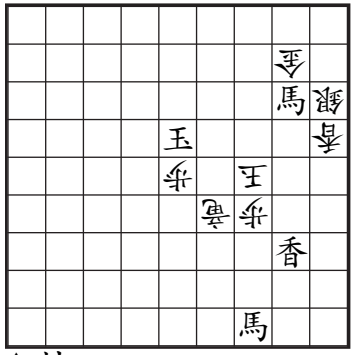
199



△歩

b) 安南詰　５手

198



△桂

b) △騎（ナイト）

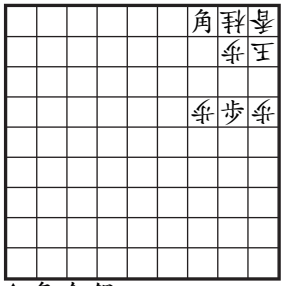
200



△なし

作品解説

1



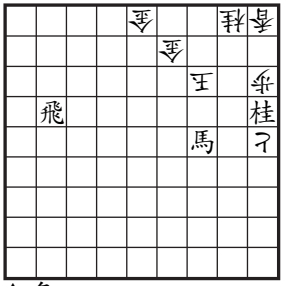
△角金銀

13銀打、同桂、23角打、同歩、22金打まで5手詰

本作品集のため200作を揃えるために昔の創作ノートをたぐってみると、これがありました。何時の頃の作かハッキリしませんが、若島先生と出会うよりもだいぶ前になるはずで、20年以上前に作った初々しさが残る作品ということになります。ということでこれを1番にしました。

実戦形の手筋物。初手23角打や23銀打は、13玉で、打った駒が邪魔になり詰みません。とはいえ、23金打は、同歩で失敗。13銀打がこの形の手筋で、同玉なら23金打までです。13同桂には23角打の捨て駒が実現し、同歩に22金打まで。

2



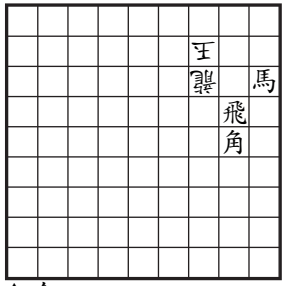
△角

44馬、32玉、23角打、同玉、22馬まで5手詰

44馬が狙いのそっぽ行きで、24玉なら34馬、14玉、24馬まで。ただし、実戦形にしている意味はあまりない手順で、未整理感が漂います。詰パラ入選2回目の作品で、これまた初々しさを懐かしがるため、2番に収録しました。

これ以降の作品は特殊な物を除き、盤面の駒数順に並べております。

3



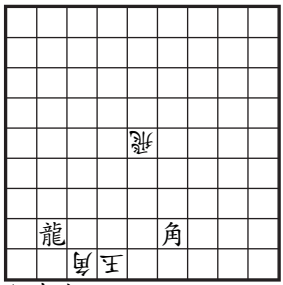
△金

21飛成、同玉、43角成、同龍、22金打まで5手詰

2001年4月から詰将棋やプロブレムなどの盤上パズルを扱うホームページ『コーヘイ天国の乱！』を開設しています。URLは、http://homepage2.nifty.com/koheran/　です。その中に『5手詰バトル・ロワイヤル』というコンテンツがあり、そこで出題されている作品。

21飛成から43角成（成らなくても可）が、「玉は下段に落とせ」「包むように寄せよ」の手筋です。

4



△金銀

78銀打、58玉、67銀、同玉、66金打
まで5手詰

これまた飛角図式。

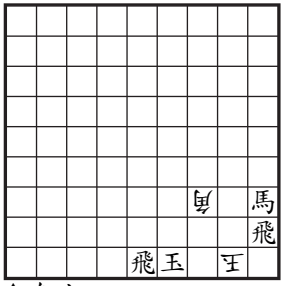
初手78銀打から67銀は前例のある手筋ですが、飛角図式で表現してみましたがいかがでしょうか。

4手目47玉は37金打まで。また49玉は39金打までです。

ちなみに龍の利き筋に銀があるような、「開き王手」ができる格好を、チェス・プロブレム（チェスの詰将棋）では、「バッテリー」と呼びます。

本作は一度バッテリーを作って、それをすぐに捌くという流れの5手詰でした。

5



△なし
19飛、同玉、38王、59角成、28馬
まで5手詰

双玉の飛角図式です。

普通の詰将棋は玉がひとつですが、この作品集には、両方の玉が使われている作品がたくさん収録されています。

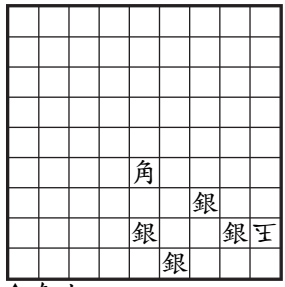
実戦だと自分の玉がありますので、案外そういう詰将棋を解くほうが棋力向上に役立つかもしれません。（?）

初形、王と飛でバッテリーができています。これをどう捌くかです。

初手38王や48王は反則で、58王は、59角成が王手になるので失敗します。

19飛が正解。同角成は48王まで。19同玉に38王が好手で、59角成に28馬まで。

6

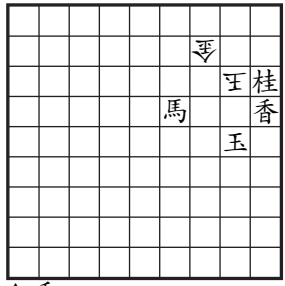


△なし
45角、29玉、38銀、同玉、56角
まで5手詰

配置がちょっと面白いですが、変化もない易しい作品です。45角→56角と、一度動いた角が、元の位置に戻ってきます。これを「スイッチバック」のテーマと呼びます。

なお、3手目56角は、18玉で初形に戻りますので、こういった無駄な手は作意手順に入れないことになっております。

7

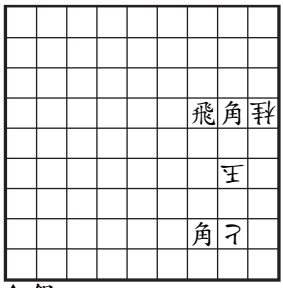


△香
24香打、12玉、11馬、同玉、21桂成
まで5手詰

手順前後に注意する問題です。すなわち、3手目21桂成とはやると、13桂打の逆王手で失敗します。先に11馬と捨てれば、同玉と取る一手で、21桂成の両王手まで。

作意手順には変化がありませんが、このように変化が減らせれば見落としも減り、読みを省略できるという利点があります。実戦でも役立つテクニックでしょう。

8



△銀

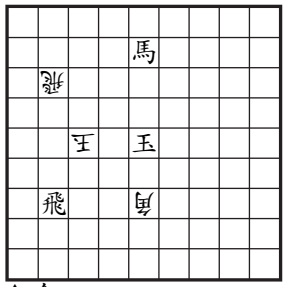
17銀打、同玉、35角、26桂、14飛
まで5手詰

初手37銀打では、25玉で失敗します。17銀打と打っておけば、25玉には、16角までの詰みがあります。

35角に対して、18玉や26歩打などでは、14飛で桂が余ります。4手目は駒を余らせない26桂が正解となります。

駒余りを避けるための移動合は、詰将棋特有の手筋ですが、駒損を避けるために実戦でも応用ができるかもしれません。詰まされる局面なら無意味ですが。

9



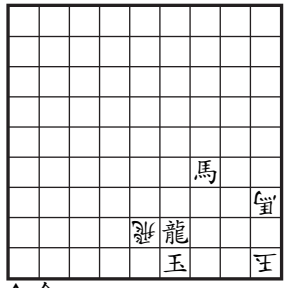
△金

85金打、76玉、43馬、同飛、86金
まで5手詰

双玉の飛角図式です。初手53馬、同飛、85金打、76玉、86金まで5手詰という解答は、2手目同飛が王手となるため間違いです。初手42馬も、53香打、同馬、同飛で失敗。

先に85金打と打ちます。同飛は、同馬まで。76玉の逃げに86金は同飛と取られてしまいます。飛車の利きをそらす53馬の捨て駒をここで実行します。

10



△金

29金打、同玉、18馬、同馬、39龍
まで5手詰

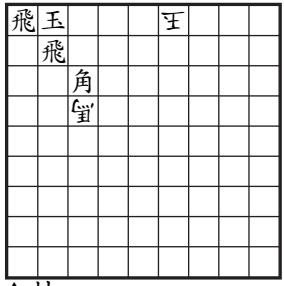
これまた双玉の飛角図式です。

前作との関係もあり、18金打を考えられた方も多いかと思います。

18金打、29玉、47馬で詰みのようですが、38歩打という捨て合があり、38同馬は、18玉で、また、38同龍は、同飛成、同馬、18玉で、かろうじて詰みません。

また18金打、29玉、39龍は、17の馬に取られてしまいます。この馬の利きをそらすには、18馬と捨てる必要がありますが、その邪魔にならないように初手は18金打ではなく、29金打が正解となるわけです。

11



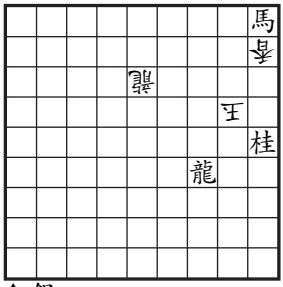
△桂

33桂打、31玉、64角成、同馬、92玉
まで5手詰

初手92玉は馬が利いているため反則です。いったん33桂打と打つのが平凡ですが正解。31玉に64角成と捨てて、同馬でついに92への利きが消え、92玉までの詰め上がりが実現します。

ネットの詰将棋チャットで聞いた話では、「92玉」はこれまで詰将棋に現れなかった攻め方の手だそうです。桂花記念日（ハンドル）氏がこの手を図化（1手詰）し、それを5手詰の作品に仕立てたものです。

12



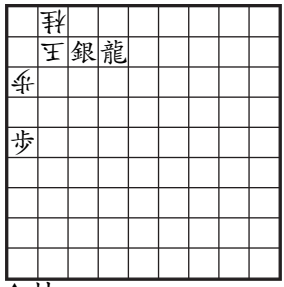
△銀

33馬、同龍、25銀打、15玉、16龍まで5手詰

初手33馬は、13玉と逃げられてもよいようにする下工作です。

2手目13玉は、23桂成、14玉、24馬まで。また14玉は、34龍、13玉、23龍まで同手数銀余りとなります。

13



△桂

74桂打、92玉、63銀、83玉、82龍まで5手詰

龍と銀のバッテリーから10通りの開き王手の筋がありますが、74の地点にヒモをつけるため、63銀とあえて成らないのが正解です。

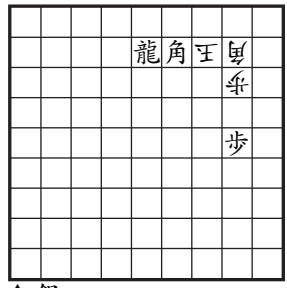
しかし、すぐに実行するのではなく先に74桂打と据えておくことが必要です。

なお、2手目91玉は、81銀成、同玉、82龍までとなり、桂が余ります。

玉位置が82なのは、別に22でも良いのですが、この作品集で「玉の全格配置」を実現するために、82に置いたものです。

「玉の全格配置」は、伊藤宗看・看寿の『無双』『図巧』以来いくつか実現されておりますが、5手詰だけで達成したのは、これが初めてだと思います。

14



△銀

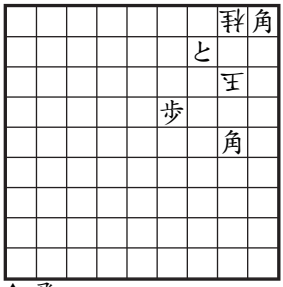
53角成、21玉、31馬、同玉、32銀打まで5手詰

この問題も成りと不成を別に数えれば、初手に20通りの開き王手があります。

一見、31角成、同玉、32銀打までのように見えますが、31角成に33玉と逃げられてしまいます。

正解は53角成。33玉は、43馬（または、43龍）まで。21玉には改めて31馬と突っ込むのが好手で、31同角は、12銀打までとなります。

15



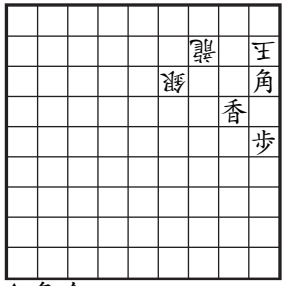
△飛

33角成、同桂、21飛打、32玉、43角成
まで5手詰

24から脱出されそうですが、22飛打は、13玉とかわされます。続けて、12飛成の捨駒も、24玉で逃げ出されてしまいます。

飛車を打つ場所を作る、33角成が好手です。同桂、21飛打で、13玉は22飛成、32玉は43角成までの詰みとなります。44歩の配置がこの詰め上がりを暗示しております。

16



△角金

21角打、同龍、22金打、13玉、23香成
まで5手詰

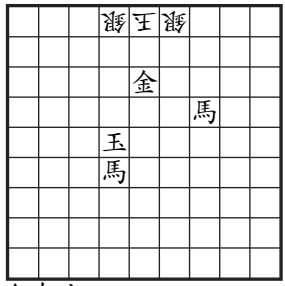
初手22金打は、13玉で失敗します。23角打が筋ですが、13玉とされたときに22への逃げ道が開き、以下14角成は12玉、14金打は22玉でつかまりません。

21角打が正解。13玉は、14金までです。

5手目23香成を、うっかり、23金とすると龍で取られて失敗するので御注意ください。

この香が詰めの主役でした。

17



△なし

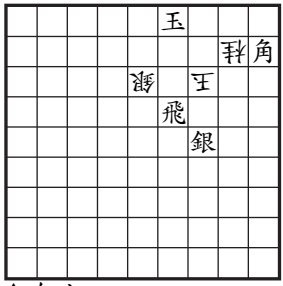
52馬、同銀右、84馬、61玉、62金
まで5手詰

初手52馬が英断の一手。2手目同銀左は、33馬、41玉、42馬までで、同手数の詰みです。

どの入門書にも書いてある有名な3手詰をアレンジした作品です。

なお65玉は、初手84馬、62歩打、61馬以下の余詰を、2手目62香打の逆王手で防ぐための配置。

18



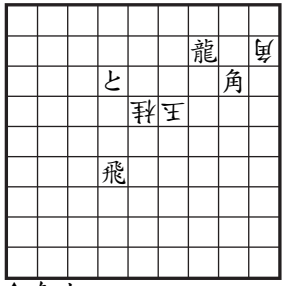
△なし

43飛成、同玉、21角成、33玉、32馬
まで5手詰

使いどころがありそうな飛車をいきなり捨てて、43同玉に21角成が見えにくい王手だと思います。

この作品では、双玉配置は駒数を減らすためのもので、特に逆王手などの逃れ筋は無い作品でした。

19



△なし

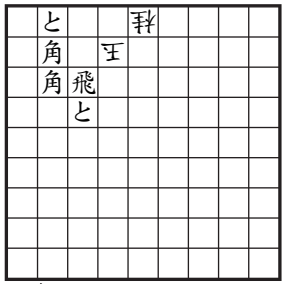
46飛、同桂、34龍、55玉、64龍
まで5手詰

初手34龍は、55玉で詰みません。46飛と捨てて桂を跳ねさせ、34龍から64龍が意外な詰め上がり。

この詰め上がりが見えていないと、初手の飛捨てはなかなか思いつかないと思います。

なお、2手目55玉は、35龍までの早詰です。

20



△なし

61角成、同玉、72飛成、同玉、71角成
まで5手詰

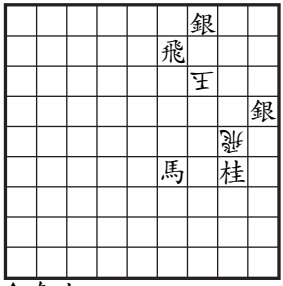
初手72飛成は53玉、71角成や72角成は52玉で逃げられます。

61角成から72飛成と、とことん捨てるのが正解。

攻め駒がたくさんありますので、逃げ出されないための捨て駒も、安心して捨てることができます。

変化がないやさしい作品です。

21



△なし

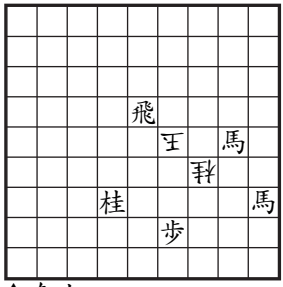
55馬、同飛、23銀成、同玉、22飛成
まで5手詰

飛車の守りが強いので、これをそらすための、55馬が正解。

2手目24玉は、22飛成、35玉、25龍まで飛車が余ります。

3手目23銀成に同飛がないのが、飛車をそらせた効果です。

22



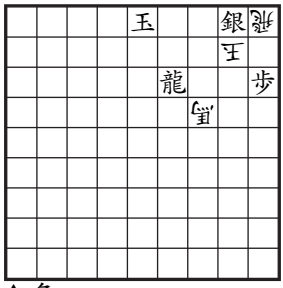
△なし

55飛、46玉、28馬、同桂成、47馬
まで5手詰

飛車が取られそうなので、44馬に惹かれますが、46玉で詰みません。

55飛が平凡ながら好手。28馬に37歩打には、35馬を用意しています。

23



△角

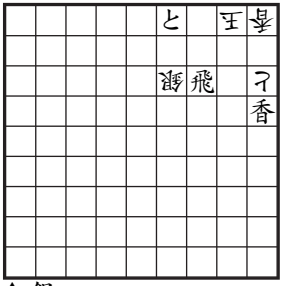
12歩成、同馬、13角打、同馬、32龍
まで5手詰

初手32銀成まで1手詰のようですが、51の玉を素抜かれてしまいます。

12歩成が軽妙な手で、12同飛は、32銀成、11玉、41龍まで角余りの詰み。

12同馬に対しては、13角打が逃げ道からの捨て駒の手筋で、21玉は41龍までです。

24



△銀

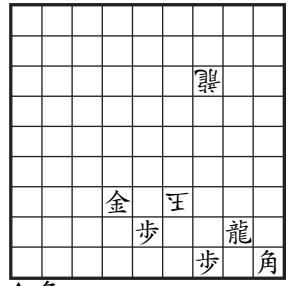
12銀打、22玉、23銀成、同と、31飛成
まで5手詰

初手31飛成は、12玉で失敗します。

12銀打が逃げ道からの捨て駒の手筋で、同とや同香は31飛成まで。12同玉には、13香成があり、以下21玉、31飛成までで歩が余ります。

22玉が最強の抵抗。クライマックスを迎えた感じですが、13飛成や13香成ではなく、23銀成の「駒の2段活用」が決め手です。同とと取らせて香筋が通り、31飛成までの詰みとなります。

25



△角

14角打、46玉、25龍、47玉、45龍
まで5手詰

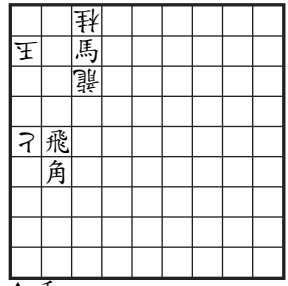
パラッとした構図でとらえどころがない玉ですが、14角打の王手で急に狭くなります。

2手目25歩打などは、57金、36玉、25龍まで。46玉と逃げることで角の射程に入ります。そこで、25龍が、両王手を1筋はずした地味な好手となります。

4手目37歩打などは57金まで。47玉には45龍の両王手での詰みとなります。

簡単な構図から、2通りの開き王手が出てくるという、派手さを秘めた作品です。

26



△香

93香打、同玉、75角、同龍、82飛成
まで5手詰

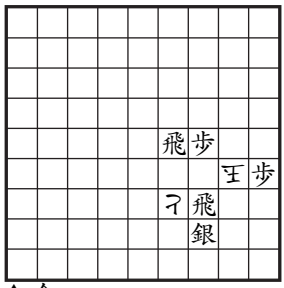
初手81馬や81飛成に食指が動きますが、93玉で不詰。

93香打と捨てて、75角が正解。84歩打な

どには、95飛があります。

この詰め上がりがあることから、馬と飛車は最初の位置のままがいい、ということでした。

27



△金

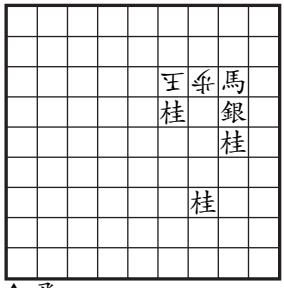
46飛、同と、27銀、37玉、38金打
まで5手詰

初手27飛は、36玉で45の飛に当たるためつかまらなくなります。

46飛が深謀遠慮の一手。同とと取られるだけのようですが、この捨て駒によって38への利きが消え、最終手、38金打が打てるようになるわけです。

飛車2枚を捨てての詰みというのは、いかにも詰将棋といった感じです。

28



△飛

63飛打、53桂、32馬、44玉、64飛成
まで5手詰

63飛打は当然の手ですが、変化の詰め方にひと工夫必要です。

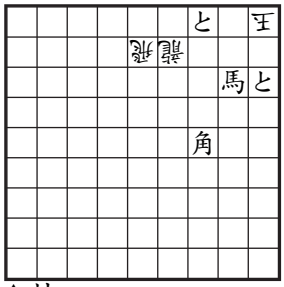
2手目42玉は33馬と指し、以下41玉は61飛成まで、31玉は32馬までとなり、いずれも歩が余ります。

このほか、2手目44玉や54玉は、45馬までですので、2手目は合駒となります。53歩打など、桂以外の合駒をすると、33銀成（桂成でもよい）54玉、45馬までで歩が余ります。

駒が余らない唯一の応手は53桂打です。この場合は、33桂成などでは54玉で詰みません。32馬が正解で、44玉に64飛成までとなります。

変化読みが厄介な問題ですが、相手の応手を読むのは実戦でも必要となることです。

29



△桂

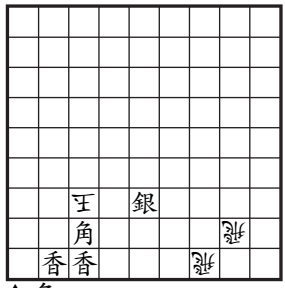
44角、同龍、12馬、同飛、23桂打
まで5手詰

馬が邪魔駒ですが、22馬・12馬・33馬のいずれも、同龍と取られて23に利いてきます。

そこで、44角として龍の利きをそらすのが正解。同龍と取らせて、12馬と捨てれば、今度は飛車でしか取れないので、23桂打が成立します。

なお、2手目33歩打などは、同馬、同龍、23桂打までで合駒が余ります。

30



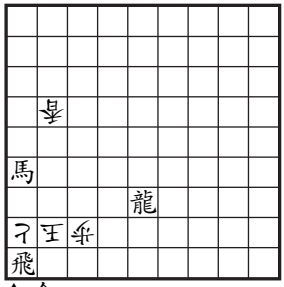
△角

34角、79飛成、33角打、76玉、66角成
まで5手詰

初手23角成に食指が動きます。79飛成なら33角打以下詰むのですが、78歩打と合駒をされて、以下33角打、同飛成、同馬、67玉で失敗します。

34角が唯一詰む場所で、これなら78歩打でも、33角打と打つことができるというわけです。

31



△金

89金打、同と、98飛、同玉、97龍
まで5手詰

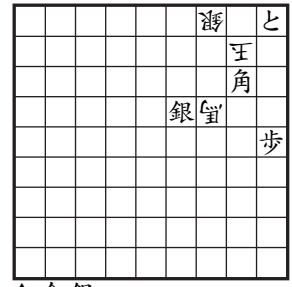
初手98飛では、同玉とされて、97龍でも97馬でも、89玉とされて詰みません。

89金打の捨て駒が89を埋める妙手。同とに対して、98飛で決まります。

このように直前に動いた駒が居た位置に移動する一連の動き（駒取りをさける手順）を、チェス・プロブレム（チェスの詰将棋）では「ウムノフ」(Umnov)と呼びます。

なお、初手78馬は、同玉なら79金打までですが、99玉と潜られて詰みません。

32



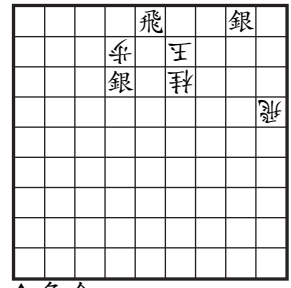
△金銀

13金打、同玉、24銀打、同玉、14角成
まで5手詰

23の角を取られてはいけませんので、12角成とやりたくなりますが、32玉と逃げ出されてしまいます。また33銀打もそれらしい手ですが、同馬と取られて詰みません。

大事そうな金を惜しげもなく捨てる、13金打が正解。同玉の一手に24銀打が一連の手筋です。24同玉に14角成まで。持駒をすべて捨てて盤面の駒で詰める問題でした。

33



△角金

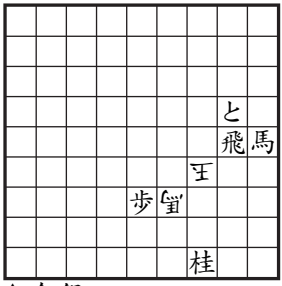
15角打、同飛、31飛成、同玉、32金打
まで5手詰

玉は下段に落とせということから31飛成が第一感ですが、53玉と逃げ出されて、54金打には、同飛があるため詰みません。

この飛車の利きをそらせるための、15角打

が「遠見の角」。同飛でも、24歩打などの合駒でも飛車の利きが止まり、狙いの31飛成が実現します。

34



△金銀

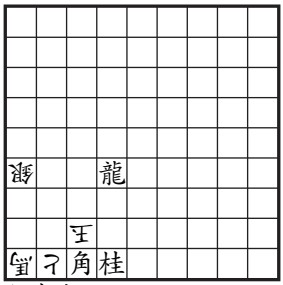
37銀打、同馬、26馬、同馬、47金打まで5手詰

初手26馬や35金打では、46玉から57玉と脱出されます。

37銀打が好手。同馬に26馬とすると、46玉には、56金打の詰みがあります。

馬を呼んだせいで、26同馬と取られてしまいますが、47金打までの詰みとなります。

35



△金銀

87銀打、同玉、98金打、同馬、77龍まで5手詰

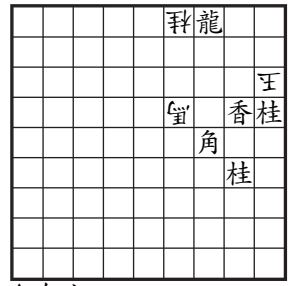
77龍と指したいのですが、馬の利きがあります。68龍は形を決めすぎで、87玉と逃げられ、77金打、同馬、同龍、98玉で詰みません。

逃げられるほうから捨て駒の87銀打が好手。同銀成なら今度こそ68龍まで。79玉は78金打までですので、同玉よりありません。

ここであわてて、86金打と打つと、98玉で、打った金が邪魔になってしまいます。

98金打が連続捨駒の妙手。同玉は、96龍までで銀が余ります。78玉は68龍まで。同馬でようやく狙いの77龍が実現します。

36



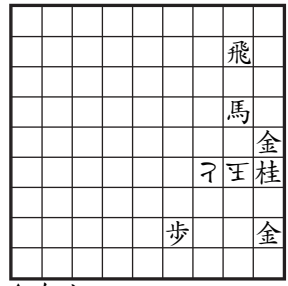
△なし

22香成、35馬、23成香、同玉、22龍まで5手詰

23香成は、同玉と取られて馬が22に利いているため詰みません。21香成は、35馬なら22龍で詰みますが、24に合駒をされて詰みません。

初手22香成は龍の邪魔になりそうで指しにくい手ですが、24歩打などの合駒には11龍を用意しております。35馬に23成香と捌いて、同玉に22龍まで。

37



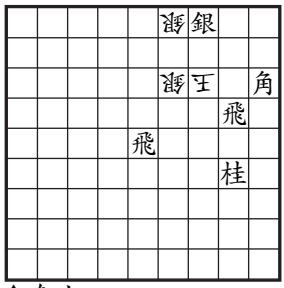
△なし

13馬、15玉、14馬、同玉、24飛成まで5手詰

37から脱出されそうですが、46馬では15玉で詰みません。13馬が意表をつく手で、37玉には馬が46に利いているため、28飛成までで詰みます。

15玉には14馬が狙いの妙手。同玉のところ、16玉は、25馬（または飛成）までです。

38



△なし

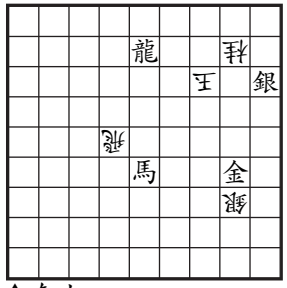
23飛成、同玉、25飛、13玉、22飛成まで5手詰

大駒3枚なのですぐに詰みそうですが、22飛成は44玉とされて55の飛車に当たり、22の龍が邪魔をしているため、22角成ができません。また22角成は24玉で詰みません。

23飛成が正解で、これなら44玉は22角成までとなります。

23同玉に25飛と飛車を入れかえれば、33玉または24歩打には、22角成までとなります。

39



△なし

24銀、44玉、66馬、同飛、35金まで5手詰

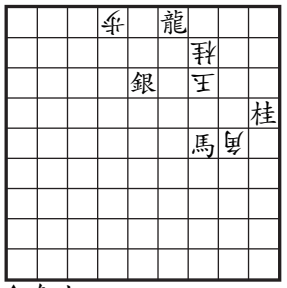
22銀が目につくようでは詰将棋慣れしていないということです。44玉とされて銀の利きがあるため、36桂打と打てません。

初手24銀のナラズが「詰将棋らしい」手。24同玉は、22龍、14玉、23龍までで桂が余ります。

44玉と上がってきたときに66馬が意表をつく妙手。

34玉は54龍まで。45玉は43龍まで。66同飛や55歩打などは35金までとなり、初手に銀を成らなかった効果が現れます。

40



△なし

42銀、43玉、52龍、同玉、53馬まで5手詰

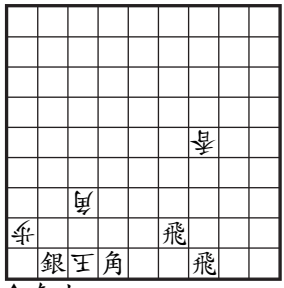
普通なら44銀成ですが、同桂と取られて詰みません。

42銀に対して、23玉は、21龍、14玉、25龍までで角が余ります。

43玉に53銀成とすると、33玉となり、43には角が利いています。

52龍が気付きにくい妙手で、同玉の一手に53馬までの詰みとなります。

41



△なし

88銀、89玉、14角、39香成、23角成まで5手詰

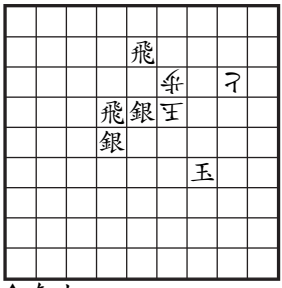
初手88銀に同角成は36角まで。この開き王手の感触も悪くないと思います。

89玉に14角の最遠開きが狙いの一手。どのような抵抗をしても、23角成までとなります。

なお、14角を、たとえば36角とすると、59銀打、45角に78歩打とされて、同角には88玉で、するりと抜けられてしまいます。

発表図は3手詰でしたが、逆算して5手詰にしました。

42



△なし

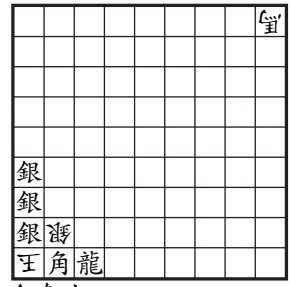
53銀、55玉、56銀、同玉、44銀まで5手詰

55からの逃げ道が見えますが、逃げてくださいと、53銀が妙手。33玉は、42飛成までですので、55玉は仕方がないところ。

66まで逃げられてはさすがに詰まないので、56銀が狙いの一手。同玉に44銀とナラズで引けば、これで詰んでいます。36の玉が47までブロックしていることをご確認ください。

逆王手などの罠はありませんが、玉の性能を生かしたという意味で、これもひとつの双玉作品のあり方だと思います。

43



△なし

12角成、98玉、21馬、97玉、87馬まで5手詰

初手12角成は、ここ以外はダメで、79銀成とされたときに11馬、89玉、88馬まで角余りの詰みを用意したものです。

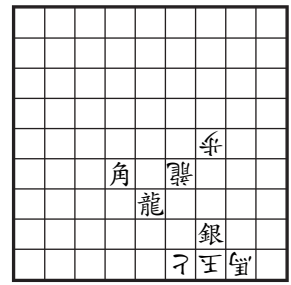
なお、12角成に79銀（成らないで88に利かせる）は、89馬までの詰みです。

したがって、2手目は98玉となりますが、21馬が馬筋をそらせようとする捨駒。

21同馬には、88龍までの銀余りとなります。

97玉には87馬まで。角がぐるりと1回転。形も手順も面白い作品です。

44



△銀

28銀打、同馬、58龍、48と、49龍
まで5手詰

完全に入玉されてしまったようですが、開き王手の狙いがあるため、詰みがあります。

初手28銀打がこちらからの逃げ道を埋める捨て駒です。同玉は、27龍、19玉、29龍まで。

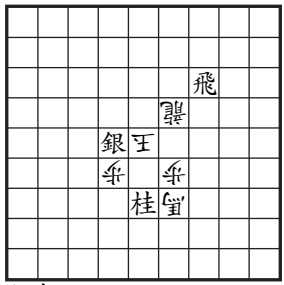
28同馬に58龍が、銀にひもをつけた開き王手。66龍や48歩打などは、49龍までで歩が余ります。

また57歩打などは、同角とされて、57同龍や48歩打に49龍までとなり、合駒をした効果が無い上に、その駒が余りますので、無駄合と考えます。

4手目は48とが駒を余らせない手で、49龍までの詰みとなります。

なお、35の歩は初手46龍以下の余詰の防ぎです。

45



△金

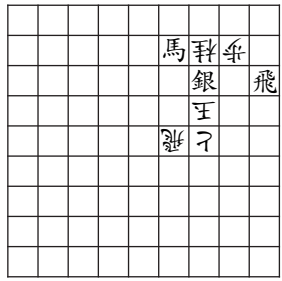
53飛成、54金、56金打、同馬、64銀
まで5手詰

初手53飛成は手筋。同龍は45金打までです。

54歩打のような合駒は、64龍までとなりますので54金打が正解となります。この場合は、56金打とこちらを埋めて、同馬に64銀まで。詰め上がりは『キ』の字の曲詰となります。

大学の先輩の菊田裕司氏がアマ名人を獲得した際に、お祝いに「キクタV」となるあぶりだし曲詰を作りましたが、その原図となった作品です。

46



△角

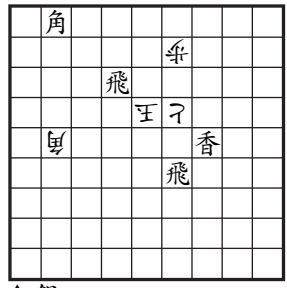
24銀成、同桂、16角打、同桂、14飛成
まで5手詰

初手14飛成は、24桂打くらいで詰みません。

また16角打もある手で、25桂打など合駒を打つと、24銀成、同桂、33飛成までの詰みがありますが、25とと移動合で受ける手があり、24銀成に35玉と脱出されてしまいます。

よって、先に24銀成と捨てておくのが正解。44玉は、53飛成までですので、同桂と取りますが、そこで、16角打が利きます。44玉はやはり53飛成まで。25とは33飛成まで。同桂には14飛成までの詰みとなります。

47



△銀

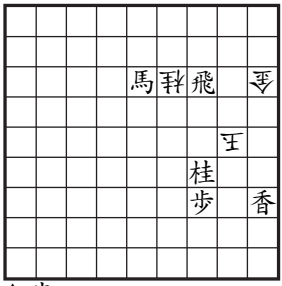
55銀打、同と、44飛、同玉、33飛成
まで5手詰

初手65銀は、55玉と銀の死角に上がられて詰みません。55銀打が手筋で、同玉なら66飛成までの詰みとなります。同とには、44飛が英断の妙手。同玉に33飛成と、こちらに成っ

て詰みとなります。

前問もそうでしたが、この作品も、「直前に居た場所に移動する」ウムノフの手筋でした。

48



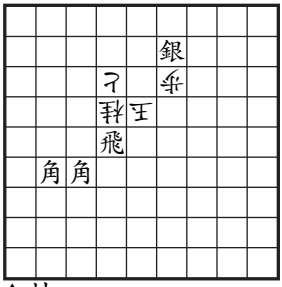
△歩

23飛、同金、26歩打、34玉、44馬まで5手詰

初手26歩打は打歩詰の反則です。一見、23飛成とすれば、同金、26歩打、34玉、44馬までで詰みのように見えますが、23飛成には同金ではなく、24歩打とされて、依然として打歩詰が打開できません。24同龍としても、同金、26歩打、34玉、44馬、23玉で脱出されます。

打歩詰にはナラズで、23飛（あえて成らない）が正解。34玉は、43飛成、25玉、45龍までで、24歩打でも、26歩打、34玉、43飛成までと、いずれも駒余りとなります。

49



△桂

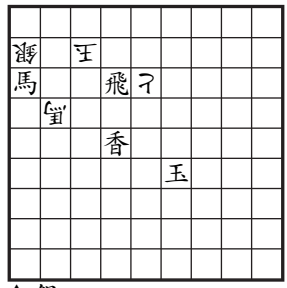
15飛、76桂、46桂打、44玉、77角まで5手詰

初手46桂打は、44玉、77角で詰みのようですが、55歩打の捨て合があり、以下同角、35玉で詰みません。

15飛が限定開きで、45～25までまとめてガードしており、44玉に対しては、77角、34玉、33角成までとなります。

76桂に対して、46桂打、44玉、77角と指せば、55歩打は同角で無駄合なので、このまま詰みとなります。

50



△銀

81銀打、同銀、83馬、同馬、62飛成まで5手詰

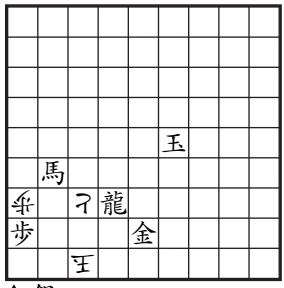
初手61飛成は、73玉とされて詰みません。73銀打がこういった場合の手筋ですが、同馬が46の玉に当たるため失敗となります。

また83銀打とかさにかかって攻めるのも、同銀、同馬、同馬、62飛成、81玉で届きません。

81銀打と逆方向から攻めるのが正解で、同玉は61飛成まで。同銀に83馬と捨てれば、62飛成が実現します。

83銀打から1枚はがすのが実戦流、81銀打として壁にするのが詰将棋流と言えましょう。

51



△銀

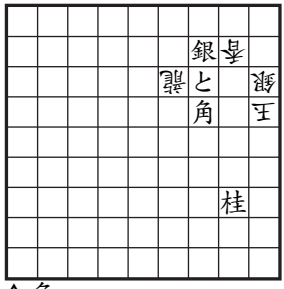
88銀打、同と、69龍、同玉、68馬
まで5手詰

第一感、97馬ですが、88金打と合駒されて、77龍には、78角打が逆王手となり、以下同龍、同玉で失敗します。

虎の子の銀をいきなり捨てる、88銀打が正解。同玉には77馬と指し、どんな応手にも、78龍までの詰みとなり、歩が余ります。また取らずに89玉と逃げる手に対しては、69龍と指し、どんな応手にも、97馬までとなり歩が余ります。

したがって2手目は88同ととなりますが、そこで、69龍と捨てるのがとどめの手筋です。

52



△角

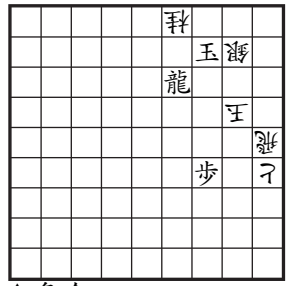
23銀、同香、36角打、25香、23角成
まで5手詰

初手25角打が手筋ですが、同香と取ってくれず、24玉と逃げられ、以下23銀成には、同香で、同角成は25玉、同とは同龍と取られていずれも詰みません。

23銀が皮肉な妙手。24玉なら15角打までですので、同香と取りますが、そこで、36角打と打てば、24玉には、23角成のときに25玉とは逃げられません。

4手目は25香が作意手順で、23角成まで駒余らずの詰みとなります。

53



△角金

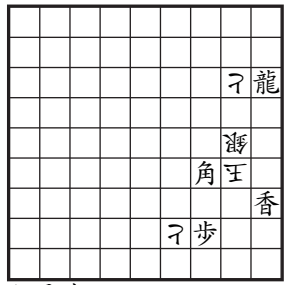
13角打、同飛、34龍、同玉、35金打
まで5手詰

双玉には警戒される方も多いと思いますが、本作は逆王手の筋はありません。

13角打が焦点への捨て駒で、同飛のところ、同銀は、23龍までです。

3手目34龍も「金はとどめに使え」のセオリーどおりで、同玉に35金打まで頭金の詰みとなります。

54



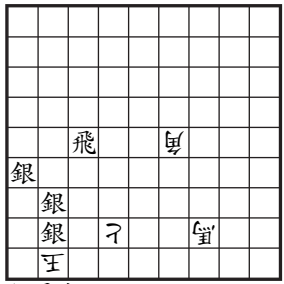
△飛金

16飛打、同銀、15龍、同玉、25金打
まで5手詰

36と35の2つの逃げ道が開いています。直接防ぐ手はありませんが、16飛打が詰みやすい形にする犠打で、同銀に15龍が連携の好手。17玉は18金打まで、36玉は37金打までです。

初形だと、15龍は捨て駒ではありませんが、飛車捨てをした3手目では捨て駒になっています。捨て駒をすることで、普通の手をわざわざ捨て駒にするという皮肉な手順です。

55



△飛銀

19飛打、88玉、77銀打、97玉、99飛まで5手詰

初手98銀打では、88玉とされて、89飛打には角の利きがあります。

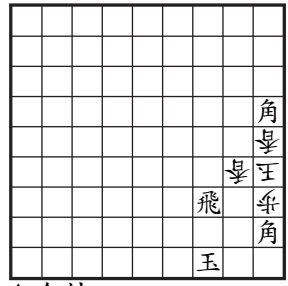
99飛打も、88玉で、98飛としても、89玉と戻られて詰みません。

19飛打が唯一詰む打ち場所で、合駒をされそうですが、1段目には歩、香、桂を打つことはできず、飛、角、銀は品切れです。金を打つと、取られて99金打までですので、2手目は88玉よりほかにありません。

3手目は77銀打と打つことができ、97玉に99飛まで。

「隅に打った駒が別の隅に移動する」という狙いを少ない駒数で実現した作品です。

56



△金桂

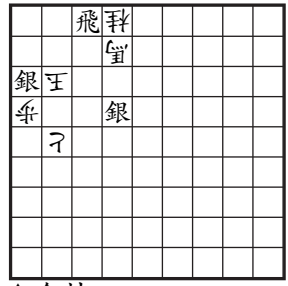
27角、同香成、26金打、同成香、28桂打まで5手詰

初手28桂打は、同香成が王手で失敗。27金打も、同香成で、同角、26玉、36飛、27玉で詰みません。

初手は27角が正解。同香成に26金打と捨てます。同玉なら36飛までの詰みですので、同成香と取りますが、この局面は初形の26香が成香に変った格好になっています。

このため、28桂打に同香成がなくなっており、このまま詰みとなります。

57



△金桂

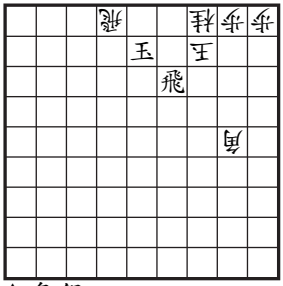
75桂打、同と、72飛成、同馬、84金打まで5手詰

初手82金打は、93玉、91飛成に84玉で詰みません。

「持駒に桂あらばまず打ってみよ」で、75桂打が正解。93玉は83金打までですので、同とと取りますが、そこで、72飛成が手筋の捨て駒で、同玉は82金打まで。同馬と取らせ

て、84金打が実現します。

58



△角銀

14角打、同角、23銀打、同桂、42飛成
まで5手詰

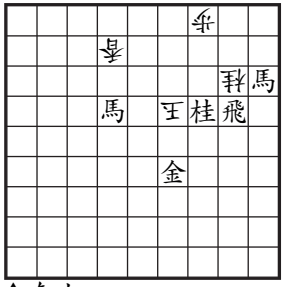
攻め方の飛車が、25角のにらみで動けなくなっています。この状態をチェスの世界では、「ピン」と呼びます。

このため、23銀打とすると、同桂のときに42飛成ができません。

14角打が正解。23桂打などには33銀打、22玉には13銀打までの詰みとなります。

14同角と取ると飛車の「ピン」がはずれますので、23銀打、同桂、42飛成までの手順が実現します。

59



△なし

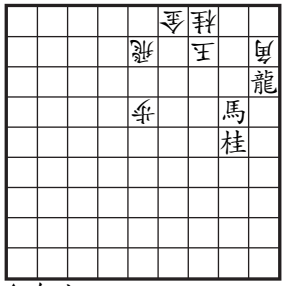
55金、35玉、27飛、36玉、54馬
まで5手詰

初手42桂成や22桂成は34に合駒をされて詰みません。22馬も、33香打くらいで逃れ。

手に困ったようですが、55金が常識の逆を行く驚愕の一手。35玉と逃げ出されるように見えますが、27飛の限定開き王手が連続の妙手で、36玉に54馬までの詰みあがりとなります。

この玉が36で詰むとは、想像できなかったことでしょうが、62香が最終手、63馬の非限定を消した配置だということに気付けば作意に到達できると思います。

60



△なし

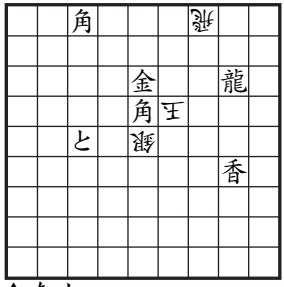
22龍、同玉、33馬、21玉、13桂
まで5手詰

自然な33馬や33桂成は、21玉で詰みません。

重要そうに見える13龍が実は邪魔駒で、初手22龍といきなり捨てるのが妙手。

43玉は33龍までですので、同玉と取りますが、33馬、21玉に13桂が実現します。

61



△なし

42金、71飛、33龍、同玉、43角成
まで5手詰

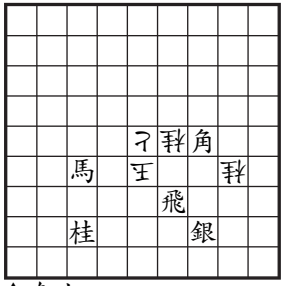
35から逃げ出されそうなので、43金が目に付きますが、54玉で二の矢がありません。

24龍も、34歩打くらいでダメ。

初手42金がぼんやりしているようですが正解です。これなら54玉には、43龍があります。

合駒も効かないので、71飛と取ることになりますが、これで3筋から飛車が消えたため、33龍から43角成が実現します。

62



△なし

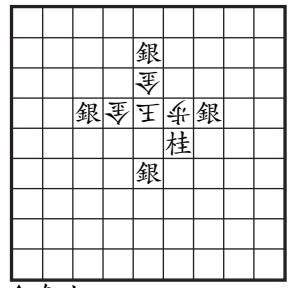
46飛、57玉、48飛、同玉、49馬
まで5手詰

46飛に同とは、66馬まで。

2手目57玉に46飛では、56玉で千日手となってしまいます。3手目の48飛が妙手。46歩打などには58飛を、56玉には47銀を用意しております。

本図は詰パラ発表時は、26桂が無かったのですが、今回収録時にコンピュータチェックしたところ、余詰が発見されたため、修正したものです。こうした隠れた余詰も、コンピュータの進歩とともに検出が容易になってきたことは、たいへん喜ばしいことですが、作者としては複雑でもあります。

63



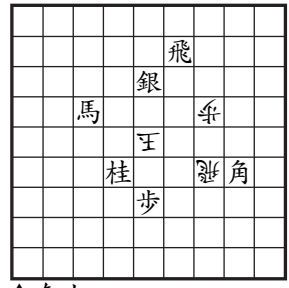
△なし

43(34)銀、同金、63(52)銀、同金、
65(74)銀まで5手詰

これは完全に遊びの世界。初手53桂成は、同玉でつかまらないのですが、ここまで解かれた方がそんな手は指さないでしょう。

4枚の銀（のうち3枚）を順番に動かして、ぐるっと回って詰むような感触をお楽しみください。

64



△なし

46飛成、同飛、44角、同飛、56馬
まで5手詰

中央の玉を詰めるには、56馬が目にとまりますが、初形では飛車が利いています。

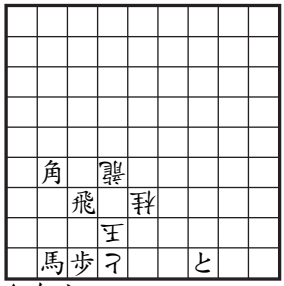
部分的には、37角とする形ですが、66玉と逃げられるため、ここではない手です。

44角は、46玉で、37や57から逃げ出されてしまいます。

正解は、46飛成です。これなら同玉には、56馬まで。同飛に44角が、飛車の利きをそらせる手筋。これに対して、45玉には、63馬の

用意があります。

65



△なし

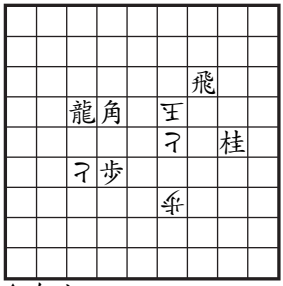
67馬、59玉、49馬、同桂成、57飛まで5手詰

真っ先に目に付く、78飛では、67玉で詰みません。

67を埋める、67馬が大胆な妙手で、同龍はもちろん、78飛まで。

59玉には邪魔になった馬を、49馬と捨てる大技があり、同桂成に57飛と、こちらの両王手が決まります。タテとヨコの両王手の筋を見合いにした作品でした。

66



△なし

86角、55玉、54龍、同玉、53飛成まで5手詰

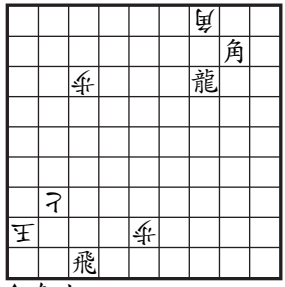
開き王手をどこにするかですが、73角成や46角は、54歩打で駄目。53への利きのほうが重要で、86角が正解になります。55玉に54龍と捨てて、同玉に53飛成まで。2手目54歩打は、同龍で打った駒が余ります。

なお、86角は4手目の変化に備えた限定移動です。すなわち、4手目に46玉と逃げれば68角まで。66玉なら63飛成まで。

初手75角とすると、55玉、54龍に46玉と逃げられて、68角ができません。

また初手97角とすると、54龍に66玉と逃げられて、63飛成に77玉と逃げ出されてしまいます。

67



△なし

99飛、同玉、39龍、98玉、99龍まで5手詰

初手93龍は、97と、と逃げ道を作られ、以下99飛、87玉、97龍には、同角成で詰みません。

99飛が正解で、88玉でも、同玉でも、39龍として以下詰みとなります。

盤面一杯に広がっただけの作品のように思えますが、実はこの作品には変化手順に狙いがあります。

つまり、2手目同玉には、39龍、98玉、99龍まで。

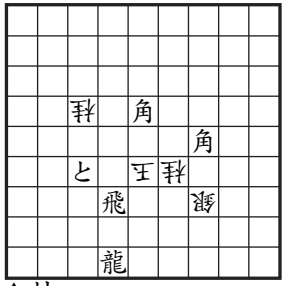
2手目88玉、39龍に77とは、89龍まで。

2手目88玉、39龍に22角は、79龍まで。

2手目88玉、39龍に78玉は、69龍まで。

玉方の応手によって、最終手の龍の位置が99から69までシフトするというのが、真の狙いでした。

68



△桂

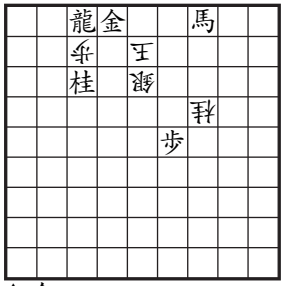
58龍、同桂成、68桂打、67玉、45角
まで5手詰

大駒4枚の攻撃陣ですが、うかつに攻めると逃げられます。例えば、65角は、45玉で失敗。68桂打も、67玉で詰みません。

初手58龍が意表をつく妙手。同桂成の一手に68桂打と打ちます。67玉は、45角まで。68同成桂は、57飛まで。

35角の利きをどうやって生かすかが問題でした。

69



△金

62龍、同銀、51金、同銀、53金打
まで5手詰

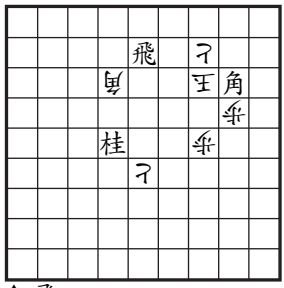
63と43の両方の逃げ道があるため初手62龍は第一感でしょう。

同銀に51金と捨てればどう応手しても金打ちまでの詰み。

初手欲張って72龍とすると、62歩打、同龍、同銀、51金に63玉と逃げられ、64金打に72玉と抜けられてしまいます。

えてして詰将棋では、駒を取る手は失敗の元となります。

70



△飛

53飛打、44玉、55飛成、同と、53飛成
まで5手詰

22、23、43、44の、4箇所に動ける広い玉ですが、53飛打で急に狭くなります。

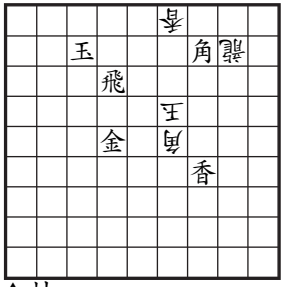
43歩打などの合駒は、32飛成、44玉、43龍まで。22玉は32角成、12玉、22馬まで。

44玉とされた局面では、さっき打った飛車が邪魔駒になっています。

したがって、邪魔な駒を、55飛成と捨てるのが手筋。同とのところ、33玉と戻ると、32飛成までです。

「打った駒がすぐ邪魔駒になる」というテーマです。

71



△桂

56桂打、同角、33飛成、同龍、54角成
まで5手詰

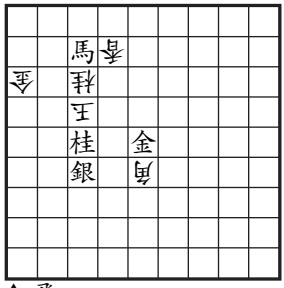
初形、飛車も角も玉方の大駒に「ピン」さ

れています。

まず、56桂打でこちらのピンを外します。同角で飛車のピンがはずれて、33飛成がもうひとつのピンをはずす捨て駒。同龍と取らせて、54角成まで。なお、4手目45玉は、35龍までです。

双玉ならではのピンはずしを2回演出してみました。

72



△飛

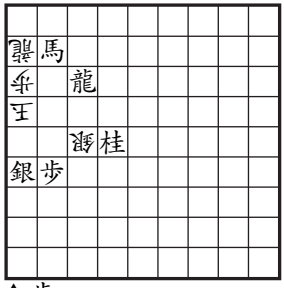
64金、同香、94飛打、同金、83馬
まで5手詰

84からの逃げ道が開いていますので、94飛打は第一感ですが、いきなり打つと、同金と取ってくれず、84銀打くらいで詰みません。

反対側からの逃げ道をおさえている55の金を、64金と捨てるのが意表の手。同玉なら54飛打まで。84玉は、73馬、94玉、95飛打までですので、同香と取らざるをえません。

そこで、94飛打と打てば、84銀打には、63馬があるという寸法です。

73



△歩

84龍、同銀、95歩打、同銀、85銀
まで5手詰

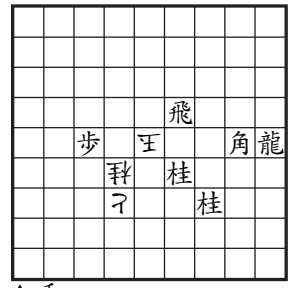
打歩詰の局面ですので、過剰な龍を捨てることになりますが、83龍では、同龍で龍が働いてきます。

84龍が正解で、同玉は、73馬、94玉、95銀までで歩が余ります。

同銀と取れば、95歩打が可能になります。

なお、初手74龍とすれば合駒が稼げそうですが、84銀の移動合が妙手で、同龍なら同玉で75からの逃げ道が開いています。84銀の局面で、95歩打は依然として打歩詰の反則。このとき、攻め方の龍が、無いほうがいい駒になっているのです。

74



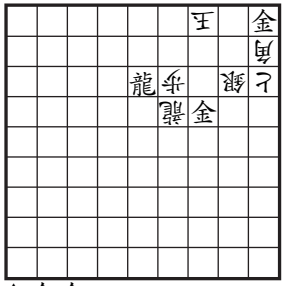
△香

57香打、同と、54飛、65玉、58角
まで5手詰

飛車が取られそうですので、43角成が目にとまりますが、56玉で不詰。57香打が深謀遠慮の一手で、56歩打や65玉は、43角成まで。44玉は、24龍までですので、57同とと取るしかありません。そこでじっと、54飛が好手。46玉は、26龍まで。

65玉に、58角が本作の狙いの一手で、開き王手と同時に76からの逃げ道を塞いでいます。この手のための初手57香でした。

75



△金金

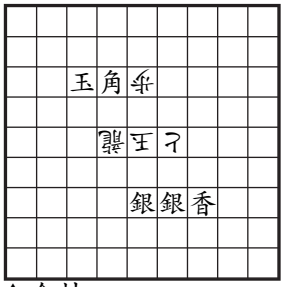
41金打、22玉、42龍、11玉、22金打
まで5手詰

51龍は41に合駒をされて詰みません。42金打は、22玉で、打った金が邪魔になります。

41金打が打ちにくいですが正解。22玉に42龍とスリこめば、玉方の持駒に飛・金がないため、何を合駒しても31龍までとなります。

玉方の持駒に飛・金がないことに気付けば、難しいところはない作品です。

76



△金桂

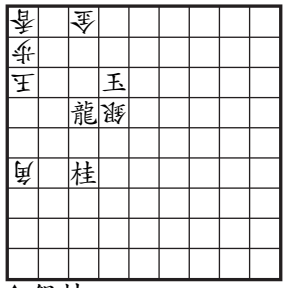
46(47)銀、同と、47桂打、同と、45金打
まで5手詰

大学将棋部の後輩・中村圭吾君の結婚祝に創作した作品で、初形「ミ」で、詰め上がりも「ミ」となる「立体曲詰」です。

なお、「ミ」というのは奥様の仁美さんの名前のうちの1文字で、本作のほか「ヒ」は筒井浩実氏、「ト」は山根省三氏の手によるものでした。

46(47)銀から47桂打の手筋で解決する、平易な作品です。

77



△銀桂

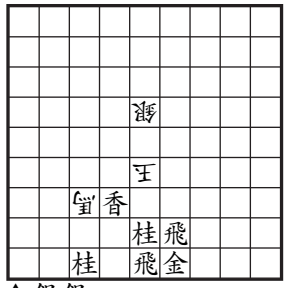
85桂打、同角、94銀打、同角、84龍
まで5手詰

74の龍が角にピンされています。94銀打や84銀打でも、82玉と逃げられ、83龍も、71龍も相変わらず指すことができません。

初手85桂打が正解。同角と取られるだけのようですが、こう前工作してから94銀打とすると、82玉には、85龍という手があるため、逃げられなくなっているのです。

94同角でついにピンがはずれて、84龍が実現します。

78



△銀銀

57銀打、同玉、66銀打、68玉、46桂
まで5手詰

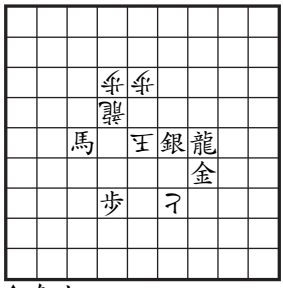
桂を跳ね出す手が見えていますが、46桂でも66桂でも脱出されそうです。57銀打と「た

たく」のが手筋。同玉に対して桂を跳ねると、59馬と抜かれてしまいます。

3手目の66銀打が馬の利きをそらす手筋。同馬なら同桂まで。56玉なら46飛まで。68玉なら新たに48の飛車のほうでの桂の開き王手となり、46桂までの詰め上がりとなります。

飛車と桂による開き王手が2通り楽しめる作品でした。

79



△なし

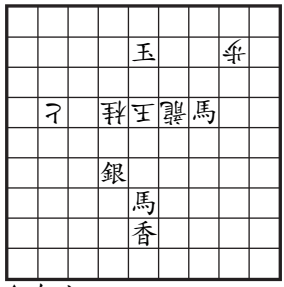
44龍、同龍、56銀、同玉、66馬
まで5手詰

いろいろな開き王手が出来ますが、銀をどこに動かしても、56玉と逃げられて、66には龍の利きがあるため詰みません。

44龍がその龍のそらす手筋。同龍に56銀と捨てて、66馬までの詰み上がりとなります。

「開き王手ができる形から、できない形にする」という狙いですが、これはあまり複雑さはありません。

80



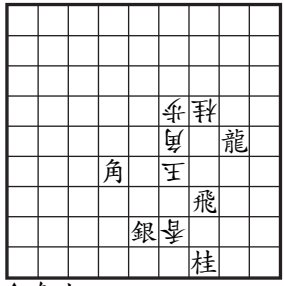
△なし

35(57)馬、56桂、45(34)馬、同龍、53馬
まで5手詰

初手46馬は、56歩打くらいで詰みません。35(57)馬として龍に狙いをつけます。56歩打などの普通の抵抗では龍を取られてすぐに詰むので、56桂の移動中合が詰将棋ならではの派手な応手です。

これに対し、取れる駒を一切取らず、45(34)馬が好手。同龍とガードを上げて、53馬まで。同龍のところ、64玉は63馬までとなります。

81



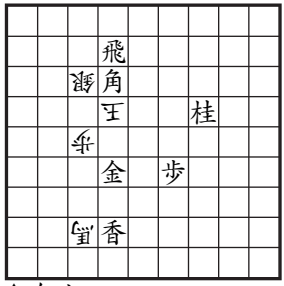
△なし

26龍、同桂、47銀、37玉、55角
まで5手詰

一見、龍を働かせたくなります。しかし、36飛、同角、55龍では、37玉で詰みません。また47銀も、37玉とされて、55角には46香打で詰みません。

大事そうに見える龍を、26龍と捨てるのが妙手。36歩打は、47銀（あるいは、57銀）まで。同桂とすると、34桂の46への利きがなくなるため、47銀、37玉に55角までの「すかし詰」となります。

82



△なし

56金、68馬、55金、同玉、45角成
まで5手詰

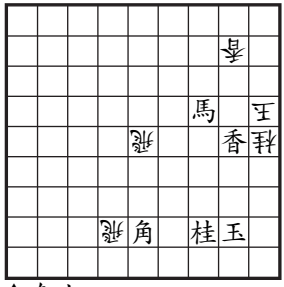
2通りの開き王手が出来る形です。ただ、角のほうの開き王手は飛車を抜かれて詰みません。

55金は、同玉と取られて、45には78の馬が利いています。

このため、56金と両王手をいったん保留する「時間差攻撃」が正解。53玉は、42飛成までですので、取るか67に合駒するかですが、いずれの手にも、55金と捨て、同玉に45角成が決まります。

チェス・プロブレムではよくテーマになっている「テンポ・ムーブ」（一手パス）のような作品でした。

83



△なし

23香成、36桂打、同角、25香打、26桂打
まで5手詰

初手23香成は、24馬までの詰みを狙った手です。どんな抵抗も無駄のようですが、2手目25香打と王手に打つとどうなるでしょう。

同馬なら23玉と脱出できますが、26桂と跳ねて詰みとなります。

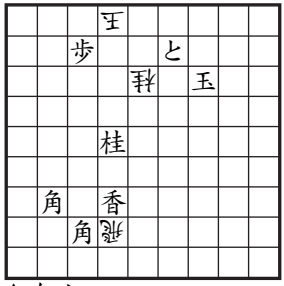
これ以外の手はないようですが、2手目36桂打という、一見無駄のような抵抗がありました。

これも王手ですので、同角と取る一手ですが、58の飛車の筋が通り、25香打に対して、26桂と跳ねる手がありません。

そこで取った桂を打って、26桂打までの詰みとなりますが、攻め方の持駒が余らないことから、2手目の36桂打は無駄合にはならないわけです。

5手詰で合駒が2回出てくるという稀有の作品でした。

84



△なし

73桂成、65桂、同香、63飛打、53桂打
まで5手詰

初手73桂成はこの一手ですが、普通に67飛成と香をはずすと、43角成までの詰みとなります。

65に合駒することで、43角成を防ぐことになりますが、65歩打などでは、同香、同飛成に34角とこちらの角で詰んでしまいます。

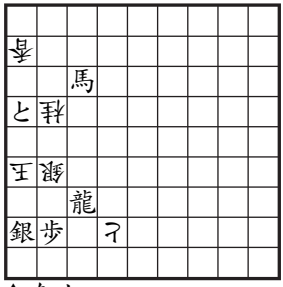
応手に困ったようですが、65桂の移動中合が妙手。同香と取らせれば53の桂が消えたことから63飛打が逆王手になります。

これに対して、同香は、同飛成がまた逆王手となり、詰まなくなります。取った桂を、53桂打と打つのが正解で、これで詰みとなります。

邪魔駒の桂を捌いて逆王手を狙うという、玉方の延命策を表現したもので、前作とは好

対照だと思います。

85



△なし

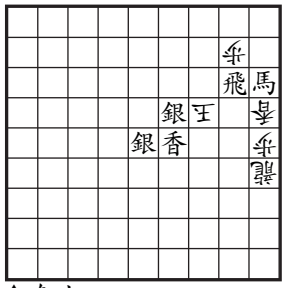
97銀、同銀成、76龍、同桂、95馬
まで5手詰

初手87銀が第一感ですが、取らずに97玉と逃げ込まれ、86龍には88玉で、86銀には98玉でいずれも詰みません。また初手74馬も、85歩打くらいで後が続きません。

97銀が正解。同銀成（成らないで同銀は、87龍まで）に対して、76龍が狙いの一手。86歩打などならそこで74馬です。

76同桂と取らせて95馬まで。馬を生かすために龍と銀が犠牲になる作品でした。

86



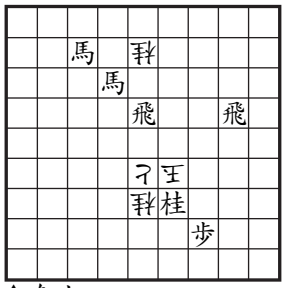
△なし

25飛成、同龍、43銀、45玉、46馬
まで5手詰

初手35馬は、23玉と飛車を取られてしまいます。33飛成も45玉で龍が利いているため、46馬とはできません。

25飛成が手筋の捨て駒。同玉なら35馬まで。同龍と取らせて、43銀が地味な好手で、45玉に46馬までの詰め上がりが実現します。

87



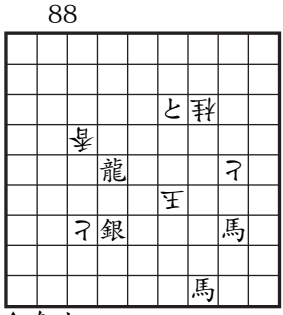
△なし

44(54)飛、同桂、36馬、同桂、44飛
まで5手詰

邪魔な飛車のおかげで馬2枚の威力が減殺されています。そこで初手44(54)飛が馬を捌くために必要な一手。45歩打だと、同飛、36玉、43飛成までですので、同桂と取ります。ここであわてて44同飛と指すと、今度こそ、45歩打、同飛、36玉、43飛成、45歩打で捕まりません。45同飛のところ、同馬も、47玉、36馬、38玉、27馬、39玉とされて詰みません。

3手目36馬が逃げ道を埋める捨て駒の手筋。同桂と桂を2段バネさせて、44飛までのすかし詰となります。

88



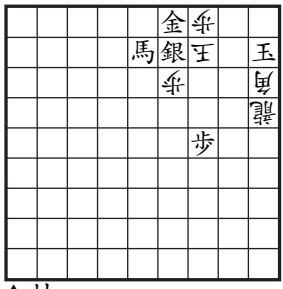
△なし

55龍、同玉、66銀、64玉、28(39)馬
まで5手詰

龍や馬に囲まれた玉ですが、そう簡単にはつかまりません。28(39)馬は57玉、56龍は35玉で、のらりくらりと逃げられてしまいます。

大事そうな龍を、55龍と捨てるのが詰将棋ならではの妙手。同玉に66銀と出ますと、46玉は、57馬まで。64玉なら28(39)馬までで、ぎりぎりつかまっています。

89



△桂

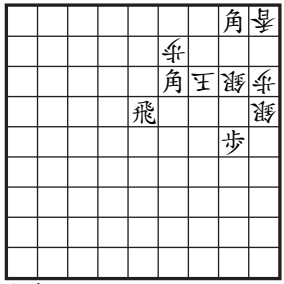
44桂打、同歩、33銀成、同玉、42馬まで5手詰

初手31金、同角、41馬まで、と早合点すると、その直後に玉を抜かれてしまいます。

「持駒に桂あらば打ってみよ」で、44桂打と打ちます。同歩と吊り上げて、33銀成が、守備駒に触らない軽手で、同玉に42馬までの詰み上がりとなります。

なお2手目同龍は今度こそ、31金、同角、41馬で歩が余ります。

90



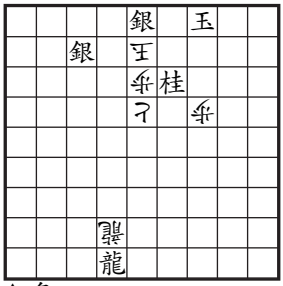
△銀

34飛、同銀、24銀打、44玉、54角成まで5手詰

24銀打と打ってみたくなる形です。24同銀なら32角成まででですが、22玉と引かれて、23銀成には、同銀で詰みません。

34飛が意表外の着手。22玉には、32飛成、同銀、32(43)同角成まで駒余りの詰みですので、同銀の一手となりますが、24銀打と打てば、22玉には32(43)角成まで。44玉には54角成までと、いずれも角が成っての詰みとなります。

91



△角

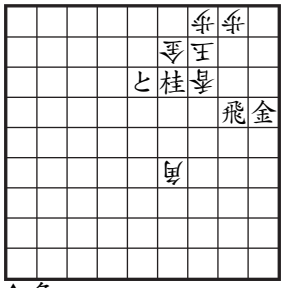
61角打、同龍、62龍、同龍、42銀成まで5手詰

初手42銀成は62玉で失敗します。43から逃げられると困りますので、61角打が手筋です。同龍で龍筋が通りますが、あわてて42銀成とすると今度は龍で玉を取られてしまいます。

そこで3手目62龍と捨てるのが一連の狙い。43玉は、42龍まででですので、同龍と取りますが、42銀成までの詰みとなります。

この作品のように玉方の駒が動き、それに吸いつけられるように同じ線上で攻め方の駒が移動するという手順は、チェス・プロブレムでは「ブリストル」(Bristol)と呼ばれています。

92



△角

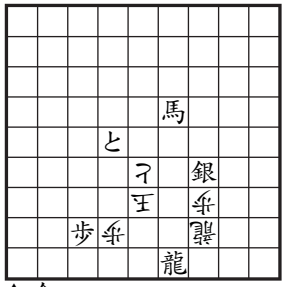
23金、41玉、32金、同玉、14角打
まで5手詰

41に潜られると厄介なようですが、23角打は22玉とされて今度は11に潜られてしまいます。

いかにも必要そうな14の金が実は邪魔駒で、23金から32金と消去すれば、14角打までの詰みがあります。

なお、4手目32同歩は21飛成まで。32同金は52角打までです。

93



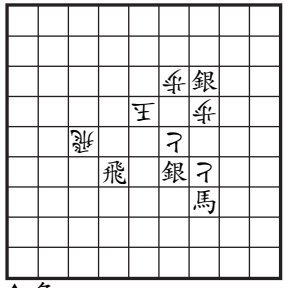
△金

58金打、同龍、46龍、同と、66馬
まで5手詰

守備駒が強力ですが、それを逆用します。58金打と捨てて、同龍で壁を作り、46龍と捨てるのが焦点への捨て駒の手筋。

4手目同玉は35馬まで、同とは66馬まで、67玉は77馬までと、どの応手にも馬が活躍しての詰みとなります。

94



△角

55銀、同と、45角打、同と、64馬
まで5手詰

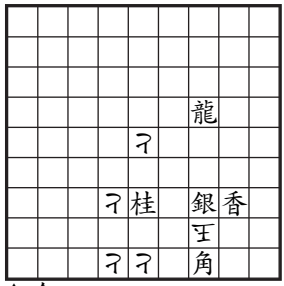
いかにして37の馬を世に出すかが問題ですが、45銀とはやると、同玉、36馬に55玉と逃げられてつかまりません。

初手は55銀と、邪魔な銀を捨てます。同飛は、72角打、53玉、63角成までの変化同手数の詰みで、これを答えても正解です。

同とに45角打が狙いの捨て駒で、同玉なら36馬までとなります。

4手目同となら初形から銀が消えた格好になり、64馬までの詰みとなります。

95



△金

46銀、47玉、36龍、同玉、37金打
まで5手詰

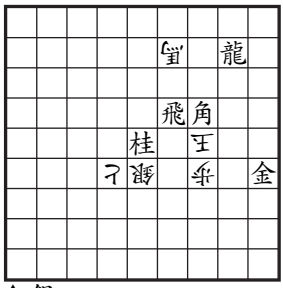
詰将棋慣れした解答者のために罠が仕掛けられた作品です。つまり、すこし詰将棋に長けた方ですと、26銀、47玉、36龍、同玉、37金打までという手順が目に付くわけです。

しかし、これが実は罠で、26銀には、36歩打の中合があり、同龍に29玉、28金打、19玉のときに1筋に龍が回れません。

このため初手は46銀が正解です。この位置は、36龍のときに邪魔になりそうですが、47玉、36龍、56玉には45銀までの詰みがあります。

ヒッカケとしてはできていますが、2手目29玉も5手駒余らず（変化同手数）となるのが、欠点といえば欠点です。

96



△銀

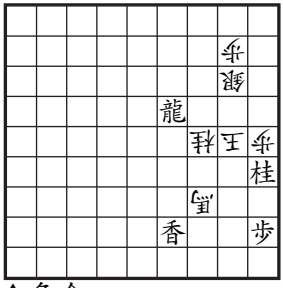
24龍、同馬、46銀打、44玉、43角成まで5手詰

初手46銀打はいかにも凡手で、44玉、42龍、54玉と逃げ出されてしまいます。

初手24龍が本筋で、変化は多いですが、24同玉には、12角成として、33玉には、34飛、35玉には、34馬までです。24同玉に代えて、44玉は、43角成、55玉、44龍まで。

やむをえない24同馬で43への馬の利きが消えます。そこで、46銀打と打てば、44玉に43角成までの詰みとなります。

97



△角金

34龍、同銀、14角打、同玉、24金打まで5手詰

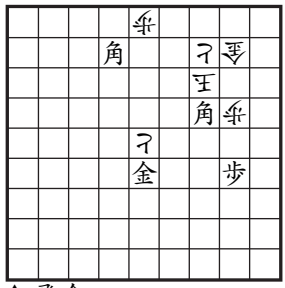
初手14角打と打ってみたくなりますが、同銀、24龍、36玉で詰みません。

34龍が意表の妙手で、36玉は45角打、26玉、17金打まで。26玉は17金打、36玉、45角打まで。これらの応手も駒が余りません（変化同手数）ので、いずれも正解です。

34同玉は52角打以下ですので、同銀と取りますが、そこで、14角打と打ち、どう応接しても金打までの詰み。

初手の見えにくさを狙った旧作ですが、今の自分なら変化同手数を嫌うところでしょう。

98



△飛金

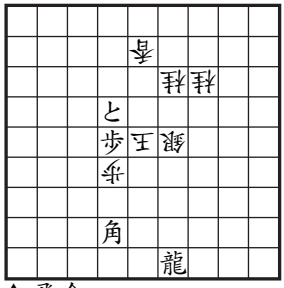
53飛打、34玉、35金打、同玉、33飛成まで5手詰

32のと金が金なら44金打、42玉、53角成くらいで詰むのですが、あいにくと金ですので、以下41玉で詰みません。

53飛打が打ちにくいですが正解です。42玉に51飛成、33玉、44金打を用意した手で、43歩打なら44金打と打ち、同玉なら43飛成、42玉なら51飛成までの詰みとなります。

そこで、34玉と角をはずします。飛車が邪魔をしているようですが、35金打が両王手となる地点に玉を移動させる捨て駒で、同玉に33飛成までと、きれいに詰みます。

99



△飛金

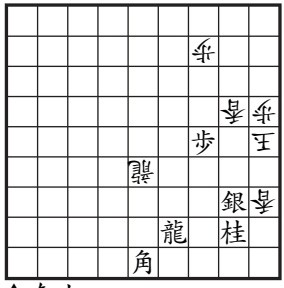
54金打、同香、56飛打、同銀、46龍まで5手詰

初手自然な46金打や56金打では、44玉とされて詰みません。54金打はあまりに筋悪なので最後のほうに思いつく手だと思います。同香に56飛打と捨てれば、44玉には54飛、56同玉には58龍、56同銀には46龍までの詰みとなります。

なお、3手目58飛打と打てば合駒が稼げそうですが、57歩打の中合が妙手で、同飛に56銀と移動合をされますと、飛車が邪魔で、46龍ができません。56同飛なら同玉とされて、58龍に45玉と脱出されます。

手筋の捨て駒の中に玉方の巧みな逃れ筋が秘められた作品です。

100



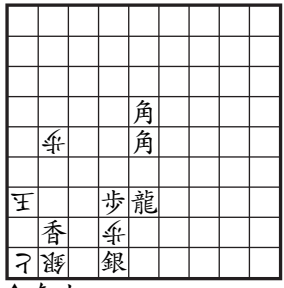
△なし

44龍、59龍、16銀、26玉、46龍まで5手詰

初手46龍とすれば、どう応接しても16銀までのようですが、26香と移動捨合されて、同龍には同龍があるためまんまと逃げられてしまいます。

24からの逃げを塞ぐ、44龍が、急がば回れという手。今度は59龍と取るよりなく、16銀から46龍までの詰みとなります。

101



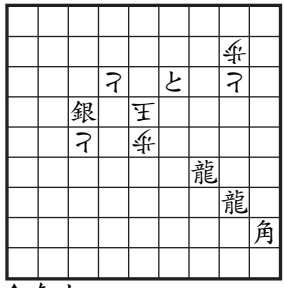
△なし

66歩、88玉、65歩、98玉、64歩まで5手詰

ひたすら歩を突いていくだけ、という作品。こういった遊びも、詰将棋の要素のひとつだと思います。

2手目96玉は87龍、95玉、85龍まで。4手目79玉は68龍まで。いずれも歩が余ります。

102



△なし

34龍、同と、23龍、45と、34龍まで5手詰

龍は強力とはいえ、角筋に2枚も必要ありません。

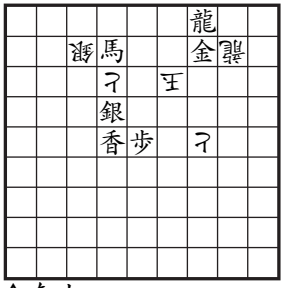
まず、34龍と捨てます。同との一手に24ではなく、23龍と歩頭に飛び出すのが好手。43

玉とされると詰まないのです。

4手目64玉は63角成までで歩が余ります。駒が余らない応手は、45との移動合だけで、34龍までの詰みとなります。

5手という短手数の中で、34龍という手が初手と最終手に2回出てくるところが面白いかと思います。

103



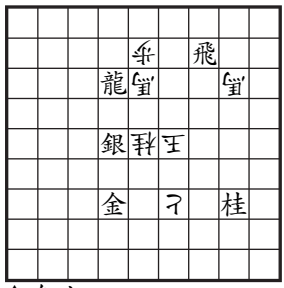
△なし

52馬、同玉、53銀成、同玉、42龍
まで5手詰

34から脱出されそうです。まず目につくのは、42金ですが、同龍と取られて詰みません。52馬が正解で、44玉の逃げには、42龍があります。同玉に53銀成が軽妙な手で、同とは香筋が通るので、42龍（41龍でもよい）まで。同玉には、42龍までの詰みとなります。

連続捨て駒で玉を攻方にとって都合のよい位置に呼び込む手順でした。

104



△なし

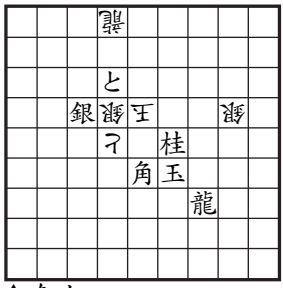
54龍、46玉、43龍、同馬、35飛成
まで5手詰

2枚の馬の利きが強力です。56金は44玉で逃れ。54龍が馬筋をそらす捨て駒で、同馬は35飛成までです。

46玉に56金は23の馬が利いています。ここで、43龍が、どちらかの馬の利きを消す捨て駒です。つまり、同馬や44歩打などには35飛成で、45歩打などには56金で詰みとなるわけです。

54龍～43龍という龍の動きを楽しんでください。

105



△なし

53桂成、同銀、34龍、44香打、45角
まで5手詰

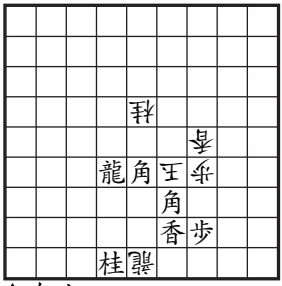
初手34龍と指し、44歩打に65角、同銀、53桂成までで詰みのようですが、44に香を合駒されると、桂がピンされるため、53桂成が出来ません。

そこで、先に桂を成っておくのが正解。44玉は、34龍までですので、同銀ですが、34龍とすれば何を合駒しても、45角までとなります。

ただし、香以外の合駒ですと、65角とこちらに出て歩が余る詰め方もありますので、4手目は44香打が正解となります。

妙味は乏しいですが、わざわざ逆王手をさせるような捨て駒（桂を捨てないで、34龍ならば香打は逆王手にはならない）が狙いの作品でした。

106



△なし

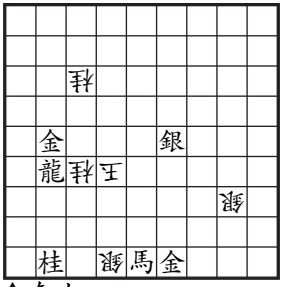
92角成、66桂、83角成、48龍、56馬
まで5手詰

開き王手が2通りできますが、王手駒は取られてしまいますので、戦力不足を補うために攻め方の角を馬にしておかないといけません。

そこで、92角成と、ここまで移動するのが正解。これなら3手目83角成が可能になり、最終手、56馬ができるからです。

角の連続最遠移動の狙いを端的に実現した作品です。

107



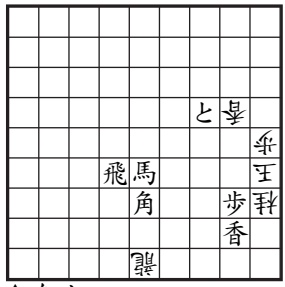
△なし

77馬、57玉、68馬、同玉、77龍
まで5手詰

初手75龍は、57玉なら55龍で詰みますが、いったん、67玉と逃げるのがうまい手で、77馬に57玉で、47から逃げられてしまいます。

初手は凡手に見える、77馬が正解。57玉でつかまらないように見えますが、68馬が絶妙の一手。47玉には37龍、68同桂成には56龍、66玉には75龍、68同玉には77龍と、いずれも一手で詰みます。

108



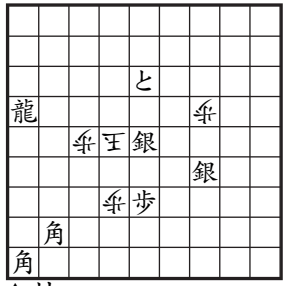
△なし

38馬、46桂打、26歩、38桂成、25歩
まで5手詰

初手38馬は、開き王手とともに次に26歩をみています。25玉は24とまででですので、合駒をすることになりますが、普通の合駒だと、26歩で詰んでしまいます。46桂打が38の馬に利かした移動中合で、これに同飛と飛びつくと、25玉とされて、24とが利きません。

初志貫徹の26歩が正解。38桂成に25歩まで。桂の中合を動かす手順でした。

109



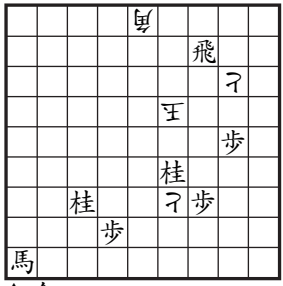
△桂

77桂打、55玉、44龍、同玉、65桂
まで5手詰

角2枚のならびが思わせぶりですが、その2枚が使えなくなるような77桂打が正解。76玉に85龍を用意しております。

55玉に44龍が妙手。同玉で脱出されそうですが、65桂でつかまります。53とは桂の紐がついており、角2枚のならびの威力で、55歩打などは無駄合となります。

110



△金

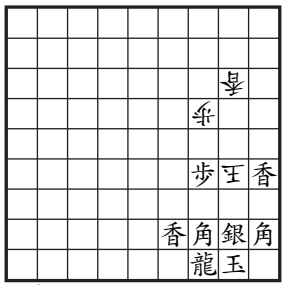
85桂、45玉、35飛成、同玉、36金打
まで5手詰

初手65桂か85桂かですが、65桂では、43玉と逃げられ、詰みがありません。働きの悪そうな85桂が正解です。43玉には98馬があり、以下44玉、54馬までと、金が余ります。

2手目55歩打などは54金打、45玉、55馬までですので、45玉と逃げますが、そこで、35飛成がとどめの妙手。56玉は67金打までです。

47とを省いて、4手目から56玉、66馬、同玉、67金打までの7手詰にするまとめ方もあるところですが、短く切り上げて主題のそっぽ行きが引き立つほうがよいと思います。

111



△銀

37銀、同玉、26銀打、同玉、28龍
まで5手詰

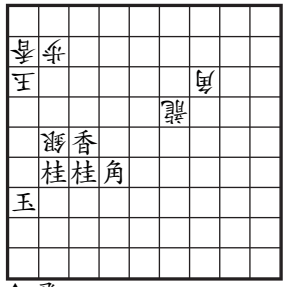
初形の28銀は邪魔駒ですが27銀では25玉以下脱出されます。

37銀が正解で、これなら25玉には28龍があります。

問題は、37同玉が逆王手になることで、ここで、27(38)角では、26玉で詰みません。

3手目26銀打が、王手を防ぎつつ逃げ道を塞ぐ好手。同香なら27(38)角までで、同玉なら邪魔駒の銀が消えたことから28龍までの詰みとなります。

112



△飛

63飛打、83歩、73香成、84歩、83成香
まで5手詰

初手73香成では、84に合駒をされて詰みません。また74香は、83玉が逆王手になり失敗します。

そこで、63飛打が正解ですが、83に合駒を打つと、74香までの早詰となります。

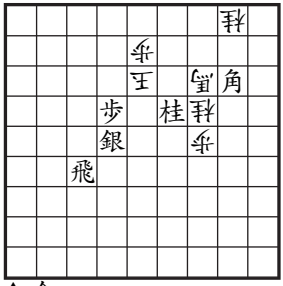
2手目は83歩と82への逃げ道を開きます。今度、74香は82玉と逃げられますので73香成が正解。

4手目は83成香で取られることのないよう、84歩が正解となります。

玉方の歩を2手連続移動合で動かすのが狙いでした。

なお、33角は、初手53飛打や43飛打を、同龍と取れるようにするための配置ですが、素直に53歩を置くのも考えられるところです。

113



△金

56飛、44玉、46飛、同桂、54金打
まで5手詰

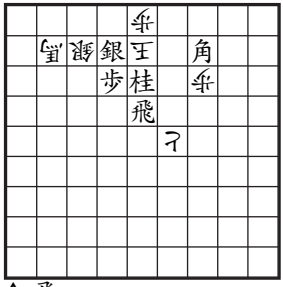
真っ先に目に付く手は73飛成と54金打ですが、前者は44玉で、後者は42玉で逃げ出されてしまいます。

56飛は最後に考える手ですが、これに62玉は、52飛成、73玉、74金打（または、71玉、72金打）までで捕まっています。

44玉に対して、54金打は45玉で、55金は馬が利いていてできません。

3手目46飛が、これまた指しにくい手。53玉は63金打、55玉は56金打、46同桂や45歩打などは54金打までと、いずれも詰んでいます。

114



△飛

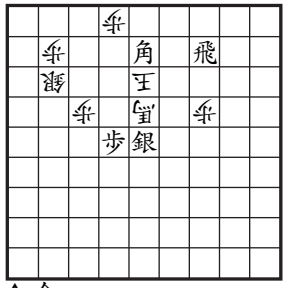
41桂成、63玉、43飛打、54玉、53飛成
まで5手詰

63からの逃げが見えていますが、41角成では、43玉で駄目。

脱出阻止は諦めて、41桂成が正解です。63玉に43飛打が打ちにくい手で、62玉に51飛成の余地を残しております。54玉には、53飛成までの詰みとなります。

なお初手61桂成は、42玉とされて詰みません。

115



△金

44銀、同馬、63角成、同玉、64金打
まで5手詰

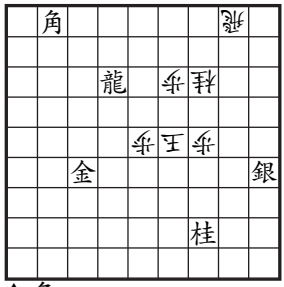
馬の守りが強力ですが、詰将棋では、54銀や64金打などと清算するような手はありません。

初手44銀が常識の逆を行く詰将棋らしい捨て駒で、同玉は、34角成、55玉、56金打までで歩が余ります。

同馬と取れば馬の守りがそれますので、63角成が決め手となります。

初手が意外ですが、紛れが少ないので易しかったと思います。

116



△角

78角打、36玉、67龍、81飛、27龍
まで5手詰

開き王手ができる形ですが、玉の逃げ方がいろいろありますので形を決めるのは損というものです。

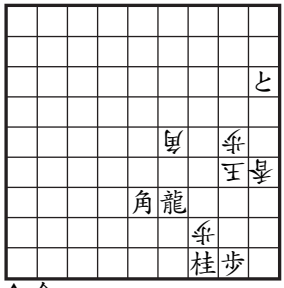
実際、43龍は56玉で、66龍は34玉で詰みません。

したがって、初手は角打ちとなりますが、78から打つのが正解です。

変化は多いですが、44玉は54龍、56歩打は43龍、55玉、54角成、67歩打は43龍、56玉、46龍までで、いずれも早詰ないしは駒が余ります。

36玉に対して、67龍が78に角を打った効果で、45桂打などは69角まで、81飛は27龍までと、いずれもピッタリ詰みとなります。

117



△金

46龍、36桂打、37龍、同玉、27金打まで5手詰

27には45角の利きがあります。このため、27龍はできませんし、37龍も、同玉で駄目です。

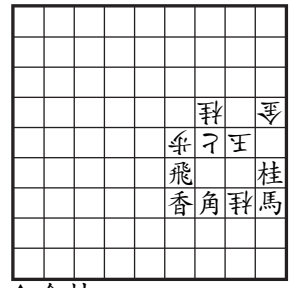
46龍として龍で35をガードします。36金打などでは、48角と引いて、17玉に28金打までの詰み。

したがって、2手目は36桂打となります。これなら28金打ができませんので、48角でも35龍でも詰みません。

3手目は37龍が正解。同玉に27金打までですが、この状態が、初形で37龍、同玉としたときと比べて36に合駒で発生した桂がが邪魔になっていて、角の利きが止まっている、という形になっています。

通常なら守備力を上げるはずの合駒をわざわざ発生させて、これを逆用して詰める、という構想作でした。

118



△金桂

36金打、同と、35馬、同と、17桂打まで5手詰

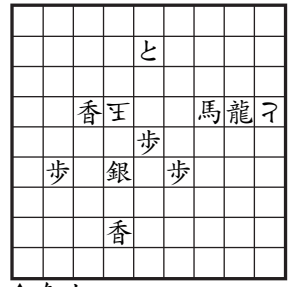
初形で馬が邪魔駒になっており、この馬がなければ、17桂打まで「桂つるし」の詰みがあります。

よってこの馬を捨てることになりますが、35馬では、同玉、45飛、36玉で失敗します。

初手36金打が駒を取らない詰将棋らしい手。同とと取らせて、35馬の「ウムノフ」。

今度は36からの逃げがないため、同玉には、45飛までとなります。35同とで馬の消去が成功し、17桂打までの詰みとなります。なお4手目16玉は、28桂打まで。こちらも「桂つるし」の詰め上がりです。

119



△なし

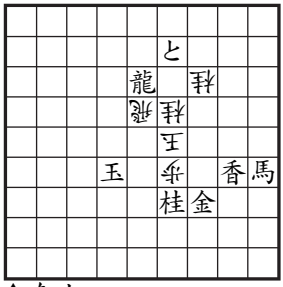
67馬、24と、75銀、63玉、34馬まで5手詰

これまた2通りの開き王手ができる問題。86歩が作意手順を暗示する配置で、初手67馬が香筋を遮りながらも、85馬を見込んだ正解手です。

24とに75銀と王手すると、同玉には85馬まで、55玉は45馬までとなります。

63玉には34馬と、馬が原型の位置に戻って詰み。これが「スイッチバック」と呼ばれるテーマです。

120



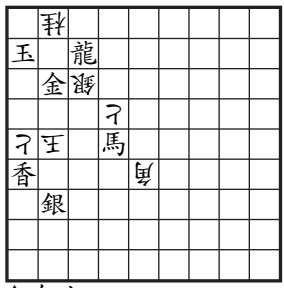
△なし

36金、同桂、34馬、同玉、43龍
まで5手詰

27馬は36歩打くらいで詰みません。36金がいかにも詰将棋、という手。同玉は33龍、47玉、38龍まで桂余り。同桂と取られたときに43龍とはやると、44角打が逆王手になり失敗します。

43とがあるので、34馬の発見はそう難しくはないでしょう。同飛は55龍まで。34同玉には43龍までとなります。

121



△なし

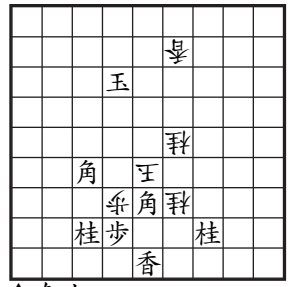
84金、同銀、74龍、同と、76馬
まで5手詰

初形で馬と金が56の角による王手を2重に遮断しております。この格好をチェス・プロブレムでは「ハーフピン」と呼びます。

初手76馬では74玉で、以下84金は同玉が逆王手になり詰みません。84金を指すと、馬がピンされてしまうので、指しにくい手ですが正解です。84同銀に74龍と改めてピンの解除（「アンピン」と呼ぶ）にかかります。同ととさせてようやく、76馬が成立します。

こうした「ピン」や「ハーフピン」をめぐる攻防も、合駒での逆王手とならぶ双玉の醍醐味になりうると思います。

122



△なし

93角成、59桂成、65角、同玉、66馬
まで5手詰

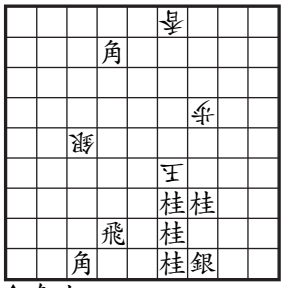
初手13角成とすれば、何に対しても46馬までのようですが、57桂成の移動捨合により、香筋を通す逃れがあります。

初手は93角成で、狙いは66馬。これに対して、57桂成は67角、55玉、66馬までで歩が余ります。

59桂成と、こちらの逃げ道を開けるのが正解ですが、今度は65角と捨てるのが手筋で、同玉に66馬までとなります。

攻め方の2枚の角と玉方の2枚の桂が織りなす虚々実々の攻防です。

123



△なし

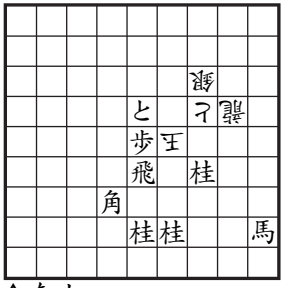
35角成、同歩、61飛成、47玉、67龍
まで5手詰

初手63飛成、47玉、67龍まで3手で詰みそうですが、2手目47玉のところ、一旦、57歩打と捨て合をして、同角、47玉で詰みません。

35角成の捨て駒は意味がよくわからないかもしれません。しかし、3手目61飛成で、狙いが明らかになります。そう、57歩打の捨て合に41龍という新たな詰み筋を用意しているのです。

もともと、61飛成から始まる3手詰の作品を逆算したものです。しかしこれによって、詰将棋らしい謎解きの要素が追加されたように思います。

124



△なし

44桂、27龍、36飛、67龍、37飛
まで5手詰

初手24桂と龍に飛びつくと、35玉、36馬、24玉と逃げられます。

龍を取らずに44桂が正着。27に合駒を打つと、36飛までの一手詰。

とはいえ、35玉は36馬までですから、万策尽きたように思いますが、27龍が玉方の妙手です。27同馬は35玉で、24からやはり逃げられます。

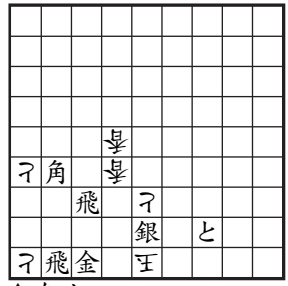
36飛に67龍と取れるのが27龍の効果。しかしそこで37飛として詰みとなりました。

解答者に派手な攻防を満喫させる野心作といえます。

なお、発表時は33の駒は歩でしたが、余詰が発見されましたので、今回の収録で修正しました。

コンピュータの検討力は恐ろしいものです。

125



△なし

68金、89と、79飛、同と、69金
まで5手詰

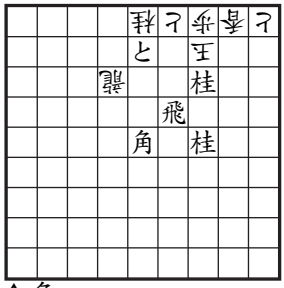
香2枚の守りはなかなか強力です。そこで68金が第一感で正着です。

同玉には57銀、58玉、48とで歩が余ります。そこで、89とと取りますが、そこで79龍と捨てるのが邪魔駒消去の一手。

同との一手に69金までの詰み上がりとなります。

謎解きよりも金の動きを楽しむ易しい作品です。

126



△角

14角打、33玉、32角成、同歩、14飛まで5手詰

41飛成は22玉と逃げられます。33桂が邪魔駒となっているためです。

そこで、初手は14角打となります。23歩打などは、41飛成、22玉、23角成までですから33玉と逃げます。

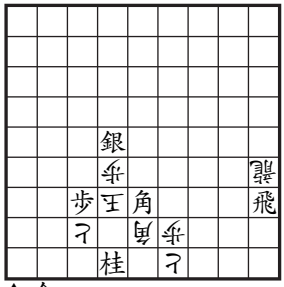
この局面をよく見ると、いま打ったばかりの14角が邪魔になっています。

そこで、打った角をすぐ捌く32角成が妙手。

同玉と取ると、初形で33桂がなくなった形になっているため、41飛成とすれば詰みになります。

4手目32同歩（同とでも同じ）に14飛まで。いつ見ても開き王手による詰め上がりは爽快です。

127



△金

79角、17龍、76銀、56玉、46金打まで5手詰

さりげない構図に猛毒が組み込まれています。すなわち、初手13角成がいかにもという手で、以下17龍、68金打、同馬、23馬までの詰め手順が用意されているからです。

この手順は、龍の利きがあるため最終手、12馬はダメということもあり、いかにももっともらしいことから、これに飛びついた方がいると思います。

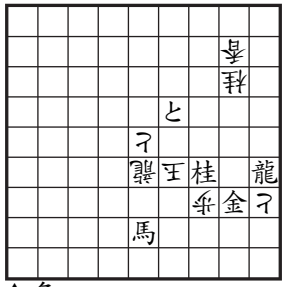
しかし、13角成には、47角成！の妙手があり、同飛、58玉となり詰みません。

正解はおとなしく79角。こんどは、47角成には、57金打で以下詰みです。

しかたがない17龍に76銀以下詰みとなります。

ひっかけの13角成でも、17龍に76銀以下の詰みがあるので、カモフラージュとしては難点（余詰のある手順が作意のはずがない）ですが、発表時には13角成以下の罠にひっかかっておきながら、3手目76銀以下の余詰指摘をされた方もいました。

128



△角

35角打、同桂、24桂、16と、36金まで5手詰

いかにも13に打ってくださいといった具合ですが、13角打には24歩打が好手で、同角成に35桂と跳ねます。24の馬が邪魔になるため、24桂とは指せず、35同馬、同玉となった局面は22の香の筋が通っているために詰みません。

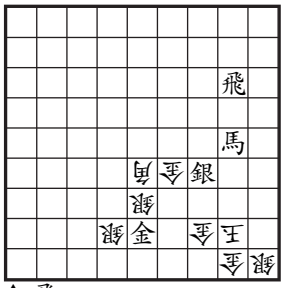
そこで、35角打が逆説的な妙手。同玉ならば、まだ香筋が通っていませんので、26龍、46玉、37金で歩余りの詰みとなります。

35同桂には今度は馬が居ないので、24桂と

跳ねることができます。以下16と、36金までの詰みとなります。

離して駒を打つと、邪魔駒になるということですが、実戦には例を見ない手筋だと思います。

129



△飛

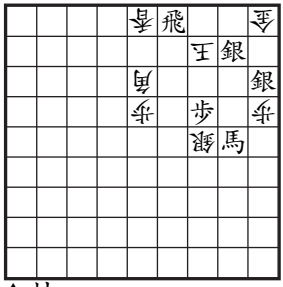
16馬、23角、18飛打、同玉、27馬まで5手詰

桂香歩以外の駒はすべて配置されており、可能な合駒が制限されております。

そのため、2手目39玉と入ると、99飛打！と打つ手があり、9段目に打てる駒がなく、49金の抵抗も、同飛までとなるため、合いきかずの詰みになっているのです。

そこでやむなく、23角と取りますが、18飛打の手筋で詰みます。駒を配置して、持駒を制限すると、こういった一風変わった変化を演出することができます。

130



△桂

44桂打、同銀、43飛成、同玉、33歩成まで5手詰

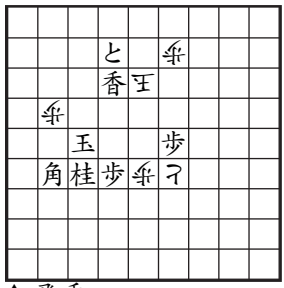
初手33歩成は41玉、14馬、52玉で詰みません。

かといって先に14馬も23歩で、31銀成には角の利きがあります。

そこで、44桂打が好手。41玉なら14馬で、こんどは52に逃げられず、42玉、32馬までの詰み。

44同角は14馬、23歩打、31銀成までなので、44同銀と取りますが、そこで、43飛成が妙手。同玉に33歩成まで、両王手の詰め上がりとなります。

131



△飛香

33飛打、43角打、55香打、54飛打、65玉まで5手詰

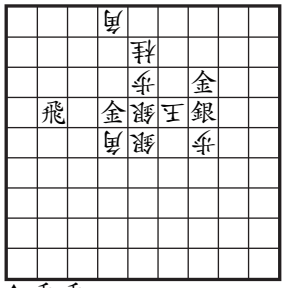
逃げ道を塞ぐ意味で、33飛打と打ちます。54玉なら34飛成以下ですので、打ち場所は限定されています。43に普通の合駒を打つと、65玉までですから、この地点に利かすために2手目の合駒は角となります。

3手目55香打に対して、54に普通の合駒を打つと、84玉までで歩が余ります。

このため、4手目の合駒は飛車が正解となりますが、飛車の合駒をすると、皮肉にも2手目の角の利きが止まるために、こんどこそ、65玉までで詰みます。

5手詰で2回の合駒が出てくるという珍しい作品ですが、手順のほうもストーリイ性があって面白いと思います。

132



△香香

45香打、同銀、54金、同銀、45香打
まで5手詰

まず、45香打は当然として、同銀と取られたときの3手目が問題です。

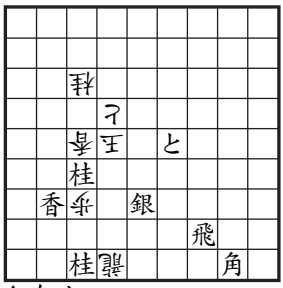
43銀成は角が利いていますので、65金とその角を外すと、今度は64桂と跳ね出されて61の角が利いてきます。

正解は54金。銀以外の何で取っても43銀成まで。銀で取れば45香打まで。今回は飛車の利きが通っていますから、同銀と取れません。

どうということもない手順のように見えますが、実は、この作品は詰手順が、上から読んでも下から読んでも「45香打、同銀、54金、同銀、45香打」となっている、というのが真の狙いでした。

このような作品は「回文詰」と呼ばれており、珍品といえます。

133



△なし

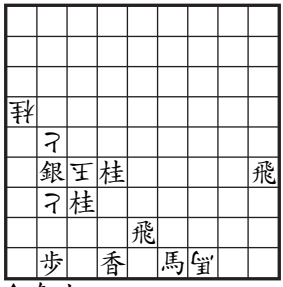
98飛、29龍、68飛、76玉、66飛
まで5手詰

両王手ができる形ですが、68飛、76玉、66飛は、同龍と取られてしまいます。

かといって、26飛も56歩打と合駒をされて、同角、76玉以下続きますが、詰みません。

98飛が妙手。76玉は96飛までですので、29龍の一手に68飛、76玉、66飛が実現します。

134



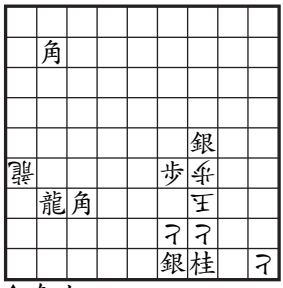
△なし

54飛、49馬、74桂、16馬、56飛
まで5手詰

初手2通りの開き王手があります。54桂あるいは、74桂として16飛で王手するのは、66歩打と合駒されて詰みません。

桂の利きの邪魔になりそうですが、54飛が正解。86玉なら85馬、97玉、94飛（あるいは、77玉、74飛）まで。49馬と取りますが、66への利きが消えて、74桂に合いが利きません。このとき49馬で16の飛を取ることができますが、56飛までぴったりの詰みとなります。

135



△なし

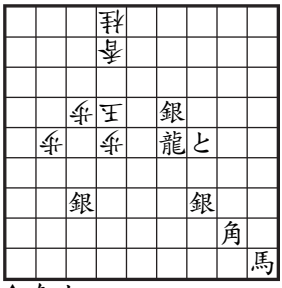
66角、87龍、45歩、82龍、55角
まで5手詰

これまた2通りの開き王手ができる形。45歩を先にすると、46桂打とされて、以下66角は、28玉、27龍、39玉、38龍、同桂成で詰みません。この最終、同桂成と取るための2手目の桂打でした。

したがって、桂打をさせない、66角が正解です。これなら28玉は、27龍、39玉、38龍まで。

また同時に96龍の利きを遮っていますので、47歩などには、45歩までとなります。87龍とすれば、45歩に対し82龍と取れますが、55角までの詰め上がりとなります。

136



△なし

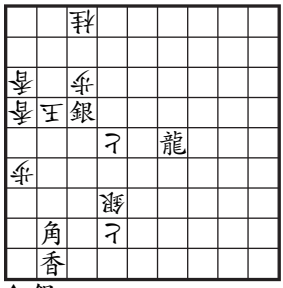
26銀、63玉、54龍、同玉、18馬
まで5手詰

銀での開き王手は3通り可能ですが、26銀が正解。

63玉に54龍と捨てます。72玉は82角成までですので、54同玉と取ります。そこで、18馬までの詰み。

蛇足ですが、初手36銀では、この18馬ができません。また48銀は75玉とされて、39角が利きません。

137



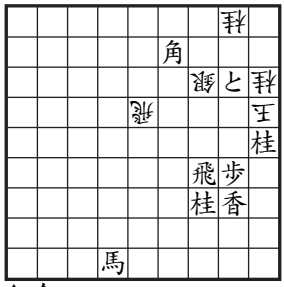
△銀

75銀打、同と、55角、74玉、54龍
まで5手詰

66角は74玉で詰みません。また85銀打は95玉なら77角までですが、75玉でだめ。ちょっとひねって75銀打が正解。これなら同玉は65龍、86玉、85龍まで。

75同とで手に困ったようですが、龍の利きを止めるような3手目の55角が狙いの一手。95玉や8筋への合駒は73角成まで。74玉は54龍までで、ぴったりの詰みとなります。

138



△金

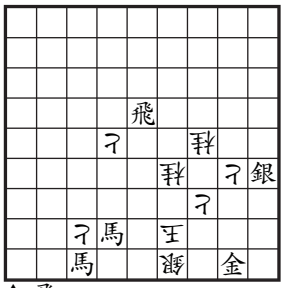
25金打、同桂、34飛、同銀、24角成
まで5手詰

両王手ができる形ですが、34飛、15玉、

14飛は、同飛で詰みません。

両王手よりも15に逃げられたときの手立てが必要で、初手は25金打。同桂の一手に34飛と捨てます。34同飛や15玉は25馬までで桂が余ります。34同銀に24角成までとなります。

139



△飛

47飛打、同桂、59馬、同桂成、57馬まで5手詰

57馬は59玉で、59馬は47玉で、それぞれ詰みません。

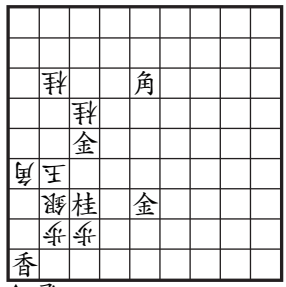
47飛打が玉の進退伺いの捨て駒。同玉は57馬、36玉、46馬まで。

47同とは59馬までですので、59に利かすための、47同桂（あえて成らない）が最善の応接です。

それにもかまわず59馬がとどめで、同桂成と取らせて、57馬まで。

玉方桂の2段ばねと、大駒の豪快な捨て駒が狙いの作。

140



△飛

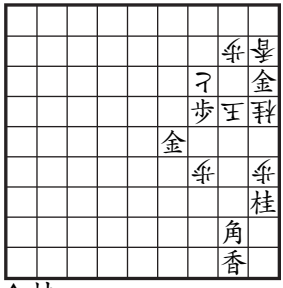
66飛打、同桂、85金、77玉、86角成まで5手詰

85金は77玉、67飛打、76玉で桂がよく利いています。

66飛打が正解で、77玉は67金まで、95玉は85金まで、76香打などの合駒は76同金、95玉、85金まで、76銀成は76同金、87玉、97角成までと、いずれも詰みます。

66同桂と桂をそらせてから85金とすると、77玉でも、76玉でも、86角成までの詰みとなります。

141



△桂

55角、26桂、46角、15玉、27桂打まで5手詰

初手46角は、15玉、27桂打、26玉で詰みません。

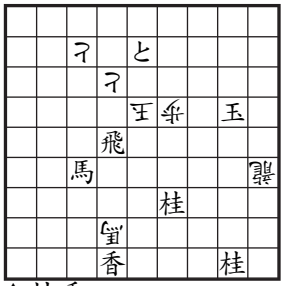
55角と一間遠くまで行きます。13玉は25桂打、24玉、33角成まで。

26香打などの合い駒では33角成、13玉、25桂打まで。26金は同香、同桂、14金打まで。

26桂と跳ね出すのが唯一の受けですが、すかさず、46角と引き、15玉に27桂打と打てば、今度は桂が邪魔をしており、26玉とは移動できません。

移動中合をさせることで逃げ道を断つという珍しい構想でした。

142



△桂香

57香打、同馬、46桂打、同龍、55飛
まで5手詰

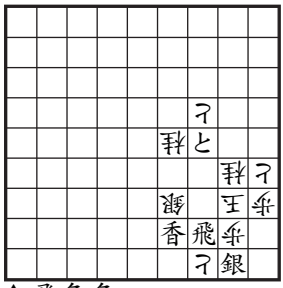
初形で攻め方に王手がかかっていますので、可能な王手は限られています。

35飛は64玉でも、76龍でもダメ。46桂打は同龍と取られて、以下66飛は45玉、55飛は64玉で、いずれも詰みません。

よって57香打が残ります。同馬と取らずに56歩打などは66桂打まで。55歩打などは66飛で、45玉に37桂までの詰みとなります。なお、角は品切れですので、55角打とは打てません。

57同馬でまた王手ですが、今度は香筋が通っているために46桂打と打つと、同龍には55飛、同馬には35飛で、それぞれ詰みとなります。

143



△飛角角

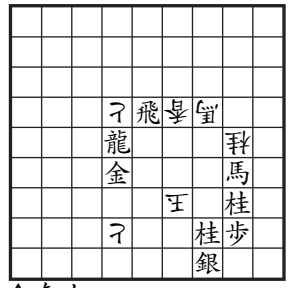
36角打、同銀成、47飛打、同成銀、36角打
まで5手詰

いきなり、28飛では37玉で失敗します。36角打として香筋を通しておくのが正解。36同銀は28飛、37玉、46角打までの詰みとなりますので、36同銀成と取りますが、そこで、47飛打が狙いの一手。

47同成銀と取らせると、初形の47銀が成銀になった格好になります。そこで、36角打と打てばそのまま詰みとなります。

捨て駒で銀を成らせる狙いです。

144



△なし

45龍、同馬、57飛、同玉、48馬
まで5手詰

初手48馬は36玉で後が続きません。

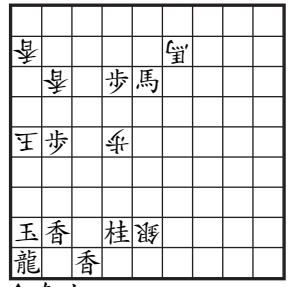
2枚の飛車をどう使うかですが、57飛、同玉、48馬は、香で取られてしまいます。

45龍と、こちらを捨てるのが正解。

2手目45同香は48馬、36玉、34飛まで。

45同馬とすれば香の利きが止まり、57飛、同玉、48馬までの詰みとなります。

145



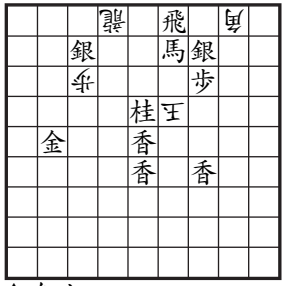
△なし

87王、85玉、78王、74玉、89王
まで5手詰

特に複雑なカラクリはなく、王の移動による開き王手を繰り返せばそのまま詰みとなります。

88の香のまわりを、攻め方王がくるりと回転する動きを楽しんでいただければと思います。

146



△なし

53馬、同玉、42桂成、44玉、51成桂まで5手詰

初手52馬や31馬などは、もちろん、41龍と飛を抜かれて詰みません。

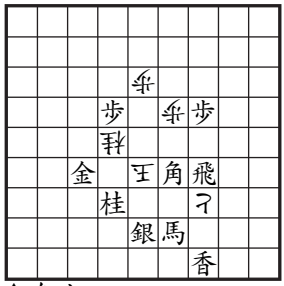
そこで、まず思い浮かぶのは、51馬でしょう。

しかし、51馬、53玉となった局面は、以外にもつかまりません。43飛成や42桂成は64玉で逃げ出されてしまいます。

初手53馬！これ以上の妙手はなかなか無いかと思います。53同玉の一手に42桂成と成ると、64玉にはさきほどの局面と比べて51の馬が居ませんので、61飛成まで詰むのです。

そこで、42桂成には、44玉と戻りますが、今度は香筋が通っていますので、51成桂までの詰みとなります。

147



△なし

47馬、同と、66金、同玉、55角まで5手詰

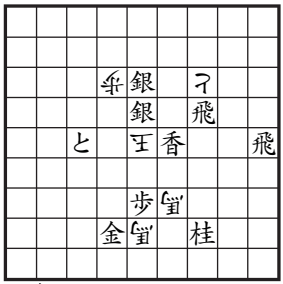
初手66金や66馬は、45玉と逃げられて飛車に当たります。

そこで、47馬とすると、これなら45玉には、35飛、54玉、65馬までの詰みがあります。

47同とと取らせて66金と捨てれば、45玉には、55金まで、66同玉には、55金までと、いずれも詰みとなります。

66の地点に2枚利いているところを、1枚別のところに捨てて、66金を捨て駒にするという手順でした。

148



△なし

42香成、66玉、36飛、同馬、65飛まで5手詰

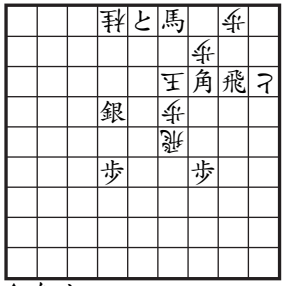
一見43香成でよいように見えます。25歩打などの合駒は、同飛、同馬、65とまでですし、66玉に36飛とすれば、同馬や56歩打は65飛までで、46歩打は同飛で無駄合です。

このように合駒は利かないように見えるのですが、43香成には、35歩打という見落としやすい手があり、これを35(15)同飛と取ると、66玉のときに歩を取った飛車が邪魔になります。35(34)同飛なら54玉と逃げられて、43の成香に当たってしまいます。

このため、初手は42香成が正解です。これなら35歩打には35(34)同飛と取り、54玉には55飛まで、66玉には36飛と引けるため、先の、35歩打が無駄合となります。

捨て合での逃れ筋が隠されたヒッカケ作でした。

149



△なし

24角成、23と、42(24)馬、34玉、52(41)馬まで5手詰

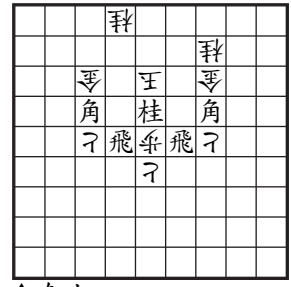
42角成は34玉で飛車に当たります。

52馬は54玉、63馬、43玉で千日手。

24角成とすれば、33香打などの合駒には、32馬と切る手があり、同玉、33飛成まで駒余りの詰みとなります。

23とと飛車を取らせてから42(24)馬と入れば、23からの逃げがありませんので、34玉に52(41)馬までの詰みとなります。

150



△なし

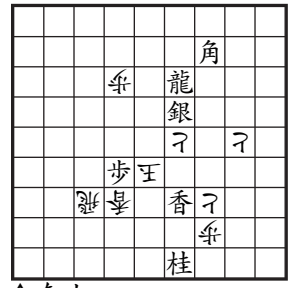
63飛成、同金、52角成、同玉、42飛成まで5手詰

ほぼ左右対称ですが、中央に52角成と成ると、どちらの角でも、54玉と上がられて、どちらかの飛車に当たってしまいます。

どうせお荷物になる飛車ですので、初手に63飛成と成り捨てておくのが正解です。同金に続けて、52角成と捨てると、54玉には63馬で駒余りですので、52同玉に42飛成までとなります。

同じようでも、43飛成では、同金、52角成、同玉、62飛成に41玉と逃げられて失敗します。

151



△なし

54龍、55と、45龍、同と、65角成まで5手詰

龍が邪魔駒ですが、ひねって、53龍や52龍は、66玉で失敗します。

普通に54龍が正解。47玉は、57龍、36玉、37龍まで。

かといって、55歩打も45龍、66玉、55龍まで駒余りとなります。

55金打は、同龍、同と、57金なら駒は余りませんが、45龍と取れば、同金には、65角成ですので、やはり駒が余ります。

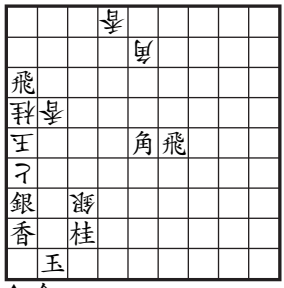
万策尽きたようですが、55とという移動捨て合がありました。

これを同龍と取ると、57龍、36玉、37龍のときに45玉と逃げ出せるわけです。

そこで、55とにも45龍と、初志貫徹の捨て駒が正解。同とと取らせて邪魔駒消去に成功し、65角成までの詰みあがりになりました。

龍の邪魔駒消去ととと金の移動捨て合の組み打わせです。

152



△金

86金打、同銀、73角成、75銀、86銀まで5手詰

77角まで両王手の1発で詰みに見えますが、攻め方の王に王手がかかっているため、まずそちらをなんとかしないといけません。

そこで86金打と打ちます。同香なら同銀と取って、同銀成には73角成、84玉には73飛成までです。

そこで2手目は銀で取ることになります。

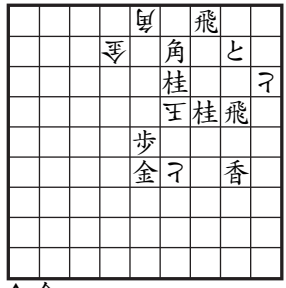
そこで、84の香をピンするために73角成と指します。何を合い駒しても、86銀までですので、銀の移動合で駒余りを避けることになります。

このとき2手目86銀成としていると、4手目85成銀とせざるをえないため、96銀まで歩余りの詰みがあります。

そこで、2手目は86銀と、成らずで取るのが正解で、これなら75銀と、こちらに逃げることができます。

詰め上がりは86に玉方の守備駒が4枚利いていますが、いずれもピンされています。チェス・プロブレムで「4重ピンメイト」と呼ばれる詰め上がりが狙いでした。

153



△金

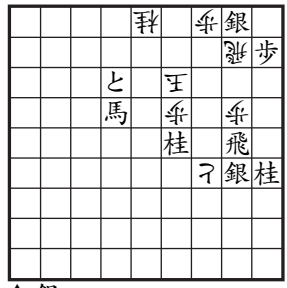
53角成、同金、35金打、同玉、42桂成まで5手詰

初形で34の桂での開き王手は、左右いずれもできませんので、邪魔をしている角を捌く手は見えやすいと思います。

53角成と捨てると、同玉には、54金打、52玉、51飛成までですので、同金と取ります。ここで、42桂成とはやると、24とでと金が働いてきて失敗します。

3手目は35金打が正解。同玉に42桂成までぴったりの詰みとなります。同玉のところ43玉は、32飛成まで。

154



△銀

42馬、同飛、54銀打、同玉、53桂成まで5手詰

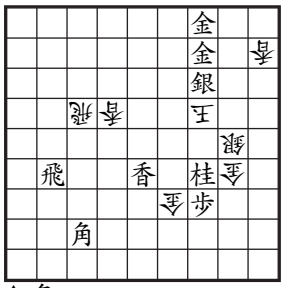
54銀打や53と、53馬など、有力な手はいくつかありますが、いずれも34玉と上がられたときに手が出ません。

初手は42馬が思い切りのいい捨て駒。これなら34玉には、33馬があります。

42同玉は、53と、41玉、33桂で銀が余りますので、42同飛と取りますが、そこで、54銀打と打つのが好手。この銀が45に利いているために34玉には、24飛までの詰みがあります。

54銀打は同玉と取られてしまいますが、53桂成で飛車がよく利いており、そのまま詰みとなります。この詰め上がりが見えている方にとっては、42馬もさほど不利感はなかったことでしょう。

155



△角

54香、78飛成、23角打、同玉、24銀成まで5手詰

初手23角打は、35玉と逃げ出されてしまいます。

香での開き王手は、角だけではなく飛車の利きも通して、46を塞ぐ意味もあるわけです。

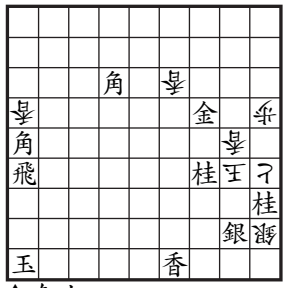
しかし、その場所には注意。53香成や55香では、67香成と捨てる手が妙手で、以下同角、45歩打に対して、23角打と捨てても、同玉、24銀成、同飛で詰みません。

玉方にとっても、香の移動が飛車の利きを通す手になっているのです。

そのため、54香が慎重な手。これなら香捨ては利きません。56歩打は、同角で無駄合となります。

2手目は78飛成でも45歩打でも23角打以下詰みです。なお、金が品切れのため、45金打は指すことが出来ません。もし金打が出来れば、4手目43玉と逃げて、逆に54香をとがめることができるのですが……。

156



△なし

44桂、86飛打、36角成、同飛、59角まで5手詰

99に配置された王が、ちょっとしたトリックを生み出します。

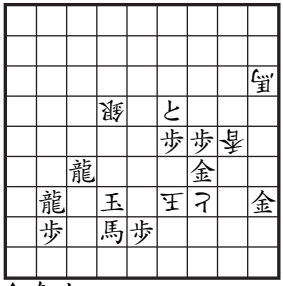
初手59角は48歩打くらいで詰みません。44桂は、96香が逆王手。

先に44桂が自然な王手で、正解です。15玉には、51角成までですが、このとき飛車が96に居ないと99の王を香で素抜かれてしまいます。

これを狙って玉方は、2手目に中合をします。ただし、86以外の場所に打つと、59角までの早詰となります。86に飛車以外の合駒をすると、36角成、同玉、86飛で合駒が余ります。このため、36角成を同飛と取ることのできる飛車を打つことになります。

飛車の捨て合が飛び出し、それが86～36と移動する、5手詰にしては雄大な構想です。

157



△なし

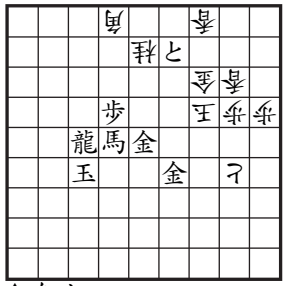
66王、36玉、57王、35玉、67王
まで5手詰

初手78王は、38玉、37龍、29玉で、78の王が邪魔になるため詰みません。

そこで、66王が正解ですが、今度は龍の利きを遮るため、36玉と逃げられます。続けて、57王と追撃。これは玉が47に入ってくるのを止めるためです。35玉の一手に67王までで詰みとなります。

攻め方の王が動くというのは、双玉作品でのひとつの狙いになりますが、本作は3度動いて初形の位置に戻ってくるという還元王を実現した珍品です。

158



△なし

44金、同玉、54馬、同玉、55龍
まで5手詰

龍の利きが攻め方の駒で2重に止まっています。

この2重の障害をどう捌くかですが、まず、44金と捨てます。2手目25玉は、43馬まで。

2手目44への取り方で、手順が3通りに分岐するのが狙いです。

すなわち、

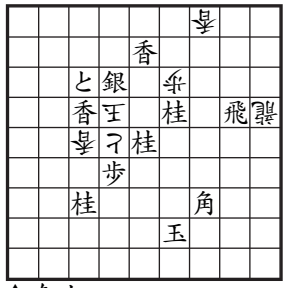
44同玉は、54馬、同玉、55龍まで。

44同金は、43馬、同金、35龍まで。

44同桂は、56馬、同桂、35龍まで。

2手目に44で金を取った駒が、4手目に馬を取る、という手順に統一性にあまり気がつく方はいないと思いますが、こういうのも一つの狙いだと思います。

159



△なし

32桂成、44歩、43桂成、55と、65歩
まで5手詰

初手65歩は、53玉で失敗。53を押さえるため、43桂成も目に付きますが、37香成で失敗します。

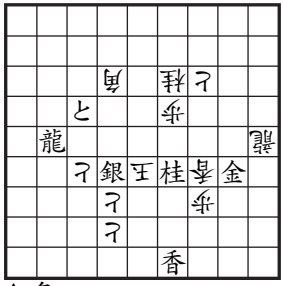
まず32桂成と、香筋を止めます。44香打という逆王手ができれば詰まないのですが、香は4枚配置されており、品切れです。

2手目の応手は、43桂成で取られないように44歩と逃げておくのが正解です。

また43桂成に対しても、65歩に取られないとうに55とが正解です。

変わった手順ですが、狙いは、「直前に移動した駒が元いた位置に移動する」チェス・プロブレムで「ウムノフ」と呼ばれる手順が、2手目以降連続して現れるところにあります。

160



△角

65角打、45玉、47角、46玉、65角
まで5手詰

銀が浮いていますので、取られたときのことを考えれば、65角打はこの一手です。

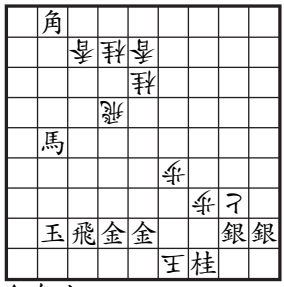
66玉は76龍、57玉、56龍までですので、45玉と逃げます。

ここで、54角は56玉で千日手になってしまいます。

正解は、47角。これは、36金が狙いです。46玉と角筋を通す手が唯一の抵抗ですが、今度は、65角で詰んでいます。

角が元いたところに戻ってくるという「スイッチバック」が狙いですが、初手にその角を打つ図を強引に実現しました。

161



△なし

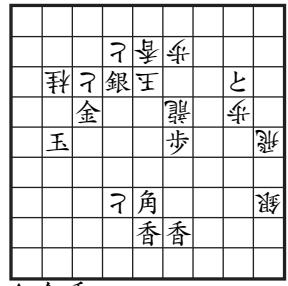
59金、38玉、74馬、同飛、77金
まで5手詰

初手59金はこの一手ですが3手目が問題で、67金は、78香成が逆王手で失敗します。

74馬が好手。28玉は、29馬まで。74同香は、27角成まで。これ以外の応手に対しては、74同飛は77金、74同桂は67金、65桂は57金までと、金の開き王手でそれぞれ詰みとなります。

応手に対して金の開き位置が違ってくるところが、本作のテーマでした。

162



△金香

55香打、同龍、75角、同桂、44金打
まで5手詰

75角の両王手が目に付きますが、43玉、44歩、34玉で詰みません。

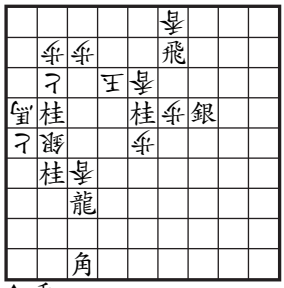
逆王手が目に付くので指しにくい、55香打が正解。54歩打などは同銀成、同龍、44金打までです。

また43玉は、55香打の効果で、44歩と取り込むことが可能となり、34玉に24とまでの詰みとなります。

55同龍に75角とすれば、龍は香にピンされていますので、同龍とは取れず、同桂に44金打までの詰みとなります。

なお、最終手、54金打以下でも詰むのが嫌味ですが、2手目の変化との関係から消すことはできないようです。

163



△香

69香打、54玉、43銀、45玉、47龍
まで5手詰

「下段の香に力あり」といいますが、この作品でも、69香打と打つのが唯一正解の打ち場所です。54玉は43銀、45玉、47龍までの作意手順となり、73玉は72飛成、84玉、57角までの詰みとなります。初手の69香が68や67や66だと、この変化の最終手の47龍または57角の邪魔になってしまいます。

では、合駒をされたらどうなるのでしょうか？

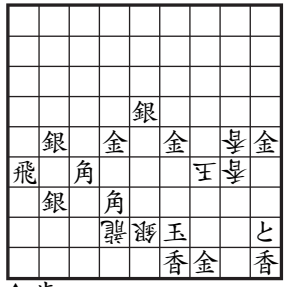
64歩打などは、62飛成、54玉、64龍まで。

65歩打などは、62飛成、54玉、65龍まで。

66歩打・67歩打・68歩打などはいずれも、同龍、73玉、64龍（あるいは、54玉、64龍）までで、いずれも合駒余りの詰みとなります。

香の最遠打を強引に実現した作品です。

164



△歩

27と、同香、37歩打、26玉、16金
まで5手詰

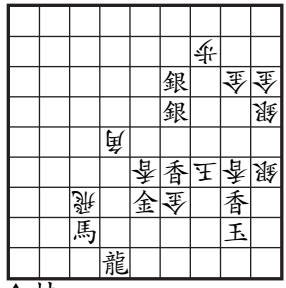
37歩打は打歩詰の反則です。また58角は、47歩打と逆王手に打たれて、同角とは取れないために失敗します。

この作品は、玉方の持駒が桂と歩だけなのがつけ目です。そこで、27とが正解。同香成なら58角と指します。一見事情が変わっていないように見えますが、今度は47歩打で攻め方の王が詰んでしまうために打歩詰の反則となることから、打てなくなっています。そのため、58同龍と取るか、47桂打と打つかとなり、前者は58同角、後者は67(76)角でそれぞれ詰みとなります。

したがって、2手目は27同香と成らずで取りますが、打歩詰ではなくなったので、37歩打以下の詰み。

攻方と玉方の双方において打歩詰回避の手が入っているという珍品です。

165



△桂

48桂打、同金、39龍、同金、69馬
まで5手詰

初手39龍は、37桂打で詰みません。それから48桂と打っても、25玉と逃げられます。

これまた玉方の持駒が桂と歩だけだということに着目します。そこで、48桂打と先に打てば、25玉には、65龍以下詰みですので、48同金の一手。

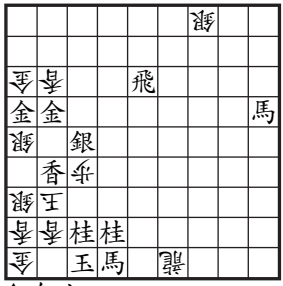
そこで、39龍と指せば、38桂打は反則ですので指せません。そこで39同金に69馬までの詰みとなります。

山田修司氏の傑作『禁じられた遊び』での

「8段目に桂は打てない」ことを逆用した構想を、5手詰で表現してみました。

28に王を配置しているのは、これがないと、仮に38桂打ができたとしても、38同龍で詰みがあり、構想が形式的に成り立たなくなってしまうためです。

166



△なし

57飛、96玉、41馬、同龍、66桂
まで5手詰

これまた玉方の持駒が桂と歩だけであるため、奇妙な攻防が展開される作品です。

初手66桂は、77玉で詰みません。

57飛成とすれば解決するようですが、これには妙手順での逃れがあります。

まず、67歩打（桂でもよい）。同龍で無意味のようですが、そこで、77歩成。

66桂とすると、78歩打と打ちます。67歩打と捨てておいたことから、これを、78同龍と取ることができます。以下78同とで、なんと、詰まされたのは攻め方の玉でした。

まとめると、57飛成ならば、67歩打、同龍、77歩成、66桂、78歩打、同龍、同とで失敗というわけです。

そこで、57飛！（あえて成らない）が妙手です。これに対して、67歩打、同飛、77歩成、66桂、78歩打なら、今度は、同龍と取れないために打歩詰の反則となり、以下69龍、同馬まで、となります。この手順は、67歩が無駄合いですので変化同手数駒余りとなり正解ではありません。

そこで2手目は96玉と逃げ、41馬とこちらに捨てて、66桂までの詰み。深遠な構想を秘めた上に収束もまとまったエレガントな作品です。

167



△角桂

19角打、同龍、84桂、99龍、83桂打
まで5手詰

84桂で3手詰のように見えますが、98角成！とされると逆王手になってしまいます。

そこで、19角打！が限定打。

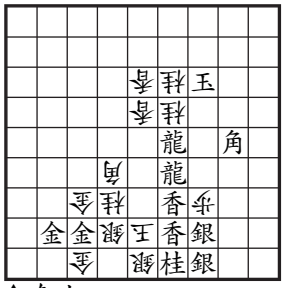
玉方は金と歩しか持っていません。2筋から7筋に金を打つと取られて、82金打までですし、歩打は二歩の反則です。

そこで、同龍と取るより他にありませんが、これで、98角成の筋が消え、84桂、99龍、83桂打までの詰みとなります。

単純なしかけで、面白い手順を表現してみました。

伊藤看寿の『将棋図巧』では、角のさまざまな遠打が表れていますが、本作品集にも看寿に倣って、たくさんの角遠打ちが織り込まれています。

168



△なし

55(46)龍、同角、56龍、同桂、44香

まで5手詰

とんでもない形をしており、手順も奇妙奇天烈です。玉方は歩しか持っていないことに注意してください。

このままでは、47香が動けませんので、46の龍を捨てることになります。56(46)龍は、69玉と潜られて、46香に36桂が逆王手になってしまいます。そこで、55(46)龍と指します。これに69玉も、56歩打などの合駒も、46香までですので、龍を取ることになります。

いろいろな取り方がありますが、55同桂は同龍と取って、どう応接しても、44香までの詰みとなります。なお、同龍と取らずに46香は36飛打ができるので注意してください。

そこで、55同角と取りますが、56龍がとどめの妙手です。どう応接しても、44香までの詰みですが、このとき駒余りとならないために、4手目は56同桂と取ることになります。

なお、2手目55同香でも、56龍と捨てることになりますが、このときは、同桂に43香成という桂余りの詰みがあることから、どの応手でも駒が余ります。このため2手目は55同角が正解となります。

龍をクロスに（46→55、45→56）捨てるのが面白いかと思います。

169



△角角

17角打、82玉、19角打、93玉、39角
まで5手詰

手がかりがないように見えますが、例によって玉方は歩しか持っていません。

そこで、53角打などと打っても、61玉は43角までですので、82に逃げるよりないのです。

したがって、53角打、82玉、28角打、93玉、75角成までの詰み？

いえいえ、53角打、82玉、28角打には、64歩！が妙手で、以下64(28)同角、93玉、75角、82玉で千日手にしかなりません。

また64歩に64(53)同角成も、71玉で詰みません。

初手から53角打、82玉、28角打に代えて、44角打、82玉、28角打なら55歩！、35角打、82玉、28角打なら46歩！、26角打、82玉、28角打なら37歩成！で、同様の結果となります。

正解は、17角打！

ここに打ってから82玉に19角打！と打ちます。

28歩打は二歩の反則ですので、今度こそ、93玉と逃げるよりなく、39角までの詰みとなります。

上田吉一氏の有名な作品のパスティーシュです。

170



△なし

37と、同玉、28と、同玉、91角打
まで5手詰

これまた凄い格好です。玉方の持駒は歩だけ。

まず、37とと取ります。15玉なら51角打まで。合駒は利きません。

37同玉と取ると、玉は3方向に逃げることができますが、そこで、28と！が妙手。取らずに逃げる手はどこでも、37角打までです。28同玉で攻め方の駒が盤上から消えますが、

91角打！と打って合い利かずの詰みとなります。

玉を詰めるには、最低2枚の駒の協力が必要というのが常識ですが、このような合い利かずの場合は1枚でも詰みます。このような詰将棋は俗に「スーパー詰将棋」と呼ばれておりますが、そのなかでも角で詰めるというのは非常に珍しいと思います。

171



△飛金

89飛打、同馬、62桂成、45と、72金打まで5手詰

40枚の駒をすべて配置した5手詰。玉方の持駒はありません。62桂成は45とが逆王手になるので失敗します。

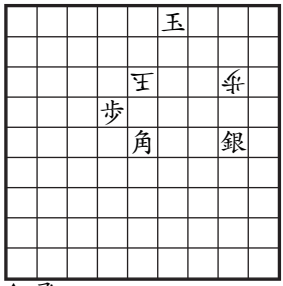
そこで初手89飛打が正解です。玉方の持駒はなしなので、合駒を打つ手はありません。

なお、初手を89以外の位置、たとえば、85飛打と打つと、72玉、75飛、63玉と逃げられてしまいます。89飛打ならば、72玉には、79飛、63玉、85角打までの詰みがあるわけです。

89同馬はやむをえませんが、これにより、62桂成に45とが逆王手にならず、72金打までの詰みとなります。

伊藤宗看の『将棋無双』第十番を5手詰でやってみたものです。

172



△飛

b) 23歩→74

a) 52飛打、43玉、33角成、同玉、42飛成まで5手詰

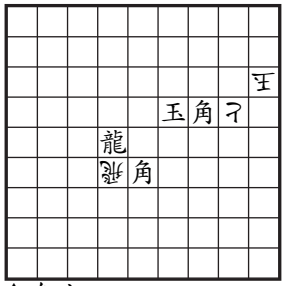
b) 51飛打、62玉、63歩成、同玉、52飛成まで5手詰

これまでもかなり実験的な作品はありましたが、ここから先はまったく新しい分野「ツイン」という表現による作品を紹介していきます。

「ツイン」というのは、複数の似た局面で複数の異なる作意手順の対照性を表現するという、普通の詰将棋より1歩次元の進んだ表現形態です。従来から詰将棋では似たものとして「姉妹作」という概念がありますが、「姉妹作」は形だけが似ているもので、手順の対照性は意識しておりませんでした。

さて、本作の場合はa)でもb)でも初手打った飛車を最終手に成って詰み、という手順であり、また3手目に捨て駒があるという点でも対照的であります。こうした2つの手順を、23歩と、74歩の違いだけで切り分けるのがツインの特徴です。

173



△なし
b) 44玉→16

a) 15龍、22玉、11龍、同玉、12角成まで5手詰
b) 12角成、14玉、23馬、同と、15龍まで5手詰

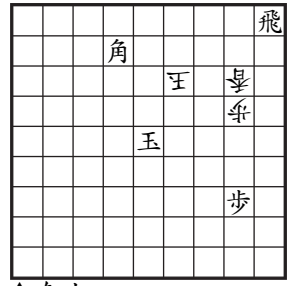
チェスプロブレムの世界では、ツインによる対照性の表現が、主に協力詰（ばか詰）の分野で深く研究されております。

その中でも「ジラーヒ」（Zilahi）というのはかなりポピュラーなテーマで、本作のようにa)で取られる駒（龍）がb)で詰める駒になり、a)で詰める駒（馬）がb)で取られる駒になる、というものです。

この作品はそれに加えてa)の初手（15龍）が、b)の最終手となり、a)の最終手（12角成）が、b)の初手になるという構成になっております。もちろん、これは偶然ではなく、狙って作ったものです。

こう説明すると、面白い、と思う人もあれば、何が面白いのかわからん、という人もいます。しかし、どう共感するかが難しいというのは、そもそも詰将棋という表現が持っている特性でもあります。

174



△なし
b) 43玉→34

a) 41飛成、34玉、35角成、同玉、45龍まで5手詰
b) 44角成、25玉、16飛成、同玉、26馬まで5手詰

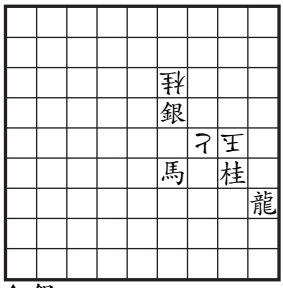
ツインにおいては、手順の対照性だけではなく、形の類似も重要です。形が違えば違うほど、表現が容易になるからでしょう。だいたいa)とb)との形の違いは1箇所であり、2箇所3箇所となると、極端に作図が容易になるので、その分価値も低くなります。

本作の場合は、1箇所の違いであるとともにその違いがa)から2手目の玉方の応手を進めた局面であるということが、面白いと思います。

手順のほうも3手目に大駒を成り捨ててもう1枚の大駒で詰みというジラーヒになっております。

思うに、詰将棋というパズルがいかに芸術性が高いといっても、「謎が解けないから楽しめない」という部分があることは事実であり、芸術としてはそこが欠点になると思います。音楽や絵画は、わかるわからないは別に、楽しむことができますから。しかしツインでの表現はパズルとしての謎というより、より感性に訴えるものであると思います。

175

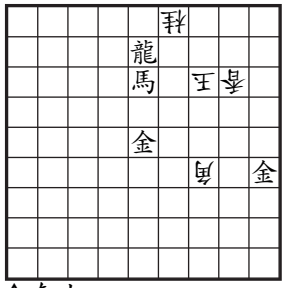


△銀
b) 26桂→36
a) 36銀打、同と、24馬、同玉、14龍
まで5手詰
b) 26銀打、同と、14龍、同玉、24馬
まで5手詰

これまた馬と龍のジラーヒですが、銀を捨てる位置の対称性や、わざわざ桂の利きのないところ（a)では24、b)では14）に大駒を捨てるというのが面白く、簡潔な配置でうまくできていると思います。

パズルのようなものは、謎が解ける／解けないということが重要であるために音楽や絵画みたいに簡単には楽しめないものです。しかし、このツインという表現は、謎解きの要素というよりいかに感じるか、ですので、棋力が高い／低いによらず楽しめるのがよいところです。

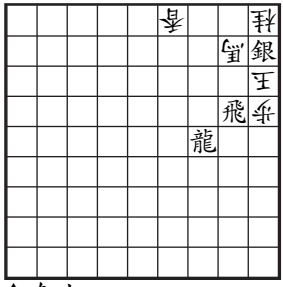
176



△なし
b) 55金→12
a) 42龍、24玉、35馬、同玉、44龍
まで5手詰
b) 43馬、24玉、54龍、同角、25金
まで5手詰

龍と馬のジラーヒにはなっているようですが、厳密にはb)の最終手が馬でないので、表現の純粋さという点では欠けます。しかし、2つの手順は手筋物として不自然さがなく、同じくらいのレベルなので、解いてみて面白さは感じられると思います。

177



△なし
b) 22馬⇔14歩
a) 22飛成、同玉、31角打、12玉、32龍
まで5手詰
b) 14飛、同玉、36角打、13玉、15龍
まで5手詰

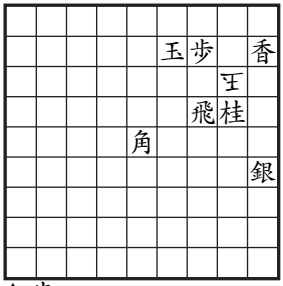
a)とb)で2枚の駒の場所を入れ替える、というツインです。

初手に角を取り、3手目にそれを打って、5手目は龍によるすかし詰。

対照性は明らかですが、詰将棋らしさをかなり犠牲にしております。

しかし、ツインの面白さは、そういう謎解きとは違う次元にあると思います。

178



△歩
b) 23玉→13

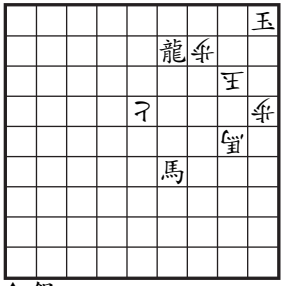
a) 33飛、14玉、15歩打、24玉、46角
まで5手詰
b) 22角、14玉、15歩打、23玉、33飛成
まで5手詰

a)では飛車の不成、b)では角の不成が出てくる作品。

これは狙いがわかりやすいと思います。

b)で最終手から、33角成、13玉、22馬以下の余詰があるのがちょっと痛いキズではあります。

179



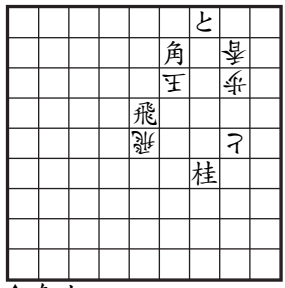
△銀
b) 32歩→桂

a) 43龍、同馬、24銀打、34玉、35馬
まで5手詰
b) 13馬、同玉、33龍、23歩、22銀打
まで5手詰

ツインではa)とb)で、使用する駒の種類が変わっている、というのもあります。

これまたa)では龍捨て、b)では馬捨てですが、その後の手順の対照性がいまひとつです。

180



△なし
b) 31と→51

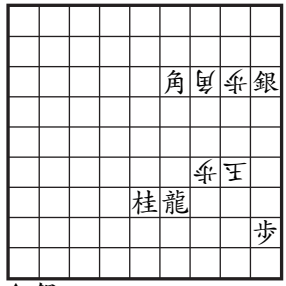
a) 53角成、33玉、34飛、同玉、44馬
まで5手詰
b) 44飛、32玉、31角成、同玉、41飛成
まで5手詰

No.175と同じような流れです。25とがb)では働きがないという点は、経済性の観点からは気になるところです。

ただ、ツインの場合は、a)とb)がそろってひとつの作品ですので、2通りの手順にどういった対照性を表現していくかというところがポイントです。

そもそも、表現と配置のどこに折り合いをつけるのか、というのは詰将棋を作る者にとっては永遠に解決されない課題ではあります。

181



△銀
b) 57桂→39

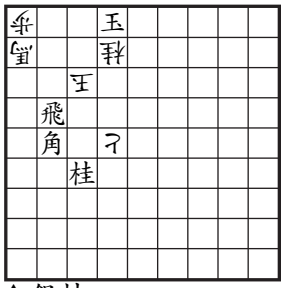
a) 35銀打、同玉、34角成、同玉、45龍
まで5手詰
b) 15銀打、同角、16角成、同玉、27龍
まで5手詰

銀を捨てて角を成り捨てて、龍でナナメから王手をして詰みという手順を2通り実現させたものです。

さまざまな対照性をいかに発見して1つの作品で実現するのか、というのがツインの面白さであります。

ちなみに作る側は、単純に2作創作するよりも、倍以上に神経を使います。

182



△銀桂
b) 91歩→42

a) 82飛成、同玉、94桂打、73玉、84銀打
まで5手詰
b) 63角成、同玉、52銀打、73玉、85桂打
まで5手詰

a)では初手飛車を成り捨てて、同玉に桂・銀と打って詰み。

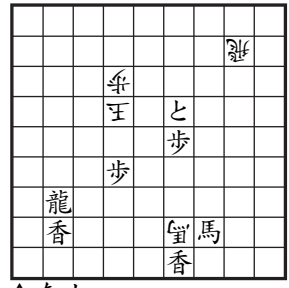
b)では初手角を成り捨てて、同玉に銀・桂と打って詰み。

これはわかりやすいと思います。

4手目73玉と指すと、初手捨てた駒が居た場所に最終手を打つ、という共通点も現れます。

ツインらしい作品でした。

183

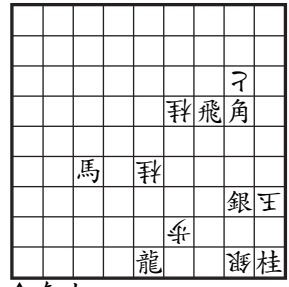


△なし
b) 88香→68

a) 74馬、55玉、57龍、同馬、65馬
まで5手詰
b) 84龍、55玉、37馬、同馬、54龍
まで5手詰

典型的なジラーヒです。ツインの面白さは、本作のように3手目の捨て駒がいずれも香筋を通すためでありながら、その手の場所や変化系が若干異なるというように狙いは似ているけれども内容が違うというところにあると思います。

184



△なし
b) 17玉→45

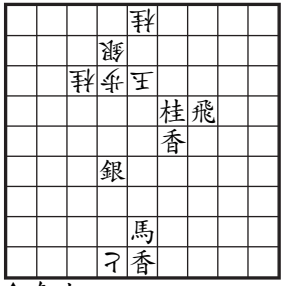
a) 35角、28玉、39龍、同玉、17角
まで5手詰
b) 35飛、46玉、57龍、同玉、37飛
まで5手詰

初手でバッテリーを作り、3手目に龍捨て、最終手に両王手というように手順の対照性が抜群です。

ただ、従来の詰将棋と同じ感覚で評価すると、たとえばa)での56桂や、b)での19桂は不要ですので、大幅に減点する方もいらっしゃるでしょう。

もちろん、もうひとつの測るべきモノサシを持っていない方であれば、そういった評価もやむをえないことです。

185



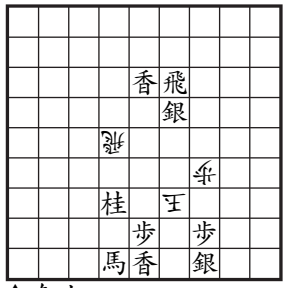
△なし
b) 45香→47

a) 25馬、59と、52桂成、同玉、54飛まで5手詰
b) 76馬、59と、54馬、同玉、52桂成まで5手詰

手順に関連性はあまりありませんので、ツインというより普通の「姉妹作」といった感覚の作品だと思います。変化系が類似しているのも弱点です。

正算式（形から入る）創作法で、複数の詰み筋がある場合にそれぞれの筋を作意手順に仕立て上げれば、複数の作品が出来上がります。ツインの創作はそういう蓋然性に任せるのではなく、当初から複数の手順の関連性を表現しようとするもので、普通の詰将棋の創作方法が平面的であるならツインは立体的な想像力が必要とされます。

186

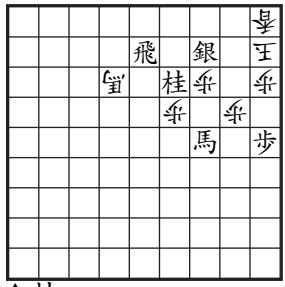


△なし
b) 67桂→66

a) 55銀、56玉、47飛成、同玉、57歩まで5手詰
b) 57歩、46玉、47馬、同玉、55銀まで5手詰

複数の詰み筋の組み合わせを、桂1枚で切り分けるという、「姉妹作」的作品です。そのため、ツインの表現としては感じるところが少ないですが、単発の作品と見ても一応見られる手順になっています。こういった作品のほうが、普通の詰将棋を見慣れた方には受け入れやすいかもしれません。

187



△桂
b) 43桂→46

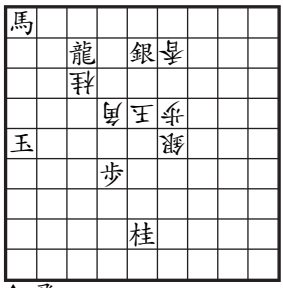
a) 34馬、同歩、21銀、同玉、33桂打まで5手詰
b) 45馬、同歩、23銀成、同玉、35桂打まで5手詰

a)もb)も初手に馬を捨てることによって最終手の桂の打ち場所を作るという手順です。

ツインでは、a)が解ければ、その内容からb)も解けるというものですが、本作の場合、案外b)の初手の、45馬は見え難いかもしれません。

なお、b)2手目45同馬は、31銀以下桂余りの詰みですが、この変化があるためb)の初手と3手目の手順前後は利きません。

188

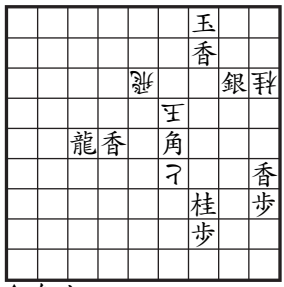


△飛
b) 54玉→75

a) 53飛打、同角、63龍、55玉、65龍まで5手詰
b) 74飛打、同玉、92馬、75玉、65馬まで5手詰

チェスプロブレムでは「ピン・メイト」という詰め上がりがよく研究されています。ツインのテーマでもa)とb)で異なるピン・メイトとなるものがたくさん作られております。本作はその詰将棋版。a)では馬でピンして龍でのピン・メイト。b)では龍でピンして馬でのピン・メイトとなります。

189



△なし
b) 75龍→馬

a) 64龍、35玉、24龍、同玉、34銀成まで5手詰
b) 66馬、43玉、33馬、同玉、34銀成まで5手詰

攻め方の駒の種類を変えたツインです。

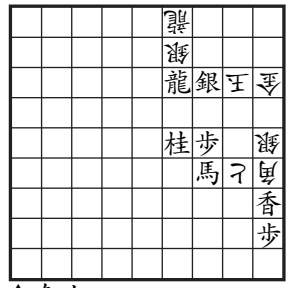
姉妹作のように変化系が似ている場合は、解いても2作解いたという気分にはならないものです。

本作のように攻め方の駒の種類を変えると、変化系はかなり異なってくるため、2作分読まされると思います。

a)の2手目43玉は、34銀成、52玉、62龍まで。b)の2手目35玉は、34銀成、26玉、44馬までで、また55飛は、34銀成、53玉、63角成までと、いずれも変化同手数で詰みとなります。

このためa)とb)の対照性を見出すのも、一苦労かもしれません。a)では龍、b)では馬の2段活用が狙いでした。

190



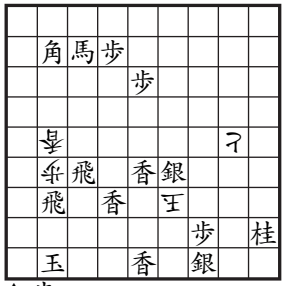
△なし
b) 13金→14

a) 32銀、24玉、13龍、同玉、23金打まで5手詰
b) 34龍、同角、14馬、同玉、24金打まで5手詰

手順はいずれも普通の詰将棋としては落第点ですが、狙いは詰め上がりがa)とb)で1段ずれた格好になっているということ。こういった対照性を、チェス・プロブレムでは「カメレオン・エコー」と呼んでおります。チェス盤は白と黒に塗り分けられており、詰め上がりの玉位置のマス目の色が違うからなのです

が、洒落た呼び方といえましょう。

191

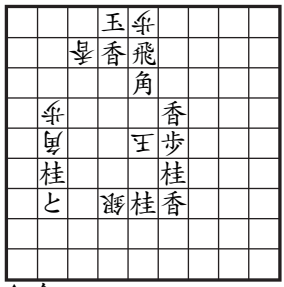


△歩
b) 18桂→27
c) 18桂→58

a) 63香成、87歩成、48歩打、36玉、52成香まで5手詰
b) 64香、87歩成、48歩打、46玉、55香まで5手詰
c) 66香、87歩成、48歩打、56玉、45角成まで5手詰

初形の打歩詰を香の開き王手で解消するのですが、その方法がa) b) c)の3通り用意されている、というものです。なお、85香や89玉の配置は、a)とc)の3手目77飛という嫌がらせ的捨て駒を消すための配置です。

192



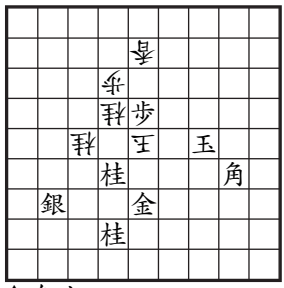
△金
b) 72香→43
c) 72香→63

a) 64角成、同玉、53飛成、同玉、54金打まで5手詰
b) 66金打、同玉、75角成、同玉、55飛成まで5手詰
c) 75角成、52歩、66金打、同香、65馬まで5手詰

手順を見ただけでは意味がわかりにくいですが、攻め方の、「52飛」と、「53角」と、「持駒の金」の行方を追いかけると、a)では角、飛と捨てて金で詰めており、b)では金、角と捨てて飛で詰めており、c)では飛、金と捨てて角で詰めるという、3枚の駒でのジラーヒとなっていることがわかります。

これに気付けば結構楽しめますが、ひとりよがりと見向きもしない方もいらっしゃることでしょう。実は「ひとりよがり」というのは、いちばん詰将棋らしいことなのかもしれません。

193



△なし
b) 54歩→67
c) 55玉→65

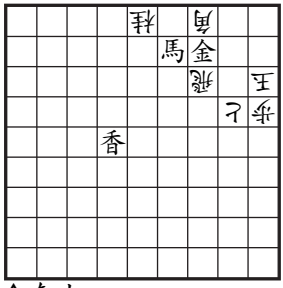
a) 37角、65玉、76銀、同桂、56金まで5手詰
b) 56金、同桂、37角、65玉、76銀まで5手詰
c) 76銀、同桂、56金、64玉、37角まで5手詰

解いてみて意味がわからないと思った方も多いと思います。

攻め方の指し手に着目してみますと、a)では「37角、76銀、56金」、b)では「56金、37角、76銀」、c)「76銀、56金、37角」という順番で出てきます。つまり本作はa) b) c)間での攻め方の指し手が、サイクルを構成している、というのが狙いです。

ここまでくると、相当次元の違うことをしているのだと気付かれるかと思います。

194



△なし
b) = a)の詰め上がり図
から玉→43

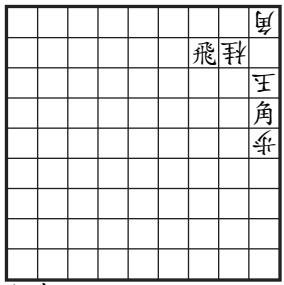
a) 31馬、23玉、12角打、同玉、22馬
まで5手詰
b) 33馬、53玉、52飛、同玉、42馬
まで5手詰

a)の詰め上がりに手を加えてb)の初形にするという趣向です。

手順のほうは、取った駒を直に捨てる、というように一応関連性があります。

馬がくるりと1回転。このように5手詰の範囲ではできない狙いもツインのテーマになりうると思います。

195



△金
上の図から
a) 13玉→12
b) 15歩→16
c) 14角→23

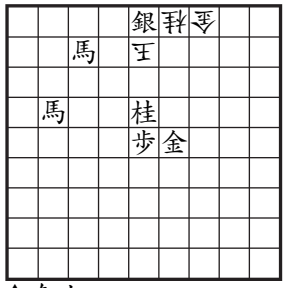
a) 23金打、21玉、31飛成、同玉、32金
まで5手詰
b) 33飛成、14玉、24金打、15玉、35飛成
まで5手詰
c) 14金打、同桂、12角成、24玉、34飛成
まで5手詰

初形に手を加えた形を問題a),b)…とする（初形そのものは解かなくていい）とき、その初形を「ゼロポジション」(Zeroposition)と呼びます。ゼロポジションは、ツインよりも条件が緩いので評価が落ちますが、こういうバリエーションもチェスプロブレムでは存在します。

この作品は個々の手順を見ただけでは意味がわからないですが、a)では飛、b)では角、c)では金を捨てて、残りの2枚の駒で詰める、という3枚の駒でのジラーヒになっております。

初形から手順がいくつか見えるのが、難点といえば難点です。

196



△なし
2解

42銀成、同金、51馬、同玉、62桂成
まで5手詰
42桂成、同金、61馬、同玉、62銀成
まで5手詰

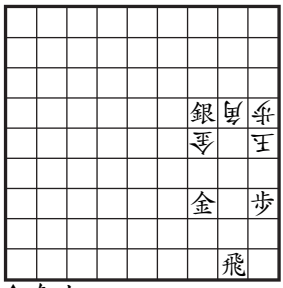
普通の詰将棋の場合は詰め手順が1通りですが、本作は2通り。

単なる余詰という評もあるかもしれませんが、2通りの詰め手順の相互の関連性を表現する、というのも、詰将棋ではいまだに研究されていない分野だと思います。

本作の場合は、2枚の馬のうち、3手目に1方を捨てるというもので、1種のカメレオン・エコーであるとも言えます。

もっとも、これまた試作品といった段階で、本格的な表現はまだまだ先のことだと思います。

197



△なし

b) 協力詰　5手

a) 16歩、同玉、27金、15玉、19飛まで5手詰

b) 26金、同金、16歩、同金、25飛まで5手詰

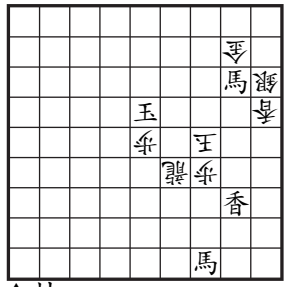
「協力詰」というのは、チェスプロブレムでの「ヘルプメイト」の訳語で、俗に言う「ばか詰」です。普通の詰将棋は玉方が詰まされないように抵抗するものですが、「協力詰」では、お互い協力して指定手数以内に詰める手順を求めるものです。

詰将棋では「無駄合」は行わないことになっておりますが、協力詰では無駄合ができる状態は、まだ詰みと認められないこととされております。

このためa)での19飛というのは、協力詰ではまだ詰みではありません。

したがって、協力して詰める場合は別の詰め方を要求されます。ちょっとしたパラドックスと言えるかもしれません。

198



△桂

b) △騎（ナイト）

a) 47桂打、同龍、57馬、同龍、45馬まで5手詰

b) 17馬、同香成、14騎打、同銀、24馬まで5手詰

a)はごくあたりまえの手筋物。桂で46をこじ開けて、57馬と捨てればおしまいです。

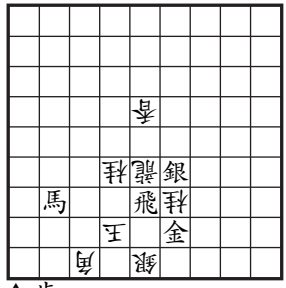
b)は持駒が、桂よりも強力な騎（チェスのナイト）になっております。桂馬跳びができるのは桂と同じだから普通は同じ順で詰むはずなのですが……。

初手47騎打は、同龍、57馬に46騎打！が可能になり、逆王手になるので、詰まないのです。

b)では初手馬を17に捨てて14をこじ開けるのが正解。同香成に14騎打と捨てて、24馬まで。

持駒が強力な駒になったのに同じ手順では詰まないというパラドックス。手順の対照性も加えてまずまずの出来かと思います。

199



△歩

b) 安南詰　5手

a) 58金、同桂成、69歩打、同成桂、77馬
まで5手詰
b) 67飛、同龍、69歩打、48玉、37銀
まで5手詰

a)では初手69歩打の打歩詰を打開するために58金、同桂成と呼んでくれば解決します。

しかし、b)ではその手が利きません。安南詰のルールは、「後ろの味方の駒があるときは、その駒の動きに変化する」というルールで、行き所のない駒というものが存在しないのです。

そのため、b)で、58金は、同桂！（あえて成らない）と取られて詰みません。

そこで、初手67飛！が正解。これに同玉は玉が桂の動きになりますので、77馬（76馬も可）で詰みとなります。

そこで、67同龍と取れば、玉が龍の動きに変わり、69歩打、と打つことができるようになります。

48玉の一手に37銀まで、と、「安南詰」らしい詰め上がりとなります。

ルールを変えたツインで、それぞれ2通りの打歩詰打開を表現したものです。

200



△なし

25玉、13馬、16金、27玉、37金
まで5手詰

これが正解に見えますが、実は、「先手番ではなく、後手番で、13馬、25玉、35飛、同金、14馬まで5手詰」が正解です。

この局面を先手番だとすれば、その一手前の局面は、何でしょうか？

成駒を打つわけにはいきません。また23馬→12馬というのは、23馬の局面で先手が王手を放置していた格好になり、ありえません。

玉が、16玉→17玉とか、28玉→17玉というように動いてきた、というのも、前者は金と銀での両王手？ですし、後者は28の玉に19馬という王手をするのは、ルール上不可能です。

以上から、出題図は先手番ではありえないわけです。

こういった出題図以前の局面を考えなければいけない問題は、チェスプロブレムでは「レトロ」と呼ばれる分野であり、詰将棋での応用は、知る限りは若島正氏の『華麗な詰将棋　盤上のラビリンス』（光文社文庫）の第一番だけです。

なお、本作の7筋以遠の配置は、後手番の手順での、余詰や駒余りを避けたものです。

以上、駆け足で200作を解説しました。こうしてみると、試作品ばかりで、本格的な表現は、まだまだこれからだと思います。

これからも、こういった新しい表現形態を追及していきたいと、考えております。